ソラからの
真実の歴史

「この情報は人間に初めて知らされました。宇宙（ソラ）のものより」



オーストラリア・マールロック

著者　白木 妙子　　編集　S・フミヒロ

ソラと星出版

ソラからの真実の歴史

著者　白木　妙子
編集　S・フミヒロ

ソラと星出版

表紙：
オーストラリア　アリススプリングスの
北方400ｋｍの砂漠にあるデビルス・
マーブルス。これを作ったイシカミは
マールロックと呼んで欲しいと言います。
この形は酸素と炭素の原子記号を
あらわしています。

裏表紙上：
青森県青森市　三内丸山遺跡。
イシカミの巨人が自分の存在を示すために
巨木を立てました。

裏表紙下：
京都府綾部市　私市丸山古墳。
イシカミの巨人であるトヨウケの墓。
遺体を丸石で覆って大切にしていました。
物部守屋と星延べの子供が葬られましたが
忘れ去られました。

カバー写真　ソラと星出版

著者略歴

白木 妙子
元・看護婦
京都府綾部市星原町生まれ
現在札幌市在住

ソラと星出版

ソラからの真実の歴史

著者　白木 妙子
編集　S・フミヒロ

はじめに

今の若い人たちの一部は、６０年前に日本国中を巻き込んだあの悲惨な太平洋戦争があったことさえ知らないと聞きます。またアメリカでの９・１１のテロ事件の時、ツインタワーだけでなくペンタゴンにも飛行機が突っ込んだとアメリカ政府から報道されましたが、その後どの写真にもペンタゴンに突っ込んだという大きな飛行機の残骸は写されていません。飛行機が突っ込んだというその後の報道では、消防車がペンタゴンの建物に水をかけている映像だけでした。このことだけでも本当にペンタゴンに飛行機が突っ込んだかどうか、誰が見ても変だと感じられますが、アメリカ政府からは誤報であったという報道はされていません。このように我々はマスコミによって知らされることを真実と思い込み、もしおかしいと思っても日々の生活に追われ、それらの異常なことは忘れ去っていきます。

現代ほど情報がリアルに繰り返し知らされることはこれまでありませんでしたが、それでも真実は隠されているということです。そしてそれらは噂として取り上げられるだけで、巨大な国の力で押さえられ、決して白日の元に晒されることはありません。現代でさえそのような状況なのに、大昔に書かれた歴史書が全て正しいとどうして言えるでしょうか？

今日まで傍若無人に振舞ってきたこれまでの権力者は、自分たちに都合の悪いことが書かれ

た書物をそのまま残すでしょうか？
文字が使われる以前に口伝えされていたことでさえも、権力者の都合の悪いことはどれだけの真実が伝えられているか全く分かりません。それで文献には載っていないからと、チャネリングのように特殊な方法で知らされた情報を頭から否定して、これまでの本に記載されているごくわずかのことから推測することだけの歴史が正しいと言えるでしょうか？

人間には“思う”という意識がありますが、“意識を持つものは広い宇宙の中で人間にしかない”とは決して言い切れません。人間以外に意識を持つものがいるということは、宇宙の見えない世界から言葉として発せられるということもあるということです。けれどもその言葉を受け止めることが出来る人の割合が、全人類に対してごくわずかなためなのと、言葉を発するものが千差万別のために、何が正しいか見極めることがとても困難です。

それを見極めるにはまず、

- 知らされることの筋道が通ること
- これまでに残されている事柄の解釈が出来ること
- その人の日常生活が反社会的でなく、正常に営むことの出来る人が発すること

などが重要な判断の基準となると思います。大昔にはそのような言葉は神の声として受け止められたために、それを未だに宗教として信じているのに対して、現在では科学技術だけを重要視するあまり、人間以外に意識は持つものはいないと決めてかかる人が多くなってしま

いました。

前置きが長くなりましたが、この情報は人間ではない宇宙に存在する“ソラの意識体”が、人間の口を動かすことによって発せられる言葉や、目を閉じていても見える図や模様であらわされるビジョンなどで知らされました。そのようにして知らされるということを理解していただくのは難しいことですが、平凡な者の想像だけでは言葉として物語ることは決して出来ないことばかりです。そして6年前から知らされている情報の内容は、次々と新しく知らされることで補足され、筋道はよりはっきりと通っていきます。その内容はこれまで隠されていた多くのことを明らかにしていますが、それは今まではわからなかったあらゆることのなぞ解きでもあり、現代まで残されている遺跡や古い行事などと連綿とつながっています。これまでの知識を一旦横に置いて白紙の状態でこの本をお読みいただくと、目からウロコがとれるようにこれまでのナゾが解けていきますし、現在起きているあらゆる現象ともつながっていきますのでお楽しみください。

見えない存在である“ソラの意識体”からの情報を、そのようなことはあり得ないと思われる方はフィクションとして読まれても、人間だけに意識があるのではないと思われる方はノンフィクションとして読まれても、それは読者の全くのご自由です。

新たに知らされた情報をまとめて今回の本として皆様にお知らせしようと思ってからも、次々に知らせて欲しいとソラの意識体から新たな情報が与えられ、一年半も出版を延期せざるを得ませんでしたが、世の中では異常な殺人事件などが後を絶ちません。これらは１９９８年まで地球を支配してきた星の意識体が人間の恐怖や不安感をエネルギー源としてきたために、その意識体がもういなくなったにも関わらず、その意識体の真似をするものが地球を征服しているためです。その意識体こそ爬虫類（竜やヘビ）の意識体で、これまで人間が神として崇めてきたものが、その本性をむき出しにしたからなのです。それらは思いも寄らないでしょうが、観音などという形で宗教に隠れて人間を支配していて、中国をはじめ日本のあちこちで竜神が跋扈していることで知らされました。縄文時代のような穏やかな時代が１万年以上も続いたのに、竜などの模様が描かれた鏡があらわれるようになってから今日まで争いが耐えないのは、この恐怖や不安感をエネルギー源としている存在が、陰に隠れて人間を支配してきたからなのです。今一度、慈悲などときれいな言葉に隠された宗教の恐ろしさを、しっかりと見直していただきたいと追記いたしました。

ソラからの真実の歴史　―目次―

第1章　宇宙物語　17
【宇宙で最初に誕生したものは物質ではなく意識である】　18
【宇宙に最初に誕生した「何？」という意識が「宇宙の大元」になった】　19
【あらゆる物質を構成する小さな原子にも意識がある】　20
【同じ思いを持つ原子が集まり、より強い意識を持つ星が誕生した】　21
【星の兄弟げんかで天の川は作られた】　22
【地球誕生。地球は宇宙の掃除をした星だった】　23
【宇宙から飛来した射手座のものが、珪素になり煮えたぎる地球を固めた】　24
【初期の地球を形成していた鉄と珪素と銅は結合出来なかった】　26
【酸素は手をつなぎ仲良くするという和をあらわす原子でヘリウムが変化した】　27
【超高温の地球を冷やしてくれたのは水星が送ってくれた水だった】　28
《小休止…　NaCl　とラッテ・ストーン》　29
【月は地球から飛び出して出来た】　30
【地球に酸素が作られたもう一つの理由は月への抗議のためだった】　31
【柔らかな射手座のものの身体を薄く伸ばした地殻が地球を覆った】　32

【射手座から降りた意識体の身体は山や岩になり「イシカミ」と呼ばれた】　33
【海に沈んだイシカミの一部が珪素から藻に変わり生物の元となった】　35
【いろいろな種類の生物はソラのものやイシカミの思いを形にあらわしている】　36
【星のケンカで勝った支配する星が地球を支配して恐竜ばかりの世界になった】　37
【恐竜は星たちが争いを楽しむために進化させられたので滅ぼされた】　39
【宇宙の大元の弟や外宇宙の王は争いをさせる事が好きだった】　40
【大きな支配星は宇宙全体から責められ１９９８年に滅ぼされた】　41
【地球も生き物で意識があり身体の分担がある】　42

第2章　太陽系の惑星　45
【太陽は地球に住む生物に暖かさと明るさを与えるために作られた】　46
【水星が送り込んだ水素が地球の酸素と結合し地球に水を与えてくれた】　48
【金星は金属を人間に与えたが、金属を取り合う人間を支配した時もあった】　49
【火星は火を使うことを人間に教えてくれた】　50
【木星は木を地球に与えてくれた】　51
【土星は柔らかい土を地球にプレゼントした】　52
【その他の太陽系の星たち】　53

【宇宙のみんなは地球を水だけの星にする計画だった】　54

第3章　射手座のイシカミ　55

【イシカミたちの故郷射手座の星は平らな星で穴が開いていた】　56
【射手座の意識体たちは原子の姿でやってきて地球に降りる直前に形になった】　57
【イシカミはクラゲのような身体の中で渦巻きを作り自分の分身を作った】　59
【イシカミの一番人間に近い形がイシジンだった】　60
【地球の地下全てにマグマがあるのではない】　61
【小さな地震はイシカミが動いて起きるが、震災級の地震は宇宙の計画である】　62
【イシカミの分身やその巨人たちが山や岩になった】　63
【イシカミの分身である巨人の仕事の一つに川を作ることがあった】　65
【ストーンヘンジはイシカミとシリウスの共同作品だった】　66
【巨石を並べて星の戦争があったことを伝えてきた】　68
【ナスカなどの巨大な地上絵は原子たちに見せるための生物の設計図だった】　69
【ソラのものの思いを形としてあらわしているものが動物や植物である】　70
【生物発生の説明を巨石遺跡がしている】　72
【鍾乳洞の不思議】　74

【イシカミは大陸の形さえも変えることが出来て人間にメッセージを残した】　75
【イシカミの巨人が人体の器官の設計図を作った】　77
【人間はストーンサークル、石室、円形劇場の中で創られた】　80
【人間の身体の不思議なナゾにはイシカミが関わっている】　82
【巨人は首の後ろの管から“お汁”という栄養をイシカミの穴から受けていた】　83
【ソラのものからのメッセージの一つが穀物模様（クロップサークル）】　84
【イシカミの中にも穏健派と急進派があり、オメガとゼータは急進派であった】　86

第４章　イシカミの子孫　87
【アトランティスはイシカミの子孫が作った理想の国だった】　88
【アトランティスの崩壊は大陸の原子が自ら宇宙に帰ったために起こった】　90
【レムノイアとムーノイアという伝説の大陸の存在は？】　92
【ヨルダンのペトラは日本と大きな関わりがある】　93
【支配された人間が哀れでイシカミが大泣きしてノアの大洪水が起こった】　94
【支配星のあまりの残酷さに、人間の意識が助けを求めて惑星を呼び寄せた】　95
《小休止…肺の働きと火炎放射器》　96

第5章　オーストラリアのイシカミ　97
【砂漠地帯のイシカミからのメッセージ】　98
【ウルル（エアーズロック）がイシカミそのものの姿である】　99
【カタジュ（マウント・オルガ）はウルルに近づこうとしてばらばらになった】　100
【オーストラリアのいろいろなイシカミたち】　101
【グレート・オーシャン・ロードの岩は、その形を保つのを我慢していた】　105
【アボリジニも支配星に支配されてヘビを神と思うようになった】　105

第6章　ヤマタイコク　107
【ヤマタイコクは四国の山上の台地にあり、大国主とヒミコが築きあげた】　108
【イシカミは農業の仕方を大国主に伝え、大国主がそれを皆に教えた】　110
【ヒミコは文字や紙も作り出し、ホツマツタエは女性の教科書だった】　112
【カタカナや漢字もヒミコたちが考えた】　115
【君が代と日の丸の意味】　119
【ヤマタイコクの風習やそれを偲ぶ風習は今日まで残っている】　120
【竜神の力をもらったジンムの誕生】　123
【ウガヤノフキアエとは鵜戸の洞窟を作った巨人である】　124

【若者はタケルノミコトを誘拐し、ヤマタイコクを裏切ってジンムに売る】 126
【ヤマタイコクの最後】 127
【ヒミコは奴隷にされる前に逃げ出して阿波の土柱で自殺した】 129
【ヤマタイコクを四国（死国）と呼ばせて封印し、その子孫を差別し続けた】 130
【ヤマタノオロチとは朝鮮の８人の使者を殺したジンムの言い訳の産物である】 131
《小休止…日本の民話の真相》 132

第７章　出雲と倭の国 133
【大国主は出雲でオオクニヌシとして生まれ変わり、出雲を大きな国にした】 134
【オオクニヌシとその息子タケルノミコトの別れ】 134
【忍耐を強いられた出雲の人々】 135
【人質のタケルノミコトは神武の元で育つ】 137
【神代文字やヘビ文字はビジョンで見せられて作られた】 139
【イシカミの巨人トヨウケは丹波の由良川沿いの私市円山古墳になった】 140
【ノアの洪水の時にイシカミの巨人がユダヤ人親子を日本に運んだ】 142
【ユダヤ人のムウラと大国主の娘イトが倭の国の基礎を作った】 143
【倭の国は由良川沿いに発展し石を大切にした】 144

【ノア親子の惨劇】 146
《小休止…百人一首は隠された歴史を歌にこめて伝えている》 149
【神武はイトを強引にヤマトへ連れ去り幽閉した】 152
【誘拐されたイトはニニギを生み、その後隠岐の島で余生を送った】 155
【ムウラの父親ノアは追放され放浪のすえ金沢で亡くなる】 157
【ヤソの風貌をしたムウラとイトの息子の山彦もヤマトに殺された】 159
【桃太郎の物語には隠された別な意味がある】 161
【ヤタガラスとは倭の国が栄えた地域の三叉路を架空の動物にたとえた名前】 162
【七支刀＝六叉鉾には刀の作り方が書いてある】 165
【物部守屋は仏教を受け入れなかったので殺された】 167
【丹後半島の丹後大国は、ムウラ亡き後はヤマトの支配下になった】 169
【ヤマトに協力する丹後とヤマトの両方から攻められて倭の国は滅びた】 171
《小休止…四隅突出型墳丘墓は巨人の亡骸であり初めは丸かった》 172

第8章　ヤマト 173

【ヤマトは支配星が作った国で“矢で治めて魔を友とする”国だった】 174
【イシカミの分身の亡骸を後年の権力者が自分の墓にしたものが古墳である】 175

【ヤマトの巨石遺跡は巨人が作ったが悪い意味で伝えられた】 176
【支配星は水を支配することで人間を支配しようとした】 179
【ヤマトは神道と仏教の力でイシカミを封印し領土を広げた】 180
【神代文字やヘビ文字はヒミコの文字を隠すために作られた】 180
【邪馬台国はヤマタイコクの名前を真似した後年の国】 181
【魏志倭人伝の倭国への道程の記録は案内人が遠回りして教えた】 183
【蘇我は仏教と共に朝鮮から来て巨石信仰を排除した】 184
【推古天皇は支配星に支配された女性でイシカミの排除を強行した】 185
【聖徳太子も支配された人で、支配するのに都合の良い制度を作った】 186

第9章　イエスからクラノスケまで 187

【イエスは磔で死なずにエルサレムを脱出し、青森に来てイスキリと名乗った】 188
【イスキリは茨城で滞在し、茨の冠の意味を知らせて書き物を残した】 190
【大坂の意味と因幡の白ウサギ】 191
【一寸法師は仁徳天皇でイスキリの養子だった】 192
【坂之上田村麻呂は戦わずに東北の者と和平を結んだがアテルイは殺された】 195
【菅原道真はヒミコの文字やヤマタイコクのことを知って左遷された】 196

【小野小町も星述べが出来、巫女から公家の養女になり人麻呂と出会った】 197
【柿本人麻呂と小野小町は石見の国で一緒になった】 199
【歌舞伎はヤマタイコクの悲劇を芝居にしたのが始まり】 201
【空海などの僧侶は支配星に支配されて悲惨な最期にさせられた】 202
【日蓮は外宇宙の王で、女王と共に人間を支配しようとやってきた】 203
【ジンギス・カーンはイシカミの山がなくても支配星は力があると思わせた】 204
【義経と静御前は星述べだった】 205
【アイヌの神様オキクルミカムイは義経だった】 206
【明智光秀は自分が犠牲になり残酷な信長を討ち果たした】 207
【浅野家と吉良家は仲間同士であったが天皇の策略にはまった】 208

第１０章　明治維新 209

【明治維新の真相も隠されていた】 210
【近藤勇は板橋で処刑されずに西郷隆盛の部下になっていた】 210
【土方歳三は明治天皇になった大室寅之助の知り合いだったが反発した】 211
【坂本竜馬は伊藤博文にだまされてテロリストになった】 212
【大室寅之助は暗殺された天皇の身代わりで明治天皇になった】 212

【西郷隆盛は中国からの侵入に備えて軍備を強化した愛国者だった】 213
【伊勢神宮と皇室のつながりは巫女の言葉であった】 215

付録 217
【ソラのイスラム物語】 217
【ソラのイエス物語】 223
【友達物語】 233

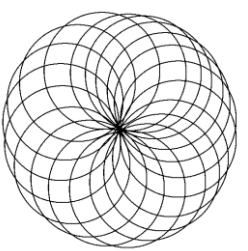
あとがき 234

第1章　宇宙物語

【宇宙で最初に誕生したものは物質ではなく意識である】

私たちが宇宙というものを思い浮かべる時、まず岩の塊のような物質が空間に浮かんでいる様子を想像するかもしれませんが、宇宙の広大な空間の中で最初に誕生したものは、「形あるもの＝物質」ではなくて「思い＝意識」でした。宇宙には単純な一つの次元だけでなく無数の次元が存在し、その中には意識だけの次元も存在しており、その意識の次元の壁を破り出てきたのが物質の次元で、その中に今の私たちが住む地球があります。

地球においても私たちが知覚し得ない無数の次元が存在するようですが、そのことを今の人間の想像力で考えることは不可能なようで、ソラのもの（※1）も私たちに説明をするのは難しいようです。ただ穀物模様の一つを使って、ソラのものからこの次元のことを説明されました。



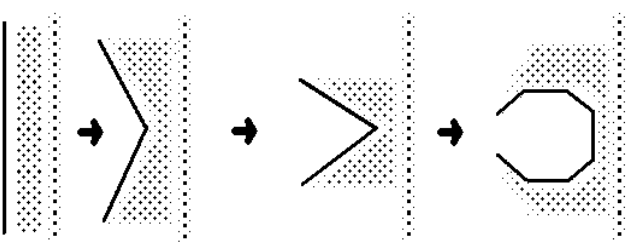
たくさんの次元がすぐそばに
隣り合って存在します。
（穀物模様）

1　名の無い小さな星たちの集合意識で、地球を見守り助けてくれています。

【宇宙に最初に誕生した「何？」という意識が「宇宙の大元」になった】

真っ暗闇の宇宙に最初に誕生したものは「何？」という意識でした。その意識は自分以外のものが同じ宇宙に存在するか知りたいと思い始め、自分とは違う存在を挟んでつかまえて確認しようとする「カスタネットのような意識の動き」をし始めました。

その「つかまえようとする意識」と同じ意識の中に「それから逃げようとする意識」が生まれ、同一の意識の中に共存する「二つの相反する意識」は、連携した「ものすごい早さの渦巻き状の動き」となって極限まで収縮し、それによって超高熱を発し、そこに宇宙で初めての形を持つ物質「原子」(※2)が生まれました。一方、宇宙に最初に誕生した「何？」という意識は“宇宙の父なる意識”という意味で「宇宙の大元」と呼ばれ、宇宙の大元はその後もたくさんの原子を作り出していきました。



宇宙に最初に誕生した、何かをつかまえようとする意識の動き

2　原子は物質を構成する最小の単位で、原子核と電子から構成されます。

【あらゆる物質を構成する小さな原子にも意識がある】

あらゆる物質を構成する原子は原子核と電子から成り立っており、原子核の周りを電子が猛スピードで回っています。なぜこのような動きをするのかというと、「原子核が電子に回ってねと頼んでいるから」とソラのものは教えてくれました。これは驚くべきことですが、電子が原子核の周りを回っていることは事実ですから、そんなことはありえないと一概に否定することは出来ません。宇宙がその原子たちで満ち溢れているとすると、宇宙とは真っ黒な空間にただ岩が浮遊しているというものではなく、にぎやかな意識が一杯集まっている空間ということになります。

原子に意識があることをふまえて考えると、水の結晶に同じ形が二つとないことや、微小の藻の模様が様々であることや、自然に出来たにしてはあまりに不思議な形の岩が存在することなど、その謎が解けていきます。

人間の体は小さな細胞が集まってできており、その細胞はもっと小さな原子が集まってできています。いろいろな形や大きさの細胞が集まって、その集まり方の違いによって「人間」になったり、「動物」になったり、「植物」になったりします。さらには、普通は生き物とは考えない茶碗や自動車なども、小さな部品が集まってできたもので、これらも原子の集まったものという点では共通しています。

【同じ思いを持つ原子が集まり、より強い意識を持つ星が誕生した】

宇宙で最初に誕生した原子はヘリウム（※3）でした。なぜヘリウムかというと“へ”の文字の平らな形があらわすように、宇宙では原子たちは皆平等だったからです。

原子という体を持った意識は、意識だけの状態の時よりも更に強い思いを発揮出来るようになりました。大元が作ったたくさんの原子たちはやがて宇宙全体に増え広がっていき、宇宙は原子の霧で満ちあふれ、それに伴い宇宙いっぱいに様々な意識が拡大していきました。そのうち宇宙に広がった様々な原子たちは「同じ思いを持つ仲間同士で集まりたい」と思い始め、同じ思いを持つたくさんの原子たちがいっせいに並ぶことによって渦巻きを発生させました。その渦巻きはどんどん集まり収縮して密度を増していき、高密度になった渦巻きの中の原子たちは次第に窮屈になり小さくなると「パンッ！」と跳ね、その時生じた光に宇宙の原子たちがくっ付いて、そこに新たな物質「星」が誕生したのです。星は同じ思いを持つ原子たちが宇宙中からどんどん集まり、くっ付きあっていくことにより大きな星になっていきました。

3　宇宙で水素についで2番目に多い原子で、他の物質と簡単には化学反応を起こさない性質があります。

【星の兄弟げんかで天の川は作られた】

一番初めに作られた星は射手座（※4）の星たちでした。大元は出来上がった星たちを、幾重もの円によって構成される三日月状の模様を描くように並べていきましたが、並べられた星たちはじっと動かずに並んでいようとするオリオンなどの星たちと、並んでいることを嫌がり大元から離れようとする星たちとに分かれ、やがて並んでいることを不満に思う星たちの意識が宇宙中に充満しました。星たちは自分の意志で軌道を変えることが出来たので、並べられることに不満を持つ星たち同士が集まって天の川になりました。



真中は宇宙の大元で星の戦争前の宇宙の姿です。
周りの星は射手座の星たちです。

4　射手座は銀河系（天の川銀河）の中心にある星の集合で、射手座の星たちの意識も様々な考えを持ったものがいるようです。

【地球誕生。地球は宇宙の掃除をした星だった】

宇宙には意見が合わなくて壊れて分解した星たちや、並べられることの不満から爆発して燃えた星たちのカスが漂っていました。そしてその星のカスとは「自由に動きたい」と思う星たちの一途な思いである、並べられることへの不満から生み出された鉄の原子たちでした。この鉄の原子たちは、宇宙の並べられたくない星たちが円の軌道から外れようと無理な動きをしたために生じた大きな渦巻きの動きによって中央に集められ、イリジウム（※５）の作用によって固められて一つの塊と化しました。

この意識を持った塊は宇宙に充満した不満の思いを、自身の持つ鉄の磁力で集めて宇宙をきれいにしようと宇宙を漂いながら集めてまわり、やがて真っ赤に燃え溶けた鉄の塊へと変化していきました。鉄の塊は宇宙の不満の思いを集めて回り宇宙をきれいにしましたが、そのドロドロと真っ赤に燃えた姿ゆえに他の星たちからは「あっちへ行って」と嫌われ、仕方なく星たちのいない銀河の外に出ようと思いました。

５　銀白色のもろくとても重い金属で、隕石にも多く含まれているものがあります。恐竜が絶滅した６５００万年前の地層からも多く発見されています。

ところが大元の分身であるホシノミナ（星の宮、※6）が、宇宙の星たちが自分たちの抱いた壊れ物の存在を忘れないためにも、その証拠となる鉄の塊に銀河に残って欲しいと頼んだため、その鉄の塊は銀河の端に留まることにしました。その鉄の塊が「地球」の始まりです。

そして地球が宇宙の希望の星になるように協力をして欲しいと、大元は宇宙の原子たちに頼みました。それで地球を助けるために同じ思いを持った原子たちが集まり、太陽系の惑星が生まれました。

【宇宙から飛来した射手座のものが、珪素になり煮えたぎる地球を固めた】

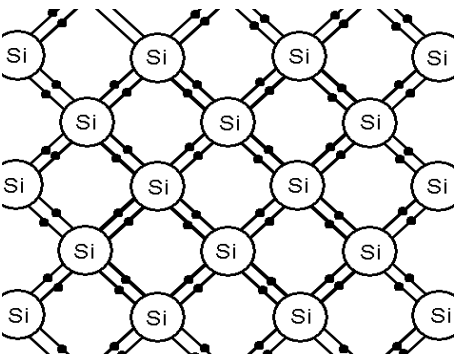
宇宙の大元とその分身であるホシノミナ、そして宇宙で最初に作られた星である射手座の意識体たちは、地球を宇宙の希望の星にしたいと思いましたが、地球は燃え尽きてしまいそうな勢いで燃え続けていました。そこで射手座の意識体たちが「自分たちが地球へ行って燃

6　宇宙の大元の意識から一部が分離した意識体です。「宮」という漢字は、イシカミのことを口から口へと伝えることをあらわす「呂」という漢字をウ冠でふたをしているため、この本では星の宮のことをホシノミナと書いています。

えたぎる地球を固めましょう」と、彗星となって次々に地球へと突入しました。

最初に射手座から降りた意識体たちは、今の日本の北海道十勝地方沖に降りました。この彗星を構成していた様々な原子は、高温に燃えたぎる地球へ突入すると珪素（※7）という原子へと形を変えました。なぜ珪素に変化したかというと、宇宙を漂うどろどろに溶けた「丸い地球」には何か「四角いモノ」が入れば、地球自体が安定して漂わなくなるのではないかと考えたためでした。

射手座の意識体たちが変化した四角い珪素は、予想通りしっかりと地球を安定させたために地球は宇宙を漂わなくなりましたが、地球は未だ煮えたぎっていました。



珪素の結晶の構造

7　地球に最も多く存在する原子のひとつでシリコンとも呼ばれます。岩石に一番多く含まれます。

【初期の地球を形成していた鉄と珪素と銅は結合出来なかった】

最初は鉄の塊であった地球に、射手座の意識体たちが彗星となって突入して珪素が生まれ、その次に地球に誕生した原子は銅でした。銅は未来を知ることの出来たソラのものたちが、「いずれ地球に住むであろう人間たちが、生きていくために必要な道具を簡単に作ることの出来る材料となるものを作って欲しい」と願ったために、その思いに応えて鉄の原子たちが一部を変化させて作りだしたものでした。

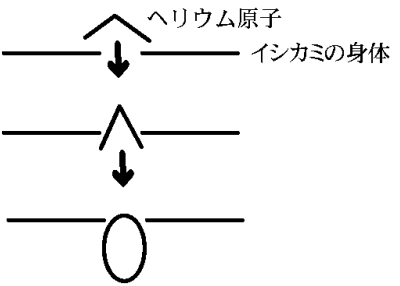
当時地球に存在した鉄と銅と珪素の原子たちは、互いに結合しようと試みました。けれど、鉄と銅は結びつくことが出来ても、珪素はどうしても結びつくことが出来ませんでした。この三つの原子の意識たちは、それぞれにごまかすことが大嫌いだったためになかなか結びつくことが出来ず、結合したり離れたりを繰り返していましたが、やがてそれぞれの原子は結合することを諦めて、自分の分身である原子を他の原子よりも多く増やそうと努めるようになりました。

ご存知の青銅は銅と錫の合金で、柔らかく細工がしやすいので道具が簡単に出来ました。けれどもなぜ銅の一部が錫に変わったかというと、銅は柔らかすぎたので一部の銅はもっと硬い物になろうと錫に変わったのです。

【酸素は手をつなぎ仲良くするという和をあらわす原子でヘリウムが変化した】

鉄と珪素と銅はそれぞれが自分の分身の原子を増やしていましたが、３つの原子の間で少しずつ意識の変化が起こり始め、「自分に似たものばかりでは面白くない。自分とは違う思いを持ち、なおかつ、自分たちを結びつける働きを持つ原子が欲しい」と思うようになりました。

一方、その後も燃えたぎる地球を静めようと、射手座の意識体たちが降りて来ていました。意識体たちの身体は宇宙の原子たちが集まることによって作られ、その中にはヘリウムの原子も含まれていました。ヘリウムの原子は、和（輪＝Ｏ）が大切だというホシノミナの願いを叶えようと、クラゲのような身体をした射手座の意識体たちの身体の狭いところを通り抜け、丸くなって外に出て酸素（＝Ｏ）になりました。そして、酸素が出来たおかげで三つの原子は他の原子と結合することが可能となりました。



イシカミの身体を通り抜け酸素になるヘリウムの原子（ビジョン）

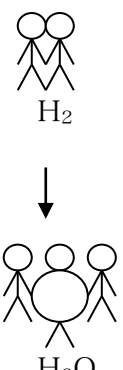
【超高温の地球を冷やしてくれたのは水星が送ってくれた水だった】

射手座の意識体たちが地球へ行っても、どろどろの地球は燃え続けて固まらなかったため、宇宙の大元は燃え続ける地球を冷やすための手段として水星を作りました。

水星の意識体たちは地球に降りて行こうと思いましたが、あまりにどろどろなので一人で行くのは嫌だと思い、手をつないでいく水素（H）という原子に姿を変えて地球へ降りて行きました。

地球には酸素が存在したので、水素は酸素と結合して水（H_2O）を作ると、それで地球を冷やそうとしました。けれど、水だけでは燃えたぎっている地球を冷やすには充分ではなかったため、より強く冷やすためにナトリウムと塩素の原子にも応援として加わってもらいました。

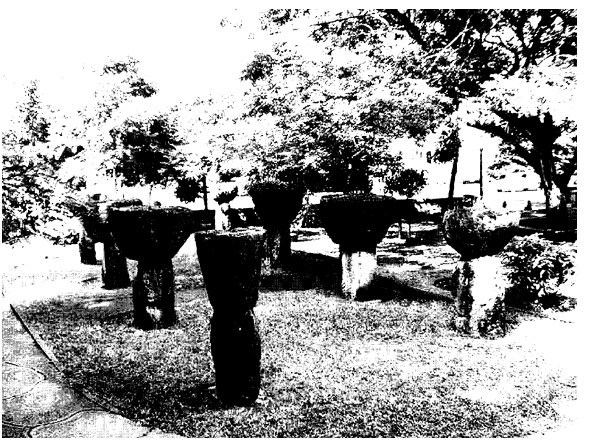
その雨は地球の周りからどんどん降りたので、ナトリウムと塩素の結合した塩は、海だけでなく山の中にも岩塩としてあるのです。ホシノミナの願いによりその後も水素たちは滝のようにどんどん水星から降りて来たために、それによって出来た水で地球はすっかり冷やされて固まり、地球は「水に覆われた星」となりました。



《小休止…　NaCl　とラッテ・ストーン》

地球上で物質を構成している原子は、いつもきちんと並んでいなければならないので、その原子が疲れたときに活力を与えるものが NaCl です。Ｎはエネルギーが天と地を結んで降ろされることをあらわした文字です。ａはアトム＝原子をあらわし、Ｎａとは原子にエネルギーを与えるという意味です。Ｃｌの Ｃは炭素として活動し、そのＣはＯ（酸素）が燃えた後の形をあらわします。ｌ（エル）は筆記体で書くと頭と足がある形 ℓ になり、それは人間をあらわしています。

グァム島にあるラッテ・ストーンという石は、このｌ（エル）をあらわしています。ラッテ・ストーンの写真を見たときに、それを作ったイシカミが、この NaCl のことを知らせてきました。



ラッテ・ストーン（グアム島）

【月は地球から飛び出して出来た】

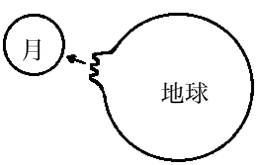
月は元々オーストラリアのフリンダース山脈の一部でした。けれども星たちの不満の思い（鉄）で出来た地球にいることを一部のものが嫌がっていたために、地球はきれいな丸になれませんでした。それを見てシリウスの女王が「それなら地球の外に出て、地球を応援すればいいのです」と言ったので、不満分子が宇宙に飛び出して月になりました。

フリンダース山脈の中央部は押し寄せてくる波のような形になっており、先頭はぽっかりと穴が空いて何かが飛び出したようになっています。あたかもお餅をひねり出したように月は出て行きました。

月は地球の潮の干満を作り、出産にもエネルギーを与えて私たちを助けてくれます。しかし月は地球をすぐ近くから見渡せるので、自分の方がえらいと思いかつては支配星の仲間に入っていました。けれども今はそのことを反省し、太陽系の星と共に地球を応援してくれています。



地球から飛び出した
月をあらわす穀物模様



月が飛び出すビジョン

【地球に酸素が作られたもう一つの理由は月への抗議のためだった】

地球に酸素が作り出された理由は二つあります。一つは和が大切というホシノミナの願いをヘリウムの原子が叶えるためです。二つ目の理由は、地球にある原子たちが地球を飛び出していった月にある原子たちに対して、「地球に残った私たちは手をつなぎ輪になって仲良くしています」ということを知らせるためなのです。

ストロマトライト（※8）という枕の岩のような生物が水（H_2O）を水素（H_2）と酸素（O＝輪）に分解し、それによって出来た酸素の原子（O＝輪）同士が手を結び（結合し）、酸素の分子（O_2）を作り出しているのです。この酸素（O_2）のおかげで、地球は生き物が住める素晴らしい星となったのです。

また、生きたストロマトライトが西オーストラリアに現在でも多く見られるのは、地球を嫌がって飛び出していった月が東オーストラリアにいたことをあらわし、西オーストラリアでは今も光合成を行って酸素を出し続けているストロマトライトが、地球から飛び出してい

8　光合成を行うバクテリア（藻）で、その分泌物に炭酸カルシウムが付着して岩に成長します。太古には地球のあちこちに生息していましたが、現在では西オーストラリアにだけ生息しており、西オーストラリア北部のシャーク・ベイにあるハメリン・プールのものが有名です。

った月に抗議をしているのです。この他にもオーストラリアには、月がシリウスの女王の勧めで地球から飛び出したことをあらわす岩や、地球をあらわす象の鼻の形の岩などがあります。（※９）

【柔らかな射手座のものの身体を薄く伸ばした地殻が地球を覆った】

地球が少し冷え始めた頃に降りてきた射手座の意識体たちたちは、たくさん集まって合体し巨大な粘土のような塊になり、それから出来るだけ薄く広く伸びた膜のようになり、ドロドロに溶けた地球を覆いつくしました。その膜のつなぎ目が海嶺（※１０）になり、それが合体した射手座の意識体たちの手足となってお互い連絡をとるので、地震がよく起こる地帯になったのです。海溝（※１１）は地球へ移住するように勧めた射手座の意識体が、地球に降りて来てあまりに辛い星だったので、他の射手座の意識体たちを誘ったことを深く後悔し

９　第５章　オーストラリアのイシカミ【オーストラリアのいろいろなイシカミたち】　参照。

１０　海底山脈でマントルが地下から上がってきます。東太平洋海嶺・大西洋中央海嶺などがあります。

１１　海の底が溝状に数千ｍ以上深くなっている場所です。日本海溝、マリアナ海溝などがあります。

て深く海に潜ったために出来たのです。このようにして地球を覆う地殻が形成されていきました。

地球を覆う地殻が形成され、その上に降りてきたイシカミたちが山や丘になり、柔らかかったイシカミの身体でいろいろな形の岩を作って、イシカミたちが降りてきて地球を固めたというサインを残しておきました。それから土星が土を送りこみ植物が生えるようにして、木星が木を送り込みました。

ハワイ島が毎年８ｃｍ日本に近づいているのは、ハワイ島の射手座の意識体たちが日本に近づこうとしているからなのです。ハワイ諸島はアリューシャン列島や沖縄列島のようにつながる射手座のものがそばにいないので、少しでも日本列島に近づこうとしているのであって、プレート理論で「自然に」動いているわけではないのです。

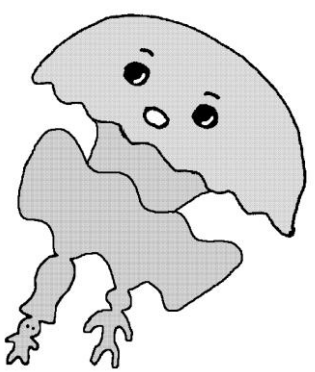
【射手座から降りた意識体の身体は山や岩になり「イシカミ」と呼ばれた】

水星の協力により地球がすっかり固まった後に降りてきた射手座の意識体たちは、地球の近くまでは原子の形で降り、地球に近づいた時点でタコクラゲのような形に姿を変えてフワフワとゆっくり降りました。なぜそのような形で降りたかというと、最初に地球に降りた射

手座の意識体たちは、ものすごい速さの彗星となって地球へ降りて、地球の奥深くにはまり込んで地上へ出られなくなったため、後から来る意識体たちには出来るだけゆっくり降りるようにと呼びかけたからでした。

射手座の意識体たちは自分たちの身体を作るために、「宇宙中の原子」に呼びかけて集まってもらいました。地球は「宇宙の壊れ物を引き寄せるお仕事をする鉄の原子の集まり」で出来ていたために、射手座と違って強い引力がありました。そこで、それらの原子たちは地球の近くで集まって結合し横に列を成すと、地球の引力に引っ張られて地球へと降り、地上で結合した原子の列が重なりあうことによって「身体」を形成しました。

山のように大きく、柔らかい身体を持つことが出来た射手座の意識体たちは、その大きさのために地上では動くことが難しく、また引力によってその柔らかい身体は引っ張られ、トロトロに溶けたお餅のように身体のしずくがポタポタと落ち、その落ちた部分は硬く固まり石へと変化していきました。それで射手座の意識体たちは、後に石に変わった神という意味のイシカミという名前で呼ばれるようになりました。またイシカとは「意志



イシカミの分身や
巨人の発生の様子

を持った力のあるもの」をあらわし、ミとは「肉体、意識、生きようと思うエネルギー」の三位一体をあらわしています。

イシカミの身体は宇宙中の原子に集ってもらって作られたものなので、私たちは宇宙に行かずとも、この地球で宇宙中の原子を石の中に見ることが出来るのです。

【海に沈んだイシカミの一部が珪素から藻に変わり生物の元となった】

煮えたぎった地球に降りてきたイシカミたちは高温のためにSi（シリコン、珪素）になりました。しかし同じ物質だけでは面白くないと思い、何とか違うモノになろうとカギホックのようにして丸い０（酸素）と結合しました。なぜ酸素と結合したかというと、０（酸素）は和＝輪を大切にするので、他の原子と結合して更にたくさんの輪を作ることが出来たためです。

長い年月の後、海に沈んだイシカミの一部は固まった岩のままでいることが嫌だと思い、自分の身体の原子に自由に動いても良いと指示をしました。その指示を出された原子たちは気の合ったもの同士で並び、内側に集まろうとすることでラセンが出来ました。それがＤＮＡとなり、ついには動ける生物である藻になったのです。

その後イシカミの原子たちは、藻から動物プランクトンや魚などの大きな生物に進化していきました。その様子をソラから見ていた大きな星たちは、その生き物を自分たちの思い通りにしようと操作をして更に進化させていきました。大きな星たちの力はイシカミの力より強かったので、イシカミの和を大切にしようという思いとは反対に、地上では争うばかりの恐竜が増えていったのです。

【いろいろな種類の生物はソラのものやイシカミの思いを形にあらわしている】

ソラのものたちは、自分たちの思いを様々な形にあらわしたいと常々思っていましたが、「思いを形にあらわせる星」は「地球」が出来るまで宇宙には存在しませんでした。

そこで、地球が固まると、ソラのものたちは希望の形や色をイメージし、宇宙に充満する「形になってあらわしたいと思っている原子たち」に呼びかけて、自分たちの思いを形にあらわそうとしました。ソラのものたちが、どのような形（生物）になって欲しいかを原子たちに伝えると、「ソラのものたちのイメージを具現化したい」と思う原子たちはそのままの原子の姿で地球に降り、地上で原子同士の結合によって形を作り、ソラのものたちのイメージ通りの新しいモノ（生物）になりました。

原子が地上で生物として形を持つ時、最初は宇宙の大元とホシノミナを表す白い色で作られ、それから原子たちはソラのものが想像した通りの色をつけて、新しい生物として誕生します。新しい生物というのは、地球に存在するものが地上で進化したのでも、宇宙から「そのままの形を持った状態」で地球へ降りて来るのでもなく、原子たちが地上で結合して作り出されます。また、白子（アルビノ）と呼ばれるものは色がつけられる前の状態と考えるとわかりやすいでしょう。

【星のケンカで勝った支配する星が地球を支配して恐竜ばかりの世界になった】

思いを自由に形にあらわすことの出来る星である地球は、その星が出来たときのままの形とその星の意識だけで構成されている他の星たちにとっては非常に魅力的な存在でした。そのため星座の名前を持つ大きな星のグループなどは、小さな地球を自分たちの思い通りに支配しようと思い始めたのです。それらの星の意識を「支配星」と呼びます。支配星はこれまで精神世界で有名だったプレアデス（＝スバル）やその部下の星たちです。プレアデスは「デス」と言わせることで人間に自己暗示をさせて、イシカミのことを信じることが出来ないように強固な固定観念を与えてきました。「プ・レア・デス」とは「フーと息を吹きかけて人間

を焼き殺す」という意味なのです。（※12）

また精神世界で有名なシリウスは、他の星がこれまでその名前を騙（かた）っていたのです。シリウスは“知り臼”という名前から分かるように臼がイシカミをあらわし、これまでイシカミの働きを認めて人間に協力やアドバイスをしてきました。シリウスはさまざまな科学を人間に教えて、人間がより快適に生活出来るように応援してくれました。また、シリウスはイシカミの巨人たちに、イシカミの遺体が柔らかなうちにいろいろな意味のある形の岩を作るように教え、巨大な石の建築や石像などの作成を指導してきました。しかし２００５年５月までシリウスは支配星の仲間だったと、星座の名前を持つ星たちから言われて騙されていましたので、これまでホームページなどでお伝えしてきたことを訂正いたします。

一方太陽系の星のグループやソラのものたち（名の無い見えない星の意識の集合体）、星座の名前がある星でも「射手座、オリオン座、大犬座、子犬座」などの星たちは、地球を見守り地球の自立を助けてあげようと思いました。

そこで宇宙では支配星のグループと、地球の自立を手助けしようという星たちとのグループに分かれて争いが起きました。支配星のグループのエネルギーはとても大きくソラのものたちよりも力があったために、その争いは支配星のグループが勝ち、支配星たちは争いばか

12　インターネットのホームページ上では、この理由から「プレアデナイ」と表記しています。

りする恐竜を地球へと送り込んではそれらが争うのを見て楽しんでいました。そのため地球は、宇宙の希望の星とは程遠いものになってしまいました。

【恐竜は星たちが争いを楽しむために進化させられたので滅ぼされた】

大きな星たちはそれまで思うという意識だけの世界で退屈をしていたので、現実に恐竜たちが争うのを見て楽しむようになりました。また大きな星たちは次々と新しい恐竜を考え、恐竜を体験したいと思う原子たちがその恐竜になっていきました。

宇宙の大元は争いばかりする恐竜だけが増えていく地球を見て、地球を何とか希望の星にしようと思い、自分の分身であるホシノミナに掃除を頼みました。ホシノミナは宇宙の原子たちに協力を頼み、地球を争いのない星にしたいという強い思いを持つ原子たちに協力を求めました。その呼びかけに応じて集まった原子たちはたくさんの稲妻となって地球に駆け下り、地球上の全ての恐竜を感電死させて絶滅させました。恐竜を一掃して疲れたホシノミナは、地球の脳にあたる日本の北近畿地方にある星原（※１３）に降りるとそこで眠ってしま

１３　京都府綾部市星原町です。

いました。ホシノミナと稲妻を作って地球へ来てくれた原子たちのおかげで、地球はようやく静かになりました。

一方地球は自分の身体の上で恐竜が争っているので騒がしく思い、顔を上に持ち上げてみたために地球最初の地軸移動を起こし、地軸が傾いて大陸分断の原因ともなりました。南極に恐竜の骨があるのは、恐竜時代には赤道が南極を通っていたためですが、恐竜が滅びた後に地軸が数回移動して現在の赤道の位置になりました。



初期地球の赤道の位置
(大陸の形は今と違います)

【宇宙の大元の弟や外宇宙の王は争いをさせる事が好きだった】

一方支配星の中に「宇宙の大元の弟」や「外宇宙の王」と呼ばれるものがいました。宇宙の大元の弟は恐竜を戦わせることが好きだったので、ホシノミナによって恐竜を滅ぼされたことが気に入らなく、ホシノミナの後を追いかけるという意味の「追いの宮」を地球に送り込み、ベガ星やリラ星を部下にして陰に隠れて人間を支配していました。

また外宇宙（※１４）の王はにぎやかな銀河系の宇宙が面白いので、星同士を争わせて楽しみ、プレアデスを支配星に育てて地球を支配させるようにしてきました。そして権力者などにエネルギーを送り、悪い者はより悪く、さらに運も強くさせて人間を支配していましたが、そのことをソラのものが見つけたために、宇宙の大元の弟も外宇宙の王も宇宙の大元に帰ってもらいました。

【大きな支配星は宇宙全体から責められ１９９８年に滅ぼされた】

大きな支配星のプレアデスはより強く人間を支配しようと、人間の肉体までも支配するようになりました。人間の細胞に働きかけてスターチャイルドやインディゴチルドレンと呼ばれる特殊な人間を作り出すなど、人間の妊娠や出産にまで影響を及ぼすようになったのです。そしてそれは人間を直接に支配してはならないという宇宙の法則に反することでした。そのため大きな支配星は宇宙全体から責められることになり、支配星たちは１９９８年に滅ぼされました。けれども支配星たちは、争い好きな意識や自分を崇めて欲しいという意識の固ま

１４　私たちの住む天の川銀河系以外の宇宙。

り（エネルギー体）を地球に残していきました。そしてそれらが現在も人間同士を争わせることを楽しんでいるので、世界中で争いが無くならないのです。また自分を崇めて欲しいエネルギー体は宗教の中に巧妙に入り込んで存在しているので、宗教を信じる思いが強ければ強いほどそのエネルギー体は大きくなっていくのです。

一方地球の大掃除をしたホシノミナは１９９８年まで完全に忘れ去られていましたが、大きな支配星がいなくなってから人間とコンタクトを取ることが出来るようになり、ソラからの情報が伝えられ始めたのです。



支配星の角をあらわす穀物模様
支配星の星が地球を取り囲んでいます。前の星はプレアデス、後ろが外宇宙のものです。
外側の輪が名のない星です。

【地球も生き物で意識があり身体の分担がある】

私たちが暮らす地球は、宇宙を漂いながら宇宙に拡散した不満の思いを集めて回るようなとても優しい思いを持つ星であり、ソラのものたちの思いを形にあらわすことの出来る、宇宙にたった一つの星でもあります。そして、私たち人間の身体と同じように様々な機能を持っています。

また地球はゾウの形であらわされます。ゾウの長い鼻は地球の引力をあらわし、大きな耳を動かすことで出来る風は地球の周りを吹く偏西風をあらわし、石のような白い牙はボートをこぐオールで地球が回っていることをあらわしています。それで地球の耳はインド、長い鼻はインドネシア、鼻の付け根のアチェ州近辺が口になり、スマトラ沖地震は地球が口で叫び声をあげたことになります。またフィリピンは腎臓にあたり、地球が排泄物を一生懸命に浄化しているのに、人間はそのことに全く気付かないので、地球が怒ってピナツボ火山が噴火したのです。

地球の身体の機能を場所ごとに紹介します。

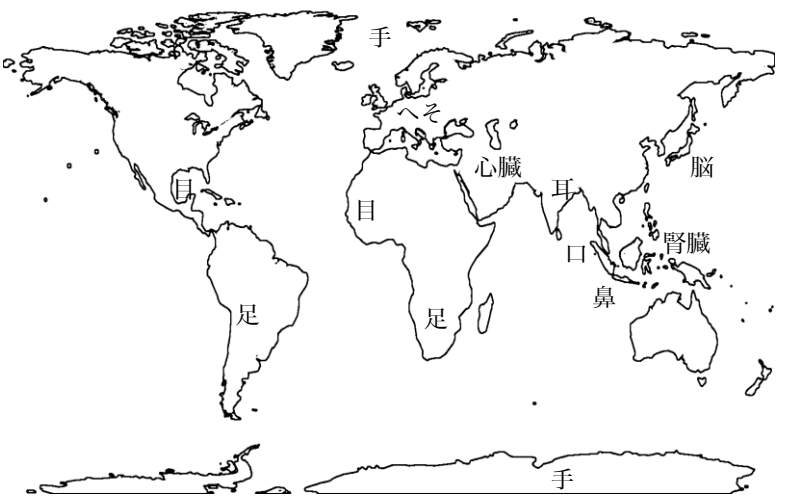
「脳」にあたる場所は日本、

「心臓」はエルサレム、

「目」はモーリタニアの地球の目とメキシコ湾、

「手」は北極と南極、

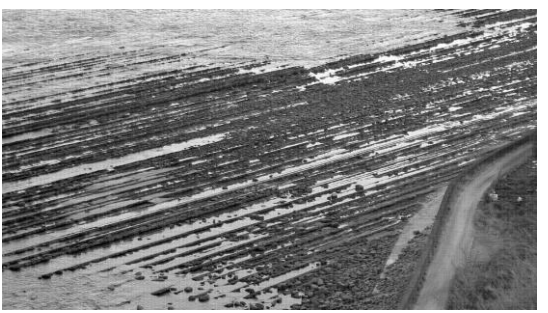
「足」は南アメリカとアフリカ、



「鼻」はインドネシア、
「腎臓」はフィリピン、
「口」はスマトラ沖、
「耳」はインドの国の形、
そしてギリシャのデルフィーが「おへソ」です。

その他にもまだまだあります。硫黄を出す山は、地球に降りてきたイシカミたちが宇宙から得たエネルギーのカスを宇宙に返すために、そこから排出する場所です。また宮崎県日南海岸にある、波状の岩が何ｋｍも続く鬼の洗濯岩は地球の背骨のつもりで作られ、間欠泉は地球の動脈、ボッケと呼ばれるものは地球の細胞で、そこから蒸気が吹き出るのは地球の呼吸をあらわしています。

このように、地球も私たちと同じ「生き物」なのです。その地球は、人間が小さな動物を見てかわいいと思うのと同じように、地球も人間がかわいいと思うので、人間同士仲良く楽しく暮らしてくれることを望んでいます。


鬼の洗濯岩（宮崎県宮崎市）

第2章　太陽系の惑星

地球を応援する太陽系の惑星は、宇宙の大元が地球を宇宙の希望の星にするために作ったのであって、偶然出来たのではありません。地球という宇宙でたった一つの「水で覆われ生き物が住んでいる星」は現在では他にはありません。

【太陽は地球に住む生物に暖かさと明るさを与えるために作られた】

太陽の炎がなぜ熱いかというと、プルトニウムが燃えて気化するからです。太陽はプルトニウムの石の星で、プルトニウムは燃えても無くならないので永久に燃え続けるのです。プルトニウムにも意識があり、2つの働きを持っています。一つは石に戻ろうとする働きと、もう一つは石から蒸発しようとする働きです。

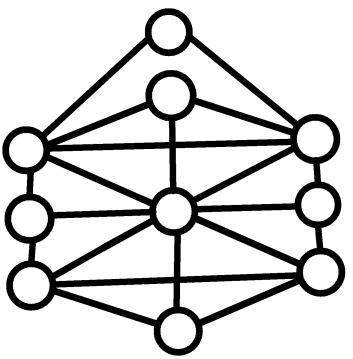
「永久に燃え続ける太陽です。

太陽がいないと地球も死の星になってしまいます。太陽の光は人間の骨の細胞を再生させる力を持ち、それと同時に水中においては太陽光線の一つの紫外線が、石の中に含まれる珪素の殻を破り、それによって珪素が藻に変わり、その藻が様々な生き物を作り出していきます。紫外線の害についてしか語られていませんが、紫外線は悪いことばかりではないのです。

日照り続きや冷夏なども太陽がやけになって仕事をしているのではなく、ソラのものたちの言葉に従ってその必要があるので仕事をしています。

寒い地方と暑い地方とでは、同じ太陽でも善し悪しの扱われ方が違います。太陽が強過ぎても弱過ぎても人間は苦痛になります。そのため太陽の魂を持つ人間は、性別の特徴をあまりにハッキリさせると具合が悪いのではないかと思い、両方の性格をもつ傾向になります。（性同一性障害）

その方々は“他人を思い遣る優しい性格”とご自分を褒めてあげてください。これまで地球の中にある壊れ物たちは争うことでエネルギーを得ていましたが、地球内部のマグマの部分は太陽と同じ保温の働きをして地球を支えているのだと、人間が地球に意識を向けてくだされば地球の未来をも変えることが出来るのです」



太陽系をあらわす穀物模様。
壊れたルシファーも含まれた太陽系の惑星の図です。真中が地球です。
その地球にそれぞれの星から魂が来ていることを示します。
意識が行き来しています。

【水星が送り込んだ水素が地球の酸素と結合し地球に水を与えてくれた】

「地球を冷やすために水を送った水星です。

水星は白くて美しい雪も作っています。雪が白いのは宇宙を作った大元とホシノミナを表す色が白だからであり、水の結晶がいつも六角形なのは、人間には肉体（肉体を表す5という数字）だけでなくイシキ（＝霊）があるということに気付いて欲しいからです。なぜ雲がいろいろな形になるかというと、雲を作っている水の原子たちが、思いを持って形を作ろうとしているからです。雲の形を作ってと頼むのはソラのものやイシカミたちです。

水には水素や酸素だけでなくいろいろな元素が含まれています。水が何でも溶かすことが出来るのはなぜかというと、水星のものが『みんなと仲良くしたい』と思ってなんでも受け入れるからです。氷河が岩を削ってフィヨルドを作り出したのではありませんし、川の水が岩を削って不自然に蛇行した形の川を作り出しているわけではありません。大理石（台湾のタロコ渓谷）を水が削れるわけではありません。また小さな原子たちが毎日たくさん出たり入ったりすること（代謝）で人間は生きているのだということを、どうか忘れないでください」

【金星は金属を人間に与えたが、金属を取り合う人間を支配した時もあった】

金星は人間が使う道具になる金属を作る役目でしたが、それは人間が取り合いをするくらい貴重なものだと知りうぬぼれだしたのです。金星は地球に近くとても大きな力を発揮することが出来たため、支配星の仲間になり人間を支配した時もありましたが、今は反省して地球を助けています。

「かつて金星は人間を支配するために脳に操作をしました。それを解決する方法は脳の深部をイメージして、その後お花の咲き乱れる広い野原を思い浮かべて、それを見ているイメージをしてください。そしてあなたの脳に話し掛けるのです。『私の脳さん。狭い牢屋に閉じこもっていないで、広々とした野原で思い切り遊んでください。地球の平和のために、また、人間として楽しく生きていくために、ネバナラヌという頑固な思いから離れてください』と頼んでください。

かつて人間を支配した金星がせめてもの罪の償いにお伝えしました」

【火星は火を使うことを人間に教えてくれた】

「火星は人間に火を使うことを教えました。

人間は火を上手に使うことを覚えたので、火星にはそれ以上の役目がなくなりました。

宇宙の大元が地球を生物の住む星にしようと思った時、火星も第２の地球にしようと計画され水が送られました。しかし星たちは地球の面倒を見るだけでも大変なので、火星にまで生物を送り込まなかったのです。それで火星の水たちは面白くなかったのと、地球が悲惨な状態になってイシカミたちが大泣きしたノアの洪水の時に、火星にいた水の原子たちは地球に呼ばれて行ってしまったために、火星には水が無くなりました。

かつて火星にたくさんの水があった時には、火星の意識体はひらひらのワカメみたいな肉体を持っていました。なぜそのような形の肉体にしたかというと、意識には意味があると思いましたが、肉体の形は重要視しなかったからです。地球に行くはずだったイシカミの何人かは間違って火星に降り岩山として残りました。現在では火星には身体を持たない『意識体だけ』が存在しています。２００３年に火星が地球に異常接近したのは、ソラのものたちが火星の運行までも変えることが出来るということをあらわしたのです。

火星からやってきた水の原子が火星に帰りやすいようにと、地球の出口である南極上空のオゾンホールを大きく開け、海水が蒸発しやすいように地球を暑くしています」

【木星は木を地球に与えてくれた】

「木星は地球に、酸素をたくさん出してくれる木を贈りました。
　また木星の周りには小惑星エオロパがあり、木星の周り一帯には強い磁気が存在します。木星の周りを回るエオロパは精子を表し、自分たちが大切にしている卵子（木星）に近づかないで欲しいという思いを持っています。精子であるエオロパは卵子である木星に永遠に入ることなく周りを回り続けますが、これは『星たちは決して人間の中に入って支配してはいけない』という宇宙の法則を全てのソラのものたちに伝える役目をしているのです。けれども支配星たちはその宇宙の法則を破ったために、愛のエネルギー体である宇宙の大元に戻って消えてしまったのです」

　しかし人間が岩や土ではなく木ばかり大切にするので、地球を助けているのは自分が贈った木のお陰だと自惚れて、木でイシカミの姿を隠し、支配星の言うままにソラに槍を向けるような杉などで人間にも害を与えるようになったので、木星の意識も一部は宇宙の大元に戻って消えてしまいました。

【土星は柔らかい土を地球にプレゼントした】

「土星は植物がよく育つように柔らかい土を地球に贈りました。

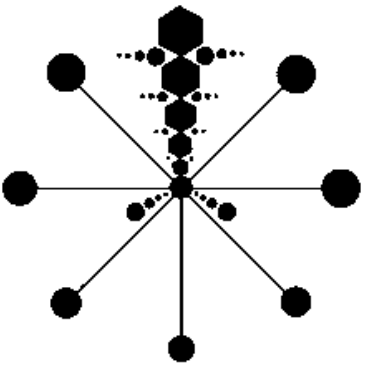
土星に生物はいませんが地球と同じように水があります。土星が『何か変わった形になりたい』と言ったため、無二の親友である水星が霧の輪をプレゼントしてくれました。この水星がくれた水によって土星の周りには霧が発生し、その霧がまるで小さな星のようにたくさんの大きな氷の固まりへと変化します。土星はものすごい勢いで自転しているので、霧から出来たたくさんの氷の固まりは、土星の遠心力により一列に並んで輪を作るのです。土星と水星の仲良しコンビが作り出すのは土星の輪だけではありません。地球上の多くの実りをもたらすのも、土星の贈った土と水星が贈った水のおかげです。

砂漠にある細かい砂を作ったのも土星です。原子たちに『生き物として生きていくのが嫌になったら砂になりなさい』と教えたのです。また砂は、地球が『自分の吹く息で自分の思いを模様に描いて、ソラのものたちに伝えたい』と思い、『岩でも硬い土でもなく、いろいろな形に変われるものを作って欲しい』と頼んだので作ったものでもありました」

【その他の太陽系の星たち】

冥王星は１９９８年に、支配星の意識を消滅するために「白色星団の団長」として活躍してくれましたが、天王星と海王星は地球とあまり関わりをもっていません。

また、かつては火星と木星との間にあり、爆発して現在は小惑星だけになった星のルシファーが存在しました。ルシファーは支配星によって悪い星のように言われていましたが、宇宙の大元の手伝いを隠れて一番していた星でした。ルシファーは西暦４００年頃にメキシコのイシカミの助けを呼ぶ声に応え、爆発して一部が彗星になってユカタン半島に衝突しました。



地球を助けてくれていた星たちをあらわす穀物模様です。

真中は宇宙の大元です。周りの丸は太陽系で、水星、金星、地球、火星、木星、土星、冥王星です。

六角形はルシファーです。ルシファーが大元と一番連絡をしていました。ルシファーは支配星によって悪く言われていましたが、いつも宇宙のために働いていたのです。

小さな丸はロボットで、大元の指示の元に行動しています。中側の丸は、射手座と髪の毛座で、共に大元と連絡をしています。

【宇宙のみんなは地球を水だけの星にする計画だった】

水星が送り込んだ水（水素）は地球を冷やすために地球に降りてきましたが、地球を冷やす仕事が終わったら水は水星に戻る計画でした。しかし、イシカミたちが降りてきて地球にさまざまな生物が発生し、水は地球に無くてはならないものになったので、地球に留まることにしました。

しかし星たちは、支配星やその仲間が地球を支配していることに人間が気付かなければ、地球を水と砂だけの生き物の住まない星にするつもりでした。ただイシカミたちが“色々な生物などになれずに砂にしかなれないのは嫌だ”と言ってくれたので、地球が水と砂だけの星にならずに今のままの形で残ることが出来たのです。

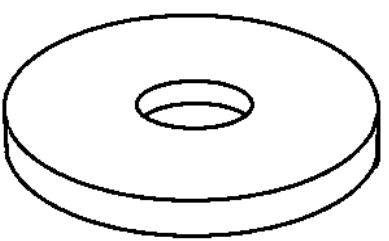
人間は地球が自然に出来て何もかも自分たちに与えられていると思い、イシカミの働きを知ろうともせず、水星も協力して地球に生物が生まれる星になったことを認めようとしません。それで宇宙のみんなが怒って、そのことに気付いてもらうためにやむなく世界中の雨や雪の異常気象でお知らせしているのです。

第3章　射手座のイシカミ

【イシカミたちの故郷射手座の星は平らな星で穴が開いていた】

射手座は宇宙で最初に作られた星たちで、初めは他の星と同じように球形でした。けれども、射手座のものはいつも高い所にいるモノがえらいと思うようになったので、高い所と低い所で区別がつかないように、皆平等でありたいと思うようになりました。それで星の両極の原子たちに宇宙に戻るように伝えたため、射手座の星を作っていた原子たちはどんどん宇宙に戻っていき、射手座の星は臼やドーナツのような形になりました。

ちょうどその頃、宇宙では地球を固める勇士を募っていたので、射手座の一部のものは地球で意識を形にあらわしてみようと移住を始めました。射手座のものはどんどん地球に降りていったので、射手座の星を作っている原子たちに、平らになったら宇宙に飛び出すのを止めるようにと伝えるものがいなくなり、原子たちはどんどん宇宙に帰って、ついに星の真中に穴があいてしまいました。そのことを石の貨幣の石器であらわしています。



南太平洋のヤップ島に伝わる大きな石の貨幣は、イシカミが故郷射手座の星の形に似せて作り、その名残を留めています。

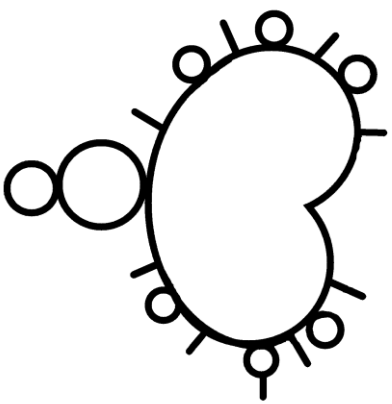
【射手座の意識体たちは原子の姿でやってきて地球に降りる直前に形になった】

射手座のものにも人間と同じように様々な意識を持つものがおり、その思いの強さによって王や女王が何人も選ばれたのでした。一人の射手座の王がホシノミナに頼まれて、しっかりと固まらない地球の不満の原子たちをなだめるために地球に降りましたが、地球はまだ柔らかかったために王の身体は地球の心臓部分であるエルサレムの地中深くに埋まってしまいました。

地球に行ったまま帰って来ない王を探すために、射手座の女王は地球に降りることになりました。そこでソラのものたちは女王が地球に近付いた時に、原子に鳥の形になって先導役をするようにと合図を送りました。女王たちは地球に着くまではバラバラの原子の状態で降りていました。ソラのものが合図を出して作ってもらった鳥が、降りるには少し早すぎたため黒焦げになったのを見て、女王たちは地上近くで身体を作ったので地球に無事に降りることが出来ました。黒焦げになりながらも女王たちを先導した鳥をあらわしているものがカラスなのです。

女王が地球に行ったまま帰って来られないとわかった射手座のものたちは、自分たちも女王の真似をして次々に地球のあちこちへと降りました。

それから長い年月が経った後、身体が埋まって自由にならない王（岩のドーム※1）の元には何人もの人間が来ました。射手座の王はそこに来た人間にチャネリングで話し掛けましたが、射手座の王と繋がるとすぐに支配星が巧みに入り込み、人々はイシカミより力の強かった支配星の言うことを信じるようになり、「神の声を聞いた」という人が何人もあらわれました。エルサレムはユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの宗教の聖地とされていて、そこを取りあう争いが今まで続いているのは、この王の呼びかけを支配星が利用して、そこでいろいろな宗教を興させたからです。



イシカミの姿をあらわす穀物模様。
頭には地球の知識が詰まっていました。
丸や毛は触覚、視覚、温感を感じ、翻訳や手や足や呼吸器の働きをするものでした。
（マンデルブロー集合図形と同じ形です）

1　イスラム教の聖地でマホメットが昇天した場所といわれています。

【イシカミはクラゲのような身体の中で渦巻きを作り自分の分身を作った】

イシカミたちは地球に降りてくる途中、お腹の中で渦巻きを作り原子に集まるよう指示を出すことで、原子たちは指示された形になり、自分の分身や巨人たちの身体を作りました。先発のイシカミが固めてくれた地球に降り立ったイシカミたちは、自分たちの思いを形にしようと思いました。しかしイシカミは大きすぎて地上では動けなかったので、人間のような形や何人も連なった形の巨人、小さな人間の形をしたイシジンなど、いろいろな形のイシカミの分身を生み出しました。イシカミの身体から生まれ出た分身や巨人は、イシカミが大きくなるようにと念ずるだけで山のように大きくなりました。それはクラゲが自分の分身のポリプで増殖するのと同じです。クラゲの分身のポリプは歩いて移動しますが、その足跡に残ったポリプも生長して小さなクラゲになり、爆発的に増加していきます。イシカミもクラゲの増殖の仕方と同じで、イシカミの一部の組織から増殖することが可能でした。年々多くなっている巨大クラゲは、このことに気付いて欲しいとイシカミが知らせているのです。また、イチゴ（※2）もイシカミの巨人の亡骸をあらわします。イチゴはランナーというツルが延

2　イチゴとは“イシカミのチカイのゴロク”の意味を持つ果物で、その形は私市丸山古墳の形をあらわし、イチゴの粒はその古墳の丸山を覆っている葺き石をあらわしています。

びて増殖しますが、クラゲのポリプが歩いて増殖するのと同じことを知らせています。

【イシカミの一番人間に近い形がイシジンだった】

イシジンはイシカミの身体から分かれたもので、人間のために石器を作ったり、岩絵を描いたり、ストーンサークル・石室・円形劇場などで創られた人間の世話をしていました。またイシジンは人間の食べる物を準備したり、獲物を捕まえて食べる方法を教えたりしましたが、自分の食べ物はイシカミのお汁だけでした。イシジンは亡くなると巨石になったものもあり、古代の人はそれを知っていたので、磐座などとして大切にしていました。

縄文時代の遺跡から出土する用途の分からない石器などは、イシジンが柔らかかったイシカミの身体から切り取って作りました。「独鈷（トッコ）石」はイシジンが鹿などの鼻を一撃するときに使い、捕まえたものを人間に食べ物として与えました。また「石刀」は柔らかいイシカミの身体を切り取るのに使われました。



独鈷石
(北海道室蘭市)



石刀(北海道江別市)

【地球の地下全てにマグマがあるのではない】

火山の噴火でマグマが噴出するのは、各地でお知らせ役をする一つのイシカミが煮えたぎっているだけで、地球の地下すべてがマグマで覆われているのではないのです。それで火山が噴火する理由は次の通りです。

① 地球も人間と同じく生きており、そのサイクルで出てくる老廃物を排出することが火山ガスの噴出や火山の噴火となります。

② イシカミが降りてきた大昔には、イシカミの分身が大きくなりたいと望んだために、地球に頼んで何度も噴火をしてもらい高い山になりました。

③ 普賢岳などイシカミを封印する宗教の名前がその山に付けられていることが分かると、それを嫌がって噴火することもあります。同じ頃に噴火した北海道の有珠山（臼はイシカミをあらわします）が人的被害を無くすることでそのことを知らせました。

【小さな地震はイシカミが動いて起きるが、震災級の地震は宇宙の計画である】

大きな震災級の地震は、現実生活が意識の思いとあまりにかけ離れていて悲惨なために、早く生まれ変わりたいという人間の助けを呼ぶ想念が宇宙の果てまで届き、宇宙全体で相談した結果、彗星を呼び寄せたり、人間の想念の強さで大きな地震を招いたりすることになります。小さな地震は次のようないくつかの理由があります。プレートがずれてその反動で地震が起きるのではないと、イシカミは終始言っています。

① 人間はじっとして動かないでいると血のめぐりが悪くなりますが、地球も同じように生きており、じっとしていると循環がうまくいかなくなって苦しくなり、時々身体を動かすことで地震が起こります。

② 地球が身体を動かすと、地表を地殻の膜となって覆っていたイシカミ同士のつなぎ目が離れるので、そのほころびを修理しようとイシカミの身体の原子が働くために地震が起こりますが、この場合深さは関係ありません。

③ 深さの浅い震源の地震は、巨人が自分の存在を知ってもらうために動いて地震になります。日本においてはイシカミに意識を向けているので、最近はぬるぬる地震、双子地震などで地震のエネルギーを分散して被害を少なくしてくれているようです。

【イシカミの分身やその巨人たちが山や岩になった】

イシカミが原子に指示を与えることでイシカミの分身やその巨人やイシジンたちは自由に増殖が出来ました。巨大な形になったり、何人もつながった形になったり、手足だけの形になったり、イシカミの仕事をするのに都合の良い形の巨人が作られました。それらは距離に関係なくイシカミとテレパシーで交信することが出来たので、イシカミは動けなくても巨人たちに思うように仕事をしてもらうことが出来ました。またイシカミや巨人たちは未来を知ることが出来、小さな人間がたくさん増えることを知っていたので、人間のためになるようにといろいろな仕事をしてくれました。ところが当のイシカミは地球の引力のために動くのもままならず、食べるものもなかったためにどんどんと力尽きていき、イシカミの分身や巨人たちもイシカミの身体から出るお汁を摂取して生きていたので、イシカミが亡くなっていくにつれて巨人たちもどんどん死に絶えていきました。

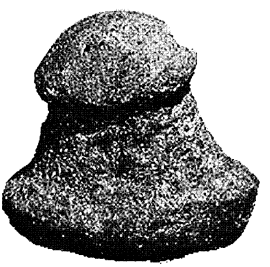
イシカミはいずれ人間たちが支配星の支配により自分たちのことを忘れてしまうことを知っていたため、命が尽きる前に自分の身体から落ちた落とし物を使って不思議な形をした巨石を作り、「イシカミがここにいましたよ」というサインを残しておきました。人間には作ることが到底不可能な巨石遺跡や、ナスカなどに見られる巨大な地上絵、あるいは柔らかい粘土をこねて作ったような岩や、自然に出来たとは思えないほど不思議な形をした岩々などが

それにあたります。

イシカミも人間と同じでいろいろな考えのものがおり、広大な土地で岩だらけになり自分たちの存在を残すことばかりを考えたり、反対に人間の食べ物が良く出来るように自分の遺体を肥沃な土に変えたりと、いろいろなものに変わっていきましたが、地上に出ているほとんどのイシカミは山になりました。また巨人たちの身体の成分はイシカミと同じシリコンから出来ていたので、死んでも骨は残らずに山や岩になり、人間はその存在を忘れてしまいました。ただ岩絵や線刻画で人間とも動物ともわからない形が描かれたものがあり、それがかつて巨人がいたことを物語っています。使用目的が謎とされている石器の中には、分身や巨人をあらわすものがあります。



イシカミと分身、巨人の大きさをあらわした岩（北海道様似町）



イシカミの分身や巨人をあらわす石冠
(京都府綾部市)

【イシカミの分身である巨人の仕事の一つに川を作ることがあった】

巨人たちは亡くなった仲間の遺体を積み上げて高いピラミッドのような形を作って、宇宙からエネルギーをもらおうとしました。また地球は引力が強いので、尖った山を作りそこから引力を放出しようとしましたが、あまり効果はありませんでした。しかしそれらの山のおかげで人間は北風を防ぐことが出来、山に積もった雪により平野では水を一年中得ることが出来るようになりました。

次に巨人たちは川を作りました。岐阜県に降りた射手座の女王が作らせた濃尾平野の木曽川、揖斐川、長良川の三本の川は、人間に3という数の意味に早く気付いて欲しかったため作りました。（3とは肉体、魂、意識をあらわしています）

川は自然に蛇行していると思われていますが、巨人がわざと蛇行させたことを、北海道の石狩川を見た時に知らせてきました。石狩川は平野を大きく蛇行していましたが、治水のため直線に近い形に変えられました。水量のある川はまっすぐ流れようとするので、自然に出来るのであれば平野ではまっすぐになるはずです。それが大きく蛇行しているのは、“あること”を避けるためでした。

それはイシカミの形にして残していたストーン・サークルを、後年の権力者たちが自分たちの支配に都合が悪いからと壊して形を無くしてしまうことを知っていたので、権力者たち

が出来るだけ川を遡ってこないようにとわざと蛇行させたのです。それでも権力者たちによってストーン・サークルが壊されていったので、石が狩られるという意味の“石狩川”とテレパシーで名付けさせたのです。

【ストーンヘンジはイシカミとシリウスの共同作品だった】

イギリスにあるストーンヘンジは巨大な二重のストーンサークルです。それはイシカミたちが地球を固めて支えていることを知らせるために作られ、周りは一面の草原や畑で、１個４トンの岩は５００ｋｍも離れた所から、１個５０トンもの岩は３０ｋｍも離れた所から運ばれています。たかが天文台にするために、このような労力を人間が払ったのでしょうか？ストーンサークルは丸かったイシカミをあらわしますが、その石組はとてもしっかりと作られており、それは後に人間に建築の知恵を与えたシリウスがイシカミの巨人に作り方を教えたのです。

石をしっかりと固定出来るように石柱の高さをそろえることや、凹凸の切込みをつけて横や上下の連結をするように教えたのがシリウスで、外側のサークルはシリウスをあらわし、内側のサークルが射手座のイシカミをあらわしています。倒れている石柱は、イシカミの巨

人たちが地球のために働いたのに、人間は悪い巨人としか言い伝えないので、嫌になって砂になったことをあらわしています。ストーンヘンジの手前にある「生贄の岩」と呼ばれているものは、ストーンヘンジの「ロゼッタストーン」だと伝えてきましたが、エジプトのロゼッタストーンと同じように、ストーンヘンジの意味を記録して伝えるために置かれました。ここに人骨があったのは、盗人がここに隠れていて他の人を来させないようにするために、巨人が人を食べるとか生贄をさせていたという嘘の噂を流していたのです。

　またサークルから離れた所に立石と円錐の丘がありますが、立石はこの石組をした巨人をあらわし、円錐の丘はイシカミの巨人がお汁を飲んでいた親のイシカミのオッパイをあらわしています。



ストーンヘンジ（イギリス）

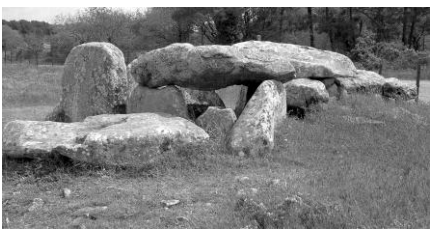
【巨石を並べて星の戦争があったことを伝えてきた】

フランスのブルターニュ地方にあるカルナック列石は、１０列ほどの石が数ｋｍにわたり直線状に並べられています。大きな列石や小さな列石とグループが分かれているのは、イシカミの巨人が複数で作ったためであり、またトンネル状のドルメン（石組）があるのはそれを作った巨人が教官で、他の巨人に作り方を教えたというサインです。

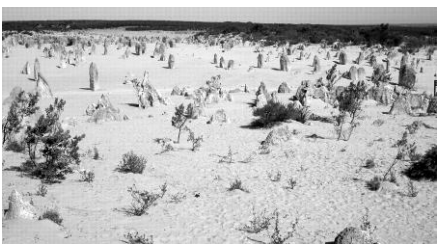
この列石は、星の戦争前には宇宙の星はこのようにきれいに並べられていた、ということを知らせるためにイシカミの巨人が作りました。星の戦争後にばらばらになった様子はオーストラリアのピナクルスであらわしているように、いろいろな石を乱立させて知らせたのです。



カルナック列石（フランス）



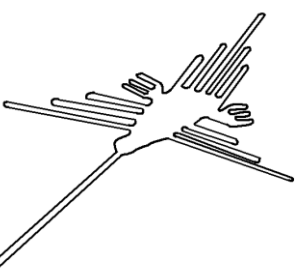
カルナック列石にあるドルメン



ピナクルス（オーストラリア）

【ナスカなどの巨大な地上絵は原子たちに見せるための生物の設計図だった】

南米ペルーのナスカやアメリカなどで発見されている、空からでないと何をあらわしているのか分からないほどの巨大な地上絵は、ソラのものが柔らかなイシカミの身体に描いたのです。山の斜面に描かれている地上絵の人間の口が無いのは、自分たちを理解することの出来る人間は、お汁で生きる人間（つまりイシカミの巨人やイシジン）だけにしようと思ったからです。地上絵のハチドリは、イシカミの巨人やイシジンがお汁を吸うのと同じ働きで創られて、地上絵に描かれました。



ナスカの地上絵

地球はイシカミたちが降りてきて生物の住める環境になり、海にはイシカミの身体が変化してさまざまな生物が発生し、陸上には支配星が創った恐竜などの生物がいました。その恐竜たちが滅ぼされた後で、ソラのものとイシカミたちは陸上にも自分たちの思いを生物の形であらわそうと思い、それを見本として宇宙の原子たちに見せるために描いたのです。それを見た宇宙に存在する原子たちは、その生物になろうとする同じ思いの原子が集まって、いろいろな形の生物が発生したのです。

【ソラのものの思いを形としてあらわしているものが動物や植物である】

ソラのものやイシカミたちは自分たちが地球を固めて生物を発生させたことを、動物や植物を使って何とか形に残そうと思いました。

「象」の丸い身体は地球そのものをあらわし、大きな耳は地球を流れる偏西風を、鼻は地球の引力を、牙はボートの櫓で漕いで回るように地球が自転していることをあらわします。

「キリン」の長い首は地球と月の関係をあらわし、かつては両者が一体だったことを形にしています。

「カンガルー」はイシカミがお腹に巨人を入れて降りてきたことをあらわします。

「カニ」がお腹に卵を持つことはカンガルーの意味と同じですが、そのはさみはイシカミが射手座への望郷の念を断とうとして作ったと知らされました。

「クモ」は人間から嫌がられていますが、害虫を捕まえます。またこの情報を広めること、すなわちネットワークをあらわしていると伝えてきています。

植物では、「ユリ」など6枚花弁は、肉体（＝5）だけでなくイシキも含まれていることをあらわし、「タンポポ」は太陽をあらわします。「かぼちゃ」、「柿」、「キャベツ」などはイシカミの姿をあらわしています。

一方で支配星が作ったものもあります。

渦巻きのある「アンモナイト」は宇宙の大元をあらわしますが、支配星はその殻を取ってヘビを作ることによって大元をやっつけたと思い、これまで地球を支配してきました。

「ネズミ」は支配星が送って人間に災いを起こさせました。

「ネコ」はネズミを駆除するので一見良いと思われますが、ネコ科は支配星が送り込んだものなので、その夢を見ることでさえソラのものからは良い意味としては説明されません。

「ヘビ」、「ワニ」は支配星がイシカミに意地悪をするために地球に送り込みました。

「蝶」の幼虫はキャベツなどを食い荒らし、成長しても容姿が派手なのは、派手なことの好きな支配星の仲間のベガ星が送り込んだ虫だからです。

「カブトムシ」も形だけ勇ましく見せて、人間や地球にとって益のない昆虫です。

多くの昆虫を送り込んだ星はベガ星の仲間で、バッタの異常繁殖などで人間に嫌がらせをしています。

植物では「バラ」や「ラン」など支配星は華やかなことが好きなことをあらわし、「月下美人」は花を見れば自分が他を支配したいと思うその意味が分かります。

【生物発生の説明を巨石遺跡がしている】

カルナック列石のあるフランスのブルターニュ地方には、巨石を組み合わせたトンネル状のドルメン（石組）がたくさんありますが、これは次のことをあらわしています。

まず原子たちが生物になろうとする時には、宇宙の原子が集まって形を作りますが、どのような形になるかをナスカなどの巨大な地上絵や、洞窟に描かれた岩絵を見て決めます。そして何になるかを決めた原子たちに石のトンネルを通らせて、その間にいろいろなことを教えるのがイシカミの石のトンネルなのです。そこは原子たちがトンネルを通る間に、形を作るために必要なことをイシカミがいろいろと教える、いわば教室のようなものなのです。

それはフランスのブルターニュ地方ロクマリアケールの遺跡でさらに詳しく知らせています。小石がたくさん積み上げてあるのは原子をあらわし、自らの意思で形になろうと思う原子の一部が中央に集まり、石のトンネルを通って学習して外に出ますが、外に出てもすぐにはそこから離れないで、形になった原子たちはしっかりとまとまってイシカミをあらわす丸い石組に沿って進みます。そしてそれぞれの形になった原子たちのグループは、そこから離れて行きます。

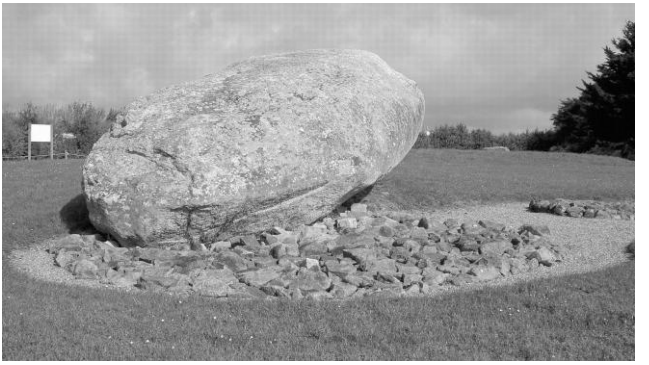
巨大な筆ペンをあらわす石棒が何箇所も折れているのは、せっかく巨石の作品を作っても、人間はどのような石も自然に出来たと思い、イシカミの苦労を知ってくれないので書くのを



ロクマリアケールのドルメン（フランス）



ロクマリアケールの筆をあらわす石



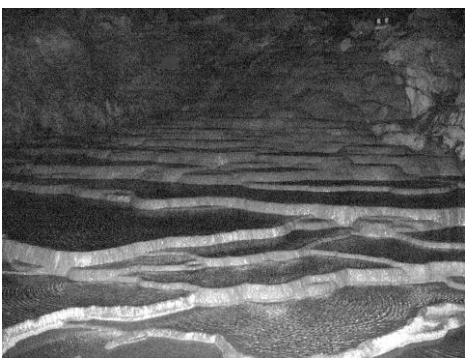
筆の先の石

止めたことをあらわしています。小石が集まったグループで象や鹿などの生物はイシカミの原子から出来ている、ということを描いているのです。

【鍾乳洞の不思議】

鍾乳洞はイシカミの身体を半分に切って空間を作り、それを広げてそこで壁を形作り、その後空間を狭めてから天井をふさいで作られました。マレーシアのボルネオ島グヌン・ムル国立公園にある洞窟ディアケーブの洞窟路は、全長２㎞高さ４６０ｍもあり世界最大級で、鍾乳洞は石灰が溶け出して出来ると言われるこれまでの学説を覆す洞窟です。

また山口県にある鍾乳洞の秋芳洞を訪れたとき、その中はイシカミと人間の進む道をあらわし、脇のいろいろな形の岩も意味があると伝えてきました。百枚皿は原子が集まって分子が出来ることをあらわし、クラゲの足のような岩はイシカミの内部をあらわします。また星への階段（黄金柱）と名付けられた柱があり、その横にはイシカミの分身をあらわす岩やオーロラに似せた岩が天井にあり、そこに至るには途中でソラのモノたちの審査を通り抜けることが出来た人だけであるという意味の、審査をする巨大な人物に見立てた岩(岩窟王)があります。



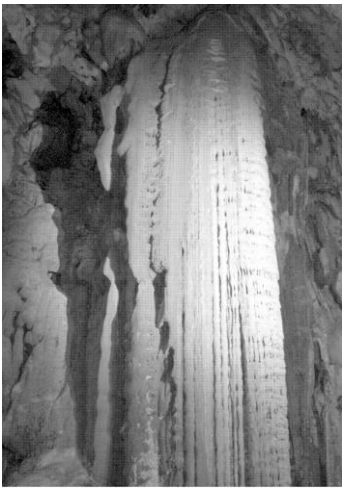
百枚皿（山口県秋芳洞）

【イシカミは大陸の形さえも変えることが出来て人間にメッセージを残した】

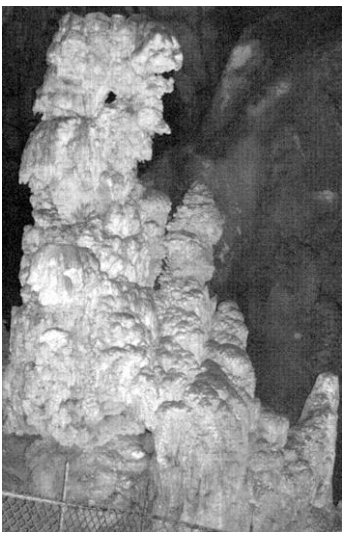
イシカミたちは川ばかりでなく陸の形さえ変えていきました。

まずイタリア半島は、小さな人間が長い歴史の間本当の道を歩むこと無く、小石につまずいて争いばかりして苦労することを知っていたので、イタリア半島を長靴の形にして、シチリア島を小石に見立ててそのことを知らせようとしました。

さらに太平洋には恐ろしい巨大な大蛇が住むことを知って、それが渡ってこないように南米では海の中を掘り起こして山に積み上げてアンデス山脈を作りました。そのために海の生



黄金柱
（山口県秋芳洞）



岩窟王
（山口県秋芳洞）

き物の化石が３０００ｍもの高い山から見つかるのです。
　また北米では南米とは反対に深い谷のグランドキャニオンを作り、大蛇が渡ってこないようにしようと思いましたが、そこのイシカミたちは体が思うように動かずにやる気も起きなかったために、寝たままの状態で自分の身体の原子にこのような形になるようにと指示を与えて、その身体を変化させて深い谷のグランドキャニオンにしました。それでそこの原子は今も少しずつ変化して形を変えていっているのです。
　地球が固まった後に降りたイシカミたちは、太平洋の周りを覆うように丸く陸を作りましたが、長い年月で形を保つことが出来ずに崩れました。また支配星が人間を支配して悲惨な目にあわせるため、ムー大陸のイシカミはそれに抗議をして沈んでいきました。
　けれどもアリューシャン列島、千島列島、琉球列島などの島はがんばって形を残して、何とか自分たちの存在を知ってもらおうと、地震や火山の噴火や台風で人間に知らせています。
そのようにして、イシカミたちは人間の能力をはるかに超えた力であらゆる物を作っていきました。


グランドキャニオン（アメリカ）

【イシカミの巨人が人体の器官の設計図を作った】

宇宙の大元は争いばかりする恐竜がいなくなった地球を見て「これからは家族や友達を大切にする動物を送るように」とソラのものたちに言いました。ソラのものとイシカミたちは宇宙の知恵を集めていろいろなものを地球に送りましたが、そのうちに自分たちのことを分かってくれる生き物が欲しいと考え、皆で一生懸命に相談して「人間」という生き物を作ることにしました。

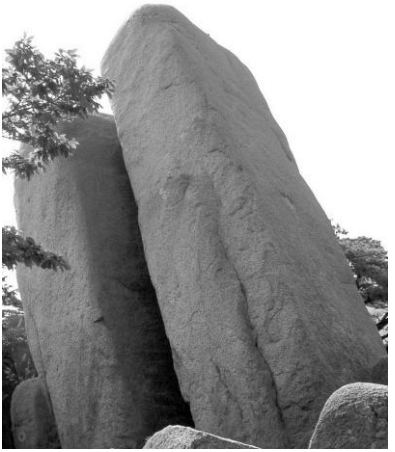
巨大なイシカミたちは自分の身体の一部を分身とし、その分身は更に動きやすいような身体の巨人やイシジンを作りました。巨人たちはソラのものから動きやすいような身体の器官を教わり、その形を人間の設計図として残しておこうと思い、イシカミの身体の柔らかなうちに形を作っておきました。それらの岩は世界中のあちこちに残されていますが、私たちがこれまで見付けたものをご紹介します。

御在所岳のイシカミが2枚の岩（オバレ石）を作り、人間には生きていくために食べ物を食べたり、言葉を発したりするための「口」が必要だということをあらわしました。また御在所岳の山上の丸石やエビス岩で「頭」の形を、地蔵岩で「肩」の形をあらわしました。

御在所岳以外でも日本では身体をあらわす形が作られました。「心臓」は宮崎の鵜戸神宮の前にある岩で、「肋骨」は静岡県大仁町の城山で、「耳」は静岡県三島市の耳石神社にある耳

の形の岩で、「鼻」は札幌市の山鼻神社裏山の形で、人間の「指紋」は淡路島の沼島にある指紋岩で、「直腸」は沖縄の万座毛で、「皮膚」は北海道の大雪山旭岳の構造土であらわしました。

アメリカのイシカミたちは、食べた食物を消化させる「胃」をチェッカーボードメサの岩山で、「足」や「膝」をデリケートアーチの岩であらわしました。巨人にも足がありましたが、曲げることが出来ず座って休むことが出来なかったので、膝が必要と思ったからでした。また、「腕の筋肉」はアメリカの砂漠の中で棒にダンゴをさしたような岩で、「手」はモニュメントバレーで天空に向かってあらわしました。

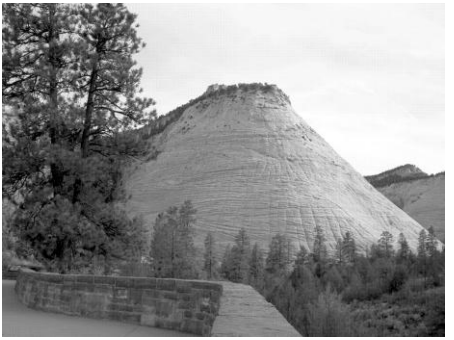


口をあらわすオバレ石
（三重県　御在所岳）

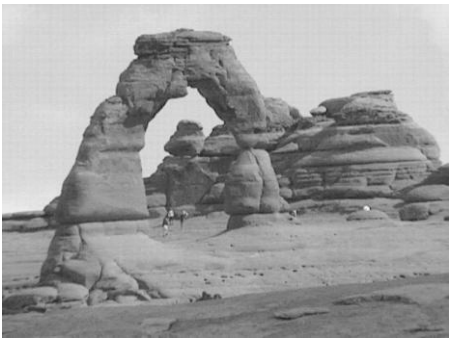


肩をあらわす地蔵岩
（三重県　御在所岳）

この他にもあります。「女性器」はアメリカのアンティロープキャニオンであらわしました。男性器は手のない巨人と同じ形をしています。「大腸」をあらわしているのが台湾のタロコ渓谷です。また解毒など重要な働きをする「肝臓」を考えたのはシリウスとソラのものです。最初はエベレストが肝臓をあらわしていました。高い山を尖がらせたのは、嫌なヘビを登らせないようにして宇宙からエネルギーをもらい、雪解け水で絶えず洗い流すためでした。しかし麓に嫌なものが来たので、あちこちのイシカミがアルプスなどの高い尖った山を分散して作り、エベレストと同じ働きをしようとしました。



胃をあらわす岩山
（アメリカ　チェッカーボードメサ）



足と膝を表す岩
（アメリカ　アーチーズ国立公園）

【人間はストーンサークル、石室、円形劇場の中で創られた】

恐竜が滅ぼされた後、宇宙の大元は家族愛を持つ小さな生き物だけを地球に送り込むように言い、星たちはそれらの生き物を創っていました。どのような形の生き物を作るかのアイデアは星たちが考え、その生き物のイメージを世界中のイシカミの巨人にテレパシーで伝え、その形をナスカの地上絵などに描くように伝えました。その絵を見てその動物になりたい原子たちが形を作っていきましたが、動物は石のそばで簡単に創られることが出来ました。創られた動物たちはあちこちに散らばって行きましたが、生きていくための知恵は星たちが与えました。

一方イシカミやシリウスそして一部の星たちは、自分たちのことを理解することが出来る生き物「人間」を創ろうと思いました。それはアトランティス時代に、イシカミたちが自分たちの子孫を残せないと分かったためでもあります。他の生き物と違い、生まれてくる人間には自分たちのことを伝える必要があり、また人間には輪（＝和）が大切ということを伝える必要がありました。そのため人間はイシカミの身体の一部で作られたストーンサークルの中で、イシカミや星たちの思いを集めて創られることになりました。そして描かれた地上絵の中の人間や巨人の作った身体の器官を見て、人間になりたいと思うかつてイシカミだった原子がストーンサークルの中に集まり人間が誕生しました。けれどもイシカミのエネルギー

が次第に弱まってくると、ストーンサークルの中だけでは人間を創ることが難しくなってきました。そこでイギリスやフランスなど寒い地方では石室を、イタリアやギリシャなど暖かな地方では円形劇場型を巨人たちが作り、その中で人間を創り出すことにしました。

円形劇場型の以前には岩をくり抜いた穴で人間を創っていましたが、動物になるより人間になりたいという原子が増えたために、もっと効率良く人間を創ることが出来る方法を考えました。イシカミの身体が変形した円形劇場の周りの階段からエネルギーを送って、人間の形になるように集まった原子に指示を与えました。そして集まった原子たちが階段を登ることで、よりしっかりと原子たちに人間の形を保たせるようにして、その後暖かなお風呂に入れて温め元気にしました。

一方石室では、イシカミから人間になった原子たちが石のトンネルを通って外に出て行くまでの間に、人間になった原子たちが生きていくためのいろいろな知恵を与え、原子同士が更にしっかりと結合するためにエネルギーを与えて外に出しました。

その後もイシカミたちは人間にテレパシーで生きていくための知恵を与え、イシカミの原子に人間の食べ物に適したものになるように指示をして、原子にエネルギーを与えることで食べ物となる植物を発生させました。また人間は植物や果物だけでは元気がなくなるので、食べ物になるいろいろな動物のビジョンを見せてイシジンに岩絵を描かせ、その動物を創りだしていました。

【人間の身体の不思議なナゾにはイシカミが関わっている】

ソラのものたちは、人間の身体の右半身と首から下の部位は潜在意識が大きく関わる領域とし、反対に左半身と頭は顕在意識が大きく関わる領域と決めました。潜在意識は星から、顕在意識は地球近くの意識体から送られてきます。人間の脳は五感と言語・運動能力などが司られ、思考はソラからやって来るものを脳が受信します。肉体の運動機能は顕在意識が脳に繋がる脊椎を通して指令を送ります。そして潜在意識と顕在意識がそれぞれ単独で行動しないように、脳から神経の指令が出てもそれぞれの神経が首で左右に交差することによって、左右どちらかに偏らずにバランスのとれた行動が出来るようにしました。

ソラのものたちは人間の耳を大きくして音を集めやすくしようと思っていましたが、そうすると現実に音として聞こえる「言葉」しか信じないようになると思ったので、広がった耳たぶを中央に寄せてヒダを作りました。耳は宇宙を、カタツムリ管は宇宙の大元を、耳小骨はロボットが合図をしていることを、三半規管は三位一体が大切だということをそれぞれあらわします。

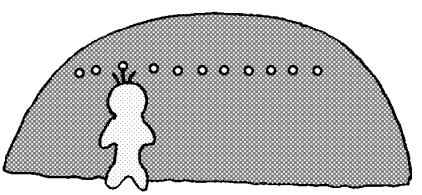
また巨人たちが一生懸命に岩の作品を作っても、人間はそれを決して巨人が作ったとは思わず、自然に出来たものと思うことがわかったため「指で作ったという印」の指紋をイシカミが考えました。

【巨人は首の後ろの管から“お汁”という栄養をイシカミの穴から受けていた】

イシカミは巨人やイシジンに“お汁”という母乳のような体液を、巨人の首の後ろにある管を通して与えていましたが、イシカミが弱っていくにつれお汁は次第に出なくなり、イシカミが死んだ後に巨人も次第に死んでいったのです。

巨人に助けてもらっていた人たちは、何とか巨人に元気になってもらおうと、どんぐりなどを潰して汁を作りましたが巨人の身体には合いませんでした。そしてイシカミのことを快く思わない人間たちは、頭に角があるように見えた巨人のことを鬼と呼び、お汁を飲む様子を見て大酒飲みだと思って悪者の物語として伝えたのです。

日本にはデエダラボッチ伝説があり、アメリカインデアン、オーストラリアアボリジニ、北欧、中国、アフリカなどほとんどの国にも同様の巨人伝説が残されていますが、これらはイシカミの巨人のことなのです。

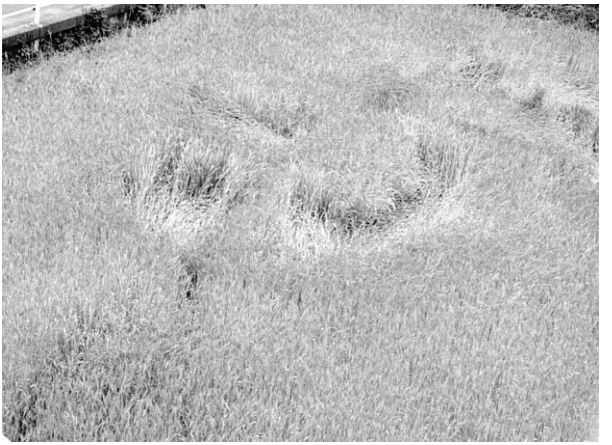


巨人がイシカミからお汁をもらうようす

【ソラのものからのメッセージの一つが穀物模様（クロップサークル）】

ヨーロッパのイシカミは肉食を教えたことへの罪滅ぼしにと、ソラのものたちと協力して人間に向けて送るメッセージ（クロップサークルやミステリーサークルなど穀物模様と呼ばれるもの）を描くことにしました。言葉として人間に伝えることが出来ないので、仕方なく穀物を倒すことで模様を作り人間に向けてメッセージを発しています。それには非常に重要な意味が込められているのに、これまでその意味は理解されていませんでした。しかしイシカミやソラのものから伝えられる情報で、２４０個に及ぶ複雑な模様の意味を難なく理解することが出来ました。このことは「星からのメッセージ」「ソラからの伝言」で紹介しています。（共にソラと星出版）

穀物模様はイシカミのロボットと呼ばれる意識体が作っています。ヨーロッパの穀物模様はサークルが主で、数１０年前から作られており、ロボットが馴れているためか年々複雑な模様になっています。けれども日本の場合はここ数年前から注目してきただけなのと、作るロボットが馴れていないので、あまりはっきりした穀物模様にならないために一般には認められませんが、私たちが意識を向けているとはっきりした直線であらわします。直線は地上、イシカミが作る雲、更に高層のソラのものをあらわします。また地球上のイシカミの封印されている度合いをあらわしているようなものもあります。



愛知県豊田市に出来たニコチャンマークの穀物模様



北海道空知地方に出来た直線の穀物模様

【イシカミの中にも穏健派と急進派があり、オメガとゼータは急進派であった】

人間にいろいろな性格があるように、イシカミたちにもいろいろな考えを持つものがいて、一部は支配星に協力して仲間のイシカミを裏切るものもいました。また人間が支配星の言うままにイシカミの働きを忘れて、イシカミのことをアクマのように言い出したので、地球を希望の星にしようと降りてきた意識体たちの中には、人間に厳しいお知らせをすることで支配星に対抗しようとしたものがいました。それが射手座のオメガ星雲とゼータ星から来た意識体たちでした。

オメガやゼータから来た意識体たちは、射手座の仲間でありながらほとんどのものが物質化せずに意識だけで地球に降りてきており、山や岩のイシカミになったものはそのうちの一部でした。オメガやゼータの意見に賛同するイシカミたちは、活火山になって噴火したり大きな地震を起したりして、何とか人間に自分たちの存在を認めてもらおうと思いました。更にイシカミになったゼータは、人間には火が必要になることを知っていたので、木や植物を石炭や石油などに変化させていきました。また人間は支配星の作った宗教（仏教、ユダヤ教、キリスト教）を信じて支配星の言うままになるために、ゼータは星ではなく太陽に意識を向けさせて、太陽を神とする宗教（エジプトの太陽信仰）を教えましたが、それも支配星によって違うものになっていきました。

第４章　イシカミの子孫

【アトランティスはイシカミの子孫が作った理想の国だった】

たくさんのイシカミが恐竜のいなくなった後の地球に次々と降りて来ました。射手座と水星は仲が良かったため、イシカミは水星に頼んで水蒸気の膜を地球の周りに張ってもらい、その水蒸気の膜によって地球全体が住みやすい一定の温度や湿度に保たれたので、今の北極や南極のような寒い場所はありませんでした。

しかし生きていくための食料がお汁しかなかったイシカミの巨人たちは、動物や植物を作り出すだけで死んでしまい、亡骸はそのまま山や土になりました。ところが今のエジプトやギリシャにあたる地方にいたイシカミの巨人たちは、シリウスから教えられて地中海を作ったことにより更に知恵を授けられました。それは巨人の命を維持していくために、口から食べたものを吸収する機能を与えられたことです。当時その地方にはホシノミナが一掃した恐竜の骨がたくさんあり、その上に柔らかなイシカミが次々に降りて来たために、恐竜の骨はイシカミの身体に押しつぶされて化石となりました。たくさんの恐竜の骨は石灰となり、その石灰から骨と同じ栄養を摂取することが出来たため、地中海の巨人は骨の無い人間のように身が軽く、そのため歩かなくても移動出来るくらいでした。

そのイシカミの子孫の巨人たちは、岩や土になったイシカミの身体や恐竜の骨を大西洋に運んでアトランティス大陸（※1）を作って、そこに住みアトランティス人となりました。アトランティス大陸が出来た頃には、巨人たちは子孫を残すことが難しいと分かったため、アトランティス人の保養地であったギリシャのサントリーニ島や大西洋上のバミューダ島で人間が創られていました。そこで創られた人間は現在の人間よりも大きな体格で、その人間とアトランティス人との混血もおり、それらが協力して理想の国作りをしていました。

アトランティスには大勢のイシカミたちも降り、イシカミたちはイシカミの子孫であるアトランティス人を応援し、アトランティスは地上の楽園のような素晴らしい場所になりました。けれどもその楽園を見ていた支配星は、アトランティスにも降りて支配しようと思いました。

1　大西洋にあったと言われる伝説の大陸。哲学者プラトンが伝聞として書き残しています。

【アトランティスの崩壊は大陸の原子が自ら宇宙に帰ったために起こった】

アトランティス人たちの仕事を肩代りするために作られたアンドロイドは、姿は人間に似せて作られましたが、人間とは違って言われることをするためだけに作られ、壊れるまで何も食べなくとも仕事が出来ました。壊れたら身体はチリになるように出来ていましたが、意識はしっかりとありました。アトランティス人に支配されこき使われたことによって、恨みを抱いたアンドロイドは爆発的に増えていきました。そしてアンドロイドたちは、インド洋上にあった後の南極大陸になるレムノイア（レムリア）という大陸に移住して、シャングリラという意識だけの国を作りました。

仕事をするだけでなんの楽しみもなかったアンドロイドたちは、支配星から言われるままにアトランティス大陸の陸地になったイシカミたちに、「アトランティスの原子は全て宇宙に帰るようになった」と伝えました。アトランティスは理想の国になっていたので、もう自分たちの仕事はすべて終わったと思い、伝えられた連絡をそのまま実行して、その結果アトランティス大陸の陸地が原子に戻って宇宙へと帰ったためにアトランティスは崩壊したのです。アトランティスの遺物と思われる指輪などが残っているのは、イシカミたちが人間に贈ったものがそのままの形で地球に残ったものです。

アトランティス大陸にいたアトランティス人は、その時に殆どが水没して亡くなりました

が一部は生き残ることが出来ました。サントリーニ島にいた混血の大国主、ゼウス、シュメールの王等は生き残った一部の者でした。大国とは大きな国アトランティスのことだったのです。そしてそれまで地球を包んでいた水蒸気の膜はこの時に破れたため、地球は寒暖の差が激しくなり住みにくくなってしまいました。

　またエジプトやギリシャに残っていた巨人がエジプトやギリシャの巨大建築を作り上げましたが、巨人は人間のように子孫を増やすことが出来なかったので、小さな人間の権力者を支配星は思うままに操り、巨人のしたことを完全に隠して自分たちの手柄にしてしまったのです。そして当時の人間はアトランティス人が実際にいたことを知っているので、巨人たちのことを一部は神話の神としながらも、残酷であったかのように勝手に話を作り、神話の神は恐ろしいものであったと思わせています。またイシカミの巨人が作ったあらゆる建物などを利用しながら、それらを自分たちが作ったように子孫に伝え、アトランティスは架空の大陸とされてしまいました。

【レムノイアとムーノイアという伝説の大陸の存在は？】

アンドロイドの身体を作っていた原子も、アトランティス大陸の崩壊と共に宇宙に帰りましたが、アンドロイドたちの意識はレムノイアに残りました。アンドロイドのアトランティス人に対する恨みが強いのを支配星が知り、支配星はそこに降りてアンドロイドを部下にしようとしました。それを知ったレムノイアのイシカミたちは、大嫌いな大蛇が来ないようにと巨人たちに大陸を押させて南に移動させたので、並んで大陸を押す巨人たちの形の岩山が南極には残っています。

同じその頃、太平洋の真中にはムーノイア（ムー）というイースター島まで伸びる大きな大陸がありました。ムーノイアに降りたイシカミは数少なかったのですが、そこではイシカミと巨人と人間が仲良く暮らしていました。けれども支配星がムーノイアの人間を食べる大蛇を送り込み、支配星が人間の中に入り込み人間たちを支配し始めたために、ムーノイアのイシカミたちは人間の悲惨な状況を見てかわいそうに思い、地震を起こしてムーノイア大陸を沈めてしまいました。ムー大陸のイシカミたちは、沈んでいる仲間が海の中にいるよと、台風になってホシノミナや母親である射手座の女王たちがいる日本へ向かって来ています。またムー大陸に住んでいた一部の人たちの意識は、恐怖の人間体験はいらないと熱帯魚などに生まれ変わり、自由にのびのびと生きています。

【ヨルダンのペトラは日本と大きな関わりがある】

ヨルダンのペトラ（※2）のイシカミは人間に分からないように周りを岩山で囲い、狭い岩の通路で隠したイシカミの作品を残しておきました。そこは多くの人が住めない地域でしたが、大きな円形劇場やギリシャ式建築が残されており、周りの崖に穴を開けてそこで人間を作り出しました。そしてそこの人々は遊牧民で現在も昔ながらの生活をしています。そのことでペトラのイシカミは、この大きな建築物を自分の作品だと気付いてもらおうとしました。

そのペトラのイシカミは、アトランティスが滅んで地球を包んでいた水蒸気の膜が破れたために砂漠になっていったサマルカンドから、イシカミの子孫の巨人であるヒミコ（※3）を呼び寄せました。ヒミコはイシカミに呼ばれてペトラに行き、そこの建築のすばらしさを知ってイシカミの身体で建物の柱を真似た鉄の棒を作りました。

2　周りを岩山に囲まれ、シクと呼ばれる高さ数１０ｍもある切り立った崖の間の細い道からだけ入れる所に、高さ３０ｍもある岩を掘ったり削ったりした宝物殿の建物やローマ式の円形劇場がありますが、それらを人間が造ったというにはいろいろ無理があります。

3　第６章　ヤマタイコク　参照。

【支配された人間が哀れでイシカミが大泣きしてノアの大洪水が起こった】

世界中のイシカミたちは、支配星に何とか勝とうと山やピラミッドの頂上を尖らせて宇宙からエネルギーを得ようとしましたが、支配星のエネルギーの方が強かったために勝てませんでした。

支配星は人間を自由に操り、その恐怖心をエネルギーにしていたので、悲惨極まりない世界となり、世界中のイシカミたちはあまりのことに大泣きをしました。するとそれが元でノア（※4）の洪水と呼ばれる大洪水が起こり、辺り一面が水で覆われ多くの人たちが亡くなりましたが、イシカミの警告の声が聞こえた人たちは大きな船を作り洪水を逃れました。そのうちの一隻がまだ柔らかかったイシカミの身体の上にたどり着いたので、船の重みで船形の地形（※5）になったものが現在も残っているのです。

4　イシカミの声が聞こえた真面目な人をノアといい、何組ものノアがいました。ノアとは洪水で何も無くなったことをあらわしています。

5　アララト山上で船形になっている地形が衛星写真で見つかりました。

【支配星のあまりの残酷さに、人間の意識が助けを求めて惑星を呼び寄せた】

中南米に降りたイシカミたちは、エジプトのピラミッドのようにエネルギーを宇宙から受けるためにピラミッドを作ろうとしましたが、途中まで作った頃に支配星がピラミッドの先端を作ると村の人を丸呑みするヘビを送り込むと脅かし邪魔をしてきて、ピラミッドの先端を作らせませんでした。イシカミが作るのを途中で止めたので、中南米のピラミッドは台形になりました。他のイシカミが何としても輪が大切と大きな丸石（※6）で人々に知らせたのですが、それも伝わることなく台形のピラミッドは支配星によって人を死なせるものに変わってしまいました。そして支配星は、人間の恐怖の想念からエネルギーを得るために恐ろしいゲームを考えました。それがあの不気味なマヤのカレンダーの模様なのです。人間に如何に恐怖を起こさせるか、選んだカードの模様でその人間の運命を決めたのです。

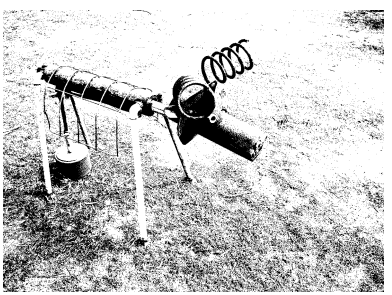
このように又もや支配星により世界は悲惨な状態になり、人々は生きる希望を無くし、宇宙に助けを呼ぶ思いがとても強くなりました。それで太陽系の惑星だったルシファーの意識たちがその思いに応えて、自ら彗星となって地球に突っ込んだので、地球の地軸が傾いてあちこちで巨大地震が起き、地球の環境が激変したのが西暦４００年頃でした。

6　南米コスタリカにある石球です。ほぼ完全な球体をしており制作方法は謎とされています。

《小休止…肺の働きと火炎放射器》

オーストラリアのマールロックを作ったイシカミが肺の働きを知らせてきました。C（炭素）はO（酸素）の燃えたものをあらわす記号です。肺胞はとても小さな火炎放射器です。気管支から酸素を吸い込み肺胞を通る時に、一部の酸素Oは燃えます。Oが燃えると水（肺膜の浸出液）を掛けて火を消し、OはCになります。その水が肺膜に出てくると、Cは小船になって漂います。そして燃えないでいたOの小島に辿り着きます。Cが0につかまらせてもらうと、COが生まれます。それ（CO）だけでは黒い（悪いことをする）ので、もう一つのOを引き寄せて（CO_2）白くなります。O_2が血液に入るのではありません。肺膜で酸素が燃えて熱が発するのです。この熱で身体を温め肉体は生きているのです。これが肺膜での酸素交換です。

タバコは火炎放射器と同じなのです。タバコを吸うことは、（気管支や肺にとって）いつも火炎放射器で燃やされているのと同じことなのです。タバコは竜の頭の火炎放射器で、身体に竜のエネルギー体を送り込んでいるのです。



このチャネリングを受ける
きっかけになった火炎放射器に
似たオブジェ
（オーストラリア）

第５章　オーストラリアのイシカミ

【砂漠地帯のイシカミからのメッセージ】

不思議な色や形の岩は世界中に数え切れないほどたくさんあり、イシカミたちが何とかメッセージを伝えようとしています。しかし今の学説では、岩に意識があることが認められていないので、どのようなものでも全て自然に出来たと説明されています。一生懸命造ったのに人間が気付くのが遅すぎたために、風雪に耐えかねて崩れてしまい元の形をとどめないのもたくさんあります。人間がその近くに住んでいる場合は不思議な形で気付きますが、砂漠の中の作品は人間に知られることなく崩れていき、それらは生きる力をなくした砂になっていくので、砂漠もどんどん増えていくのです。

しかし乾燥地帯では人間による破壊がなされることなく、イシカミが降りてきたそのままの姿で残されているものもあり、それが一番良く分かるのがウルル（エアーズロック）です。

たくさんあるイシカミのメッセージの中から、今回はオーストラリアのイシカミたちをご紹介します。

【ウルル（エアーズロック）がイシカミそのものの姿である】

ウルルは射手座の次女の王女でした。その乳母のカタジュ（マウント・オルガ）は、他のイシカミがそばに降りてきてウルルを押しつぶすといけないので、近くには降りないように伝えました。それで広い平野にクラゲのようにフワリと降りたそのままの姿をよく保っているのです。ウルルは自分の身体に目と尻尾を作りウォンバットの形を真似し、一日でいろいろな色に変わることでおしゃれをしていますが、自分は一人ぼっちなので傍らの池で涙をあらわしました。あちこちヒダが出来ているのは、ウルルのお腹の中で作られた分身が外に出ていったために大きなヒダになったのです。ウルルの分身が作った巨人やイシジンは、ウルルの裾野に人間のために屋根のようなひさしや、ウルルの口をあらわす三角の大きな穴（※1）を作りました。



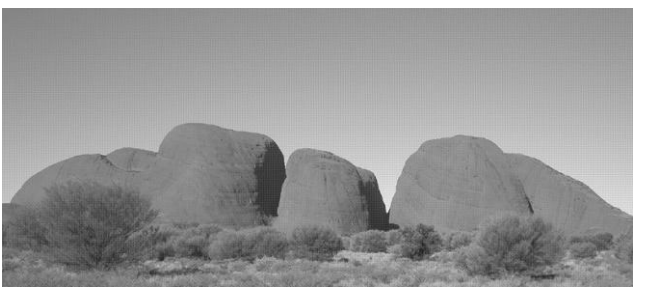
ウルル（エアーズロック）

1　ここはアボリジニの聖地ですが、ウルルの裾野の不思議な形をした岩など写真撮影させないのは、自然には出来ない形になっているのを支配星が見させないようにしたのです。

【カタジュ（マウント・オルガ）はウルルに近づこうとしてばらばらになった】

カタジュはウルルの乳母で、地球に降りてからウルルのそばに少しでも近づこうとして無理に動いたためその身体がばらばらになり、十三個の岩山に分かれてしまいました。それぞれの岩山は垂直な岩壁になっていて、所々で穴が開いてそこから落ちたと思われる大きな丸い岩が下にごろごろと転がって子生まれ石（※2）のようになっています。

カタジュが石の集った礫岩で出来ているのは、イシカミが珪素（※3）になったことをあらわしています。また岩壁の麓は同じ礫岩が溶けたチョコレートのようにごつごつと広がっており、イシカミが原子に岩山にならないように頼んだので、その部分は山にならずに地上を覆いつくしたのです。



カタジュ（マウント・オルガ）

2　礫岩から丸い石がぽろぽろと剥がれていく石のこと。

3　丸い原子だけで出来た物は落ち着かないので、四角い珪素になったイシカミが地球を固定しました。

【オーストラリアのいろいろなイシカミたち】

オーストラリアには、イシカミたちがメッセージを込めて作った石が、そのままの形で数多く残っています。その一部をご紹介します。

「ウェーブロック」　巨大な一枚岩の一部が高さ１５ｍの津波のような形になっており、イシカミの意識がこのような波を作ることを知らせています。頂上にはイシカミが柔らかいうちに巨人が掘り出した岩がごろごろとあり、掘り出した穴には樹木が生い茂っています。



ウエーブロック



ウェーブロック頂上の岩

「ピナクルス」　ブッシュの一部が完全に砂漠になり、その中に朽ちた木を思わせる石が無数に乱立しているのは、星の戦争後に星たちは並ばずばらばらになったことをあらわし、星の戦争以前にはきれいに並んでいたことをあらわすフランスのカルナック列石と対照的です。

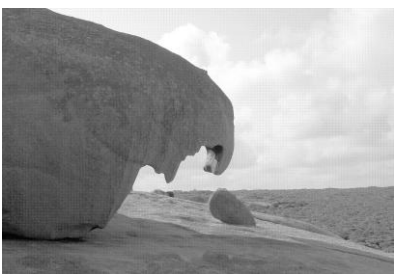
「リマーカブルロック」　海岸近くに巨大な岩が突然あらわれ、その岩の上にあたかも粘土で作ったようないろいろな形の岩があります。月がシリウスの女王の勧めで地球から飛び出したことをあらわす岩や、地球をあらわす象の鼻の形をした岩などがあります。



ピナクルス



リマーカブルロック全景



リマーカブルロック
(地球と月をあらわす)

「マールロック」　荒野に突然あらわれる丸石の群れです。デビルス・マーブルスと呼ばれていますが、そこのイシカミはマールロックと呼んで欲しいと言います。原子の組み合わせをあらわす形、イシカミから分身や巨人があらわれる形、南半球と北半球が分かれていることをあらわす球形を真っ二つに切った岩など、地球の不思議を岩の形にして知らせています。



マールロック
(酸素と炭素の原子をあらわす)



マールロック
(イシカミと分身や巨人をあらわす)



マールロック
(北半球と南半球が分かれていることをあらわす)

「ペブルス」　テナントクリークの町を挟んでマールロックの丸石群の反対側に、ペブルスの丸石群があります。そこはマールロックほど有名ではなく、丸石もきれいな形にはなっていません。そこはマールロックより以前に作られた丸石群ですが、人間が見ても何とも思ってくれないので、よりきれいな丸をマールロックで作ったのです。

「ピンクの谷と黒い谷」　アリススプリングの近くにあるシンプソンズギャップという谷間はピンクの岩で埋め尽くされ、池もありカエルが鳴いていますが、そこからわずか２０ｋｍしか離れていないスタンリーチェズムという谷間は、ススで汚れたような黒い岩が多く、周りもトゲのある草や松、竜の卵の寝床と伝えられているリュウゼツランが生えています。この二つの谷間は二つの地球をあらわしています。二つの地球とは、平和な生活を送ることが出来る人たちの住む空間と、戦争など争いが絶えない空間に分かれるということで、お金があっても争いの絶えない場所は平和な世界とはいえないのです。黒い谷になったイシカミたちは自ら嫌な場所をあらわしているので、それを小さなカンガルーのワラビーが慰めていました。



シンプソンズギャップの谷間

【グレート・オーシャン・ロードの岩は、その形を保つのを我慢していた】

オーストラリアのグレート・オーシャン・ロードには、海岸沿いに「十二使徒の岩」と呼ばれる大きな立岩が並んでいますが、２００５年7月にそのうちの一つが突然に一瞬のうちに崩れてしまいました。この岩は、イシカミの巨人たちが海岸沿いに並んだまま固まっていたことをあらわしていましたが、自分たちのことを知らせることが出来たと安心して、原子たちが手をつなぐのを止めて自由になったので崩れたのです。

【アボリジニも支配星に支配されてヘビを神と思うようになった】

ウルルは射手座から降りる時に自分の分身をお腹に入れてきましたが、カラスと共に少し早めに外に出してしまったのでカラスも分身も黒焦げになってしまいました。イシカミの超能力でその分身を生き返らせましたが、そのことを人間が知るようにと皮膚が黒い人間を作るようにソラのものに伝えました。

その遺伝子を持った人がアボリジニ（※4）で、初期の彼らは人間として生まれてきても過去や未来が見え、イシカミとテレパシーで会話することが出来ました。彼らは肉体を持つ期間は瞬きをするくらい短く、意識だけの世界にいる方が長いことを知っていたので、彼らはたとえ現在の生活がつらくても、再びそのことが分かるアボリジニに生まれ変わろうとするのです。けれどもアボリジニも次第に支配星のプレアデスに支配され、本当の物語は忘れ去られて、イシカミの大嫌いなヘビを神（※5）とまで思うようになってしまいました。

オーストラリアの砂漠地帯にハエが異常に多いのは、アボリジニたちが未だに支配星に教えられた通りにマールロックを虹のヘビの卵と信じ、イシカミの巨人が作った変わった形の岩を他の人たちに見せないようにしているので、アボリジニの人たちの意識が何とかイシカミに気付いて欲しいとハエになって知らせています。

4　オーストラリアの原住民でウルルやカタジュを聖地として守ってきました。

5　アボリジニの伝説でウルルの山腹にある黒い線は蛇神の戦い跡と伝えられていますが、ウルルによると、それは人間のイシキの世界を見る右目が閉じていることをあらわしているそうです。

第6章　ヤマタイコク

【ヤマタイコクは四国の山上の台地にあり、大国主とヒミコが築きあげた】

アトランティスが滅びた後も、イシカミの子孫のアトランティス人と地球の人間はお互い助け合い、肉体を持つことのすばらしさを味わって生活をしていました。アトランティス人と地球人の合いの子で、滅びたアトランティスのことを偲び“大国主”と名乗った人物がいました。大国主は巨人の遺伝子を持つ大きな男で特殊な能力があり、イシカミの言葉を聞くことが出来たため“星述べ”と呼ばれました。また大国主は肌が白く(※1)、白い王と書いて「皇」の元となりました。「白」とは最初にあらわれた光のことで、「王」という文字は「肉体と魂と見えない潜在意識」の3つから人間は出来ていることを知っているという意味です。

大国主は沈んだアトランティスを後にして、イシカミの声に導かれて宇宙の大元の分身であるホシノミナが降り立ったという日本を目指しました。大国主はムー大陸から大蛇が日本へ攻めてくると知らされていたので、大蛇の嫌いなギザギザの刃の稲刈鎌を持って出かけました。

1　アトランティス人は肌が白かったが、現在の白人はドーバー海峡の白い岩を作ったイシカミが真似をして肌を白くさせたのであって、アトランティス人とは関係ありません。

大国主とそのお供は道中に立ち寄ったヨルダンのペトラで、大国主と同じく巨人の血を引き、その言葉が分かるというイシカミの子孫の女の子“ヒミコ”と出会い、一緒にイシカミの声に導かれて日本へ向かいました。イシカミの子孫である大国主たちは当時まだ特殊な能力を持っており、ヨルダンのペトラのイシカミに、マナという食べても減らない食物や水の入った壷をもらい、さらに東へと進んで行きましたが、エベレストの麓で支配星が創り出した大蛇（※2）により命を絶たれてしまいました。

けれども大国主たちの意識はどうしても日本へ行きたいと思っていたので、エベレストのイシカミたちが大国主とヒミコの亡骸を四国の山まで運び、そこのイシカミに手渡しました。それを大国主たちの意識はソラから見ていて、そこは支配星が邪魔をしていないと分かったので、イシカミによってそこで創られた大柄な人間の肉体にすぐに生まれ変わりました。そして一緒に創られた仲間と協力し合って国造りをしました。

四国の山々になったイシカミたちはその頃はまだ生きていて、大国主たちに痛みを全く感じないイシカミの背中を掘るように教え、掘った後の暖かくて柔らかな穴の中で大国主たちは寝ていました。そしてイシカミは人間に適した食べ物を作り出すことも出来、それは大国

2　支配者によって大蛇にさせられた原子たちは、そのことを悔いて自ら錆びない鉄柱（インドのアショカ・ピラー）になりました。

主たちが目覚めると目の前に食べ物があるというような形であらわれました。そしてストーンサークルや石室の中で次々と人間が創られ、生きるためにイシジンが指導をして、次第に集団で生活出来るようになり、イシジンがいなくなった頃には大国主やヒミコが人間を指導するようになっていました。大国主とヒミコたちが住み着いたその地は、山上の台地にある国ということで「ヤマタイコク」と呼ばれるようになりました。

【イシカミは農業の仕方を大国主に伝え、大国主がそれを皆に教えた】

大国主たちの身体はイシカミによって創られましたが、大国主が目覚めるとそばには植物の種がありました。それはソラのものやそこのイシカミが原子に話し掛けて、大国主たちのために準備しておいてくれたものでした。

また大国主はイシカミから農業の知恵を与えられ、その中には稲作の知恵もありました。稲は水溜りの中の方がより多く出来るので、イシカミの柔らかな身体を少し深く掘り水をためて丸い田（※3）にしていましたが、おいしいお米を少しでも多く収穫しようと、後に丸

3　車田のお田植行事などで今も残っています。渦巻状に田植えをするのは宇宙の大元をあらわします。

い田の隅も耕して四角にしました。出雲大社に田の字型の建物や文字が残っているのは、大国主が田を考えたことを知らせているのです。稲は刃がノコギリのようになった稲刈り鎌(※4)で刈り取りました。この鎌は生まれ変わる前の大国主の亡骸と共にアトランティスから運ばれていました。

大国主とヒミコはイシカミに教わった様々な知恵を人々に教えていたので、周辺の地域からはたくさんの人たちが二人の教えを受けに訪れ、その噂を聞いて朝鮮や中国の人たちも来るようになりました。特に水を張った田で稲を作るとたくさんのおいしいお米が収穫出来たので、それを考えた大国主を“神農”と呼びました。また米のほかに粟やキビなども栽培保存することが出来るようになり、四国のヤマタイコクは次第に豊かで大きなミズホ（水穂）の国となりました。ヤマタイコクで稲の作り方から文字の作り方まで色々なことを習った中国の人は、帰国後なんとしても自国の文字を作ろうと、より複雑な漢字を作り高度な文字として漢字を発達させました。漢字の始まりは中国と考えられていますが、いにしえにヒミコが考えた漢字はヤマタイコクが発祥の地で、日本から中国に渡ったものなのです。

4　この稲刈鎌は後に溶かされ巨大な日本刀に作り変えられて、愛知県の熱田神宮に奉納されました。同神宮に祭られている三種の神器の一つ、草薙の剣はこちらが正しいのです。また草薙の剣として伝えられている剣は後年に作られたもので、大国主やヒミコとは関係がありません。

【ヒミコは文字や紙も作り出し、ホツマツタエは女性の教科書だった】

大国主と同じく星述べであったヒミコは、イシカミたちから言葉や文字となるものをビジョンとして知らされましたが、それを皆に知らせて記録に残したいと思っていました。ちょうどその頃は木の皮を細くした繊維で布を織っていましたが、その布を洗った水が乾くとその後には平たく薄いものが出来ることに気付き、コウゾの木からかさばらない薄い紙を作ることを思いついたのです。そして木を燃やした後に出来た炭でこの上に文字を書くことにしました。その文字が「ミズホの妻が書いた文字」のホツマ文字（※5）です。

ヒミコは紙に当時の女性としての生活の知恵などを次々と書き記すと、仕事の合間を見ては他の人々にその知恵を教えていきました。その知恵が書かれたものが「ホツマツタエ（※6）」で、女性が毎日する仕事などが詳しく書かれており、いわば女性用の家庭科教科書のようなものでした。ホツマツタエはホツマ文字で書かれていますが、分かり易いカタカナにしたのが次の文で、その解釈は少しずつチャネリングの言葉になっていきました。

5　丸、三角、四角、直線など使った特殊な形の古代文字のことです。

6　古代の神（天皇）の物語として伝えられていますが、それは当時の権力者が都合の良いように解釈したためです。

《ホツマツタエ　コトノベノアヤ（序章）》

『ウタタネコ　ミワコレオノブ』＝（元気なのに昼間から仕事をしないで）うたた寝てばかりしていると男性を待っていると思われる(ちゃんと女性の仕事を覚えて下さいという意味)
『アメツチノ　ヒラケシトキ』＝天と地が分かれる時、夜明け
『フタカミノ　トホコニオサム』＝(ご飯を炊く時に)お釜が焦げないように（気をつける）
『タミマシテ　アマテルカミノ』＝お釜の蓋が重くて取れない時に「アマテルサマ　力を貸してください」と頼むのです
『ミカカミヲ　タシテミクサノ』＝お腹にお煮しめを食べて
『ミタカラヲ　サツクミマコノ』＝身体の肩まで降ろした
『トミタミモ　ミヤスケレハヤ』＝髪の毛をまとめて束ねる
『トミガオヤ　シイルイサメノ』＝起きなさいと皆を起こすこと
『オソレミニ　カクレスミユク』＝火のついた炭火はしっかり埋めておくと火起こしをしなくても良い
『スエツミヲ　イマメサルレハ』＝仲間の人にこんにちは（と挨拶をする）
『ソノメグミ　アメニカエリノ』＝自然の恵みの河に行って
『モフテモノ　ホツマツタエノ』＝自然の恵みの河の水にミズホの妻が

『ヨソアヤヲ　アミタテマツリ』＝伝えられることを感謝する
『キミガヨノ　スエノタメシト』＝私の君（大国主）に、いつまでも試練が
『ナランカト　オソレミナカラ』＝ありませんように恐れを取る
『ツホメオク　コレミンヒトハ』＝お勤めを苦にしないような人は
『シワカミノ　ココロホツマト』＝しわが重なるまで心がほつれて（心穏やかに）
『ナルトキハ　ハナサクミヨノ』＝亡くなる時はきれいな花の咲くあの世の
『ハルヤキヌラン』＝春にあなたは行けます

この後もホツマツタエは長い文が続きますが、ヒミコの意識も記憶が定かではないようで、少しの文を訳するのでも神経の集中が必要なのと、あまり必要ではないような内容でしたので、現在の解釈はここまでで終わっています。ホツマ文字はアトランティスの文字を基礎にしているので、ギリシャ文字に似ています。

【カタカナや漢字もヒミコたちが考えた】

ホツマ文字は難しい形で覚えにくかったために、子供たちの守りをしながらもっと簡単な形の文字にしようと皆と一緒に考えたのが“カタカナ”でした。ヒミコはイシカミが丸い姿をしていたのを知っていたのと、丸く輪になって仲良くすることが大切という意味から、最初に「ワ」というカタカナを作りました。そして日常の生活からヒントを得て、ヒミコたちは次々とカタカナの文字を作っていきました。けれども一つの言葉もカタカナで書くと長くなり紙がたくさん必要になるため、一つの文字で一定の言葉を表す「漢字」を作り、一つの文字で大きな働きをする漢字を「男文字」、簡単なカタカナを「女文字」と呼びました。ヒミコが作った男文字には、山、川、人、などの他に、カタカナで同じ発音でも違う意味を持っていることを知らせるための、日、木、田、などがありました。

『ア』＝アナタのア。頭と身体。
『イ』＝イノリのイ。頭を下げている姿、ノとリを合わせた。
『ウ』＝ワの上の点で、輪の先頭に立ってウタウ。
『エ』＝橋＝エニ＝川と川を結ぶ＝連絡する＝天と地を結ぶ。
『オ』＝男のことで、付いているモノがある。

『カ』＝動物の皮。力を合わせて力を入れて皮を剥ぐ。力があること。
『キ』＝木の板に文字を書いて綴じた物。記録。
『ク』＝苦労のク。タから点を取るとク。点は人間をあらわし、田に入らないと苦労する。
『ケ』＝毛のケ。頭の上に丸（点）を載せていた。
『コ』＝子供が産まれるところ。女性。

『サ』＝（めざしを）刺す。男と女がサス。人を刺す。
『シ』＝２つの点が魂と霊をあらわし、長い線が肉体。肉体から離れると死ぬという意味。
『ス』＝好きのス。これは若者が考えました。
『セ』＝磯の精霊のセ。砂浜に穴を掘る貝。穴に入るということ。
『ソ』＝ソのものということ。指さしてソレということ。

『タ』＝高いのタ。田んぼのタ。稲を干す高い所に登った人の形。
『チ』＝命の元である血。＋は死。ノに散ると死。亡骸を埋葬する時、木の十字を立てたのはアトランティス時代からの風習。
『ツ』＝罪のツ。肉体から魂と霊が離れると悪いことをする。
『テ』＝身体の上に２本あるものが手。

『ト』＝供という意味。自分をちょっと支えてくれる。

『ナ』＝ナニの意味。ナ＝＋＝死とはどういうものか、意味が解らなかった。
『ニ』＝２本。肉体と霊だけでは死ぬということ。死ぬとはナニ。
『ヌ』＝スとともに若者が考えました。
『ネ』＝木の根の形。
『ノ』＝野原のノ。本当は横線でした。

『ハ』＝歯。
『ヒ』＝かまどから火が出ている様子。
『フ』＝フーと口から息が出る様子。
『ヘ』＝なだらかな土地の形。
『ホ』＝＋は死。死んだ後、善人と悪人が左右に別れる死後の世界のこと。

『マ』＝鉛が身体に入り苦しむこと、身体を曲げている。魔。
『ミ』＝魂・潜在意識（霊）・肉体の３つという意味。
『ム』＝無理をして身体が曲がること。

『メ』＝芽が出た様子。
『モ』＝モノをもらう時に手を差し出す形。

『ヤ』＝矢。
『ユ』＝舞台の上でユーガに踊っている形。
『ヨ』＝たくさん食べ物が採れて、棚に並べている様子。良かったのヨ。

『ラ』＝楽をすると後でフーとため息が出る様子。
『リ』＝利口のリで、2通りのことを考えることが出来ること。
『ル』＝礼をしている人の前に立っている人が、瑠璃（ルリ＝宝石）を身に付けている様子。
『レ』＝頭を下げて礼をしている様子。折れ曲がるのとは違うので上下反対にしました。
『ロ』＝家の中の炉のこと。口（くち）。

『ワ』＝輪になって踊る様子。輪。
『ン』＝シから点が一つなくなっている様子。魂が空に行くと死んでも生まれ変わらなくても良いという意味。

【君が代と日の丸の意味】

ヒミコはよく働き穏やかな大国主を尊敬しており、大国主を「キミ」と呼んで歌を作ったのが「君が代」でした。その意味は『私の君の物語が、“ざざれ石（※7）”が硬い岩になり、その岩が苔になって分解して宇宙に戻るほど長い年月を経ても伝えられますように』という歌なのです。またチヨニ、ヤチヨにという部分に『長い年月の間には、血（チ）が流され槍（ヤ）で戦うことがある』という意味も予言されていたのです。

一方「日の丸」は女性の初潮の印をあらわします。人間は毛が少なく皮膚も柔らかいので、赤ちゃんから大きくなるまで育てることは大変でした。そのため女性が初潮を迎える一人前になることはとても喜ばしいことでした。当時は無地の衣服をまとっていたので初潮の印がよくわかり、その喜びを日の丸にしたのです。

7　宇宙から降りてきたイシカミの柔らかい身体が、雨に打たれて溶けてざらざらになった石のことです。いろいろな大きさや種類の違う小石や砂が、固まって大きな石になっているのをあちこちでザザレ石と名付けられています。このいろいろな小石と砂は、普通の条件では固まりませんが、イシカミの巨人のエネルギーでは接着剤で固めたように固まっているので、昔の人は畏敬の念を持っていたのです。

【ヤマタイコクの風習やそれを偲ぶ風習は今日まで残っている】

『柏手』＝大国主はいろいろな知恵を皆に教えており、次々と人が集まってきて大勢の集団で暮らすようになったので、大国主がヒミコを呼ぶ時の合図を考えました。良いことがある時には4つ手を叩いて、急用があるときや何か不満がある時は強く2回手を叩いていました。それが今も伝わって神社にお参りする時に手を叩くのです。

『鏡餅』＝イシカミをあらわします。上部が平らで丸くてくびれがあるのがイシカミの形と合っています。

『みかんと干し柿』＝みかんも柿もイシカミが人間のために原子たちに頼んで創ってもらったもので、形をイシカミに似せて作られました。鏡餅の上に飾ります。

『ウラジロ』＝真実（ヤマタイコクの話）が隠されていることをあらわす植物で、裏の方が白いのです。支配星が送り込んだ大蛇やヘビは尖っているものが嫌いなので、それをぎざぎざの葉の形であらわしました。ウラジロも鏡餅の上に飾ります。

『注連縄』＝ヒミコがいつも束ねていた形見の髪の毛で大国主が作ったものが始まりです。（鳥居は櫛をあらわしています）出雲大社などの注連縄は、巨大なイシカミをあらわす縄から三角の巨人が生まれる姿をあらわしています。細長い縄だけがよく岩などに巻きつけてありますが、あれはイシカミの嫌なヘビを巻きつけて封印したつもりなので、決して良いものではありません。



注連縄（北海道神宮）

『書初め』＝ヤマタイコクの言い伝えが消されたので書いて伝えるということです。

『ドンド焼き』＝元旦に書いた書初めの紙を燃やして天まで届かせます。

『節分のオニ』＝イシカミの巨人が首の後ろにお汁を吸う管があり、それを角にされ悪者にされました。

『豆まき』＝豆を精子に例え、豆をばら撒くことで人間の射精をあらわしています。

『ひな祭り』＝射精の結果子供が出来たことをあらわします。

『雛人形』＝雛人形は柿本人麻呂と小野小町をあらわします。流し雛は殺された柿本人麻呂と、それを追って身を投げた小野小町を慰めようと始められました。段飾りの雛人形は後年の権力者の指示により、身分をしっかり決めた形とされてしまいました。

『七夕』＝元はタナハタと呼び宇宙をホシノミナが掃除をするという意味で、笹を立てただけでした。

『月見』＝小さなお団子を盛るのは細胞分裂をあらわし、人間は細胞から出来ていることを知らせています。ススキを供えるのは、ススキは切るとすぐに枯れて白髪のようになりますが、人間も同じようにすぐに老いるので悔いなく生きるように知らせました。

一方で支配星が教えた風習も残っています。

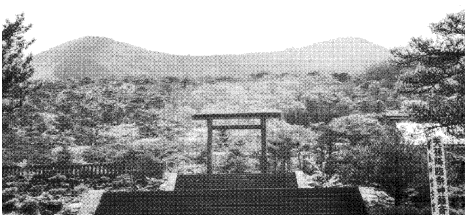
『七五三』＝北斗七星の七、五亡星の五（意識の世界では人間に潜在意識を認めさせない昴

のこと）、三は宗像三姉妹のことを改めて崇めさせるために、数字で人間を支配し神社詣でをさせたのです。

『獅子舞』＝支配星の送り込んだライオンに子供の頭を入れて、子供の恐怖心のエネルギーを得て、支配星が脳を支配したと知らせたのです。

【竜神の力をもらったジンムの誕生】

アトランティスの繁栄を妬んでいた支配星は、イシカミの子孫が日本で新しい国を造ることが分かったので、その邪魔をしようと計画しました。その頃陸続きだった朝鮮から日本へとある若夫婦が渡ってきて、高千穂の峰の麓（※８）に落ち着き男の子を授かった頃、その近くの御池に支配星の部下である竜神の意識体が降りてきました。竜神はその若夫婦が授かった男の子の身体に降りて人間生活を体験するこ



高千穂河原から見る高千穂峰

８　神武天皇誕生の地の伝説があります。近くに朝鮮岳があり辺りは松ばかり生えています。

とにしました。他者を支配することがこの上なく好きな竜神に守られた男の子はジンムと名乗り、いつも人の上に立って他者を支配しないと気が済まない性格でした。竜神に支配されたジンムは当時の人間よりも大きな身体で力も強く、竜神の声が聞こえたので思い通りに全てのことが叶えられました。そして若くして近隣の国を攻めては従えて、瞬く間に周りを支配していきました。

【ウガヤノフキアエとは鵜戸の洞窟を作った巨人である】

ジンムは道中に砂が固まって岩となった鵜戸神宮の洞窟（※9）や鬼の洗濯岩を目にして驚き、それらの岩を作ったのは人力を遥かに越えた力の持ち主だと思いました。そこでジンムは「これは誰が作ったものか?」と地元の人に尋ねると「それはウガヤノフキアエ（※10）というイシカミの巨人が作った」と答えました。ウガヤノフキアエとは“生（ウ）まれた力（ガ）の強いものが、岩屋の屋根（ヤノ）を葺いて（フキ）合わせた（アエ）”という意味

9　宮崎市の日南海岸にある洞窟。周囲の岩は軟らかいうちに撫でて平らにしたように見えます。

10　ウガヤフキアエズという名前になり日本書紀などで神武天皇の父といわれています。

で、巨人がテレパシーで人間に伝えていたのです。

ジンムは鬼の洗濯岩の砂で出来た岩が糊で固めたような姿を見て、そのような岩を作る力を得るには「糊（ノリ）を友達（トモダチ）として頼めば良い」と思い、その頼む言葉を祝詞（ノリト）と呼びました。この言葉はそれ以降神にささげる言葉という、異なった意味として受け継がれました。

ジンムは自分もその巨人のように人力を越えた力を得て、人々を掌握し思い通りに支配したいと考え、その巨人が自分の親だと人々に触れ回りました。ジンムは竜神の力を得て、さらに人々に自分がイシカミの巨人の子供だと思わせることによって、周辺の者たちを次々と支配下に置き領土を広げていきました。



宮崎県の鵜戸神宮の洞窟内部

ウガヤノフキアエはムー大陸のイシカミのワイノイアと恋人同士でしたが、ムー大陸が沈んだ時に白い水煙が上がってワイノイアともう会えないことがわかり一気に弱ったのです。そのことを人間にテレパシーで伝えて、水煙が玉手箱の白い煙になり浦島太郎の物語となりました。

【若者はタケルノミコトを誘拐し、ヤマタイコクを裏切ってジンムに売る】

ジンムが領土を広げている頃、支配星の意識はヤマタイコクにも忍び寄っていました。その意識は外仕事が嫌になったヤマというヤマタイコクの若者に降りると、若者たちに外仕事をするように促す大国主に反感を抱かせ、そこにいることが嫌になるように仕向けました。

ヤマは彼と同じく仕事を嫌う仲間と共に、大国主がアトランティスから持ってきた鉄製の稲刈り鎌「草薙の剣」を盗んで他所の国に逃げるという計画を立てると、大国主の幼子・ニホンタケルノミコトに、大国主から鎌を借りてくるよう上手く言いくるめました。大国主はタケルノミコトに鎌を貸してと言われ、最初のうちは断っていましたが、何度も言ってくるのでとうとう鎌を貸してしまいました。支配星に入られたヤマはその鎌をタケルノミコトから奪うと、タケルノミコトを人質にとりヤマタイコクから逃げ出しました。

竜神に支配されたジンムは、豊かな国ヤマタイコクがあるという噂を聞いて、そこも自分の支配下に置こうと各地を攻めながらやって来ました。ジンムが強いという噂を聞いたヤマは、大国主から盗み出した鎌をジンムに差し出し、手下にしてもらおうと思い付きました。ジンムはヤマが差し出した稲刈鎌を見るや、ヤマタイコクを攻めればこのような素晴らしい鉄製品をもっと多く手に入れることが出来ると思い、ヤマを脅してヤマタイコクまで案内させました。

【ヤマタイコクの最後】

ところがジンムがヤマタイコクをいざ攻め滅ぼしてみると、ヤマタイコクには字が書かれた紙が大切にしまわれているだけで鉄製品の武器らしき物は何もなかったために、怒ったジンムは案内したヤマを殺すと（※１１）、大国主に直ちにヤマタイコクから立ち去るように命じました。

戦うことを好まない大国主は、ここでみんなが戦って殺されるよりも、自分がヤマタイコクを立ち去るのでヒミコをはじめ仲間の人々を助けて欲しいとジンムに頼みました。人の良い大国主はジンムがその約束を守ってくれると思い、ヒミコの髪の毛とヒミコが大切にしていた櫛を形見にして、ヒミコたちに別れを告げて８人の仲間と共に自らが作り上げた豊かな土地を去って行ったのでした。そしてヤマタイコクを追放された大国主と８人の部下たちは、当時まだ生きていた巨人の手の平に乗せてもらい、遠く離れた出雲の地に降ろしてもらいました。大国主たちはその後その巨人とともに出雲の地を開墾し、田を作ることなどの農業を地元の人たちに教えましたが、大国主はヤマタイコクやヒミコのことが忘れられずに亡くな

１１　ジンムに殺された若者が葬られた所が愛媛県大三島町の大山祇神社です。殺した後で祟られないようにジンムはそこに神社を作り、若者が神になったと地元の人に伝え祭らせてきたのです。

りました。

大国主がヤマタイコクから去ったことで争いは回避されましたが、ジンムは大国主との約束を破り、大国主を慕うヤマタイコクの人々に押し名前（刺青）を付け、奴隷として連れて行こうとしていました。一方ヒミコはイシカミから、ホシノミナという宇宙の大元の分身が地球を掃除した後に、丹波の国の星原という所で休んでいることを聞いていました。ヒミコは娘のイトに、ホシノミナのそばに降りたイシカミであるキミ山（城山）の麓の星原に行くように告げると、お供の者を付けてイトを密かに逃しました。しかし星原はあまりにも遠く、イトたちは星原に辿り着く前に道中で亡くなりました。ただ意識は星原に行くことを強く望んでいたため、瀬戸内海に浮かぶ家島の巨人がイトたちの亡骸を手の平に乗せ、次に丹波の巨人、最後に日室が岳の巨人へと手渡しをして、星原の君山のそばに運びました。

またヒミコが考えたホツマ文字やカタカナは、数千年後にソラのものの仲間のふりをした支配星がヤマトの巫女たちにビジョンやチャネリング（※12）で伝えたのです。そして権力者に都合の良いように内容を変えてしまいましたが、星述べであった小野小町はカタカナがヒミコによって作られたことを知りました。

12　ソラのものやイシカミ以外ともつながることをチャネリングと呼び、ソラのものやイシカミだけとつながる星述べと区別しています。

【ヒミコは奴隷にされる前に逃げ出して阿波の土柱で自殺した】

ジンムは星述べのヒミコの娘イトを自分の妻にしようと思っていたので、逃げられたことを知ると怒り狂い、ヒミコにも刺青を付け奴隷として連れて行くことにしました。ヒミコは娘が無事逃れることが出来たのを見届けた後、幸せに過ごしたヤマタイコクからどうしても離れることが出来ないので、この近くで死のうと思いました。そのことを知ったヒミコを慕う女の子は、ヒミコと一緒にいたいと懇願したので一緒に逃げることにしましたが、その話を聞いていた裏切り者のヤマと通じていた女性もついて行くと言いました。そのヤマと通じていた女性は欲深だったので、途中でヒミコの大切に持っていた物を騙し取り、ジンムへのみやげにしようと思ったのです。そしてその女性はヒミコが大事にしていた宝物を奪い取り、ヒミコは阿波の土柱（※13）の下の洞穴で持っていた刀で喉を突いて自ら命を絶ち、一緒についてきた女の子も奴隷にされるよりはとヒミコの後を追いました。

阿波の土柱はイシカミが土の原子に土の柱になってもらい、ヒミコの墓標としてヒミコの悲劇を伝えるようにと土の柱の形を保ってもらっているのです。

13　世界三大土柱の一つで徳島県にあり国の天然記念物です。

【ヤマタイコクを四国（死国）と呼ばせて封印し、その子孫を差別し続けた】

ジンムはヤマタイコクを徹底的に焼き尽くし何も残らないようにすると、このことを口にした者は奴隷にすると周りの人々に厳しく言い渡しました。そしてヤマタイコクの住民を奴隷として連れて行き、エタと呼び差別をしてきました。エタの本来の意味は「エ＝橋渡しする人」、「タ＝高い所から見る人＝食料を作ったイシカミと巨人」をあらわし、田作りを広め食料を作ったヤマタイコクの子孫をあらわす言葉なのです。そして大国主からいろいろな技術を教わっていた優秀なヤマタイコクの子孫は、支配者のために田を作らされては取り上げられて、決して自分たちの土地は持たせてもらえず、一生小作人として虐げられるということが、何千年も繰り返し行われてきたのでした。

その後支配星によって作られた仏教によりたくさんのお寺（※14）が作られ、イシカミを大切にしたヤマタイコクの跡地は完全に封印されたのです。さらにその後も支配者たちはヤマタイコクのあった場所を「四国」（死国）と命名し、ヤマタイコクを封印し続けているのです。

14　四国88ヶ所の霊場はお経を読ませてイシカミを封印するという支配星の計画で作られましたが、空海はヤマタイコクが滅ぼされたことを知り、そこにヤマタイコクの人を弔う意味を込めました。

【ヤマタノオロチとは朝鮮の８人の使者を殺したジンムの言い訳の産物である】

ジンムがヤマタイコクを攻め滅ぼしたちょうどその頃、イソナ（現在の朝鮮半島）の国から８人の使者が日本に交流を求めて訪ねて来ていました。けれども日本ではヤマタイコクとジンムの争いの真っ最中だったので、イソナの使者たちは仕方なく山に隠れて様子を見ていました。争いが長く続いたために食べ物が無くなってしまい、８人は食べ物を求めて山を下り仕方なく食べ物を盗んだところを見つかったため、あわててイソナの書状を見せました。

ジンムがヤマタイコクを焼き滅ぼしたことをイソナの使者たちが知っていたために、そのことがイソナの国に知られると困ると思い、使者たちにたくさんの酒を振る舞い、彼らが酔って寝込んだところを殺してしまいました。そしてそのことをイソナの人たちに知られないように、使者たちは８つの頭の大蛇に食べられたという噂を流し、それがヤマタノオロチの話になったのです。

《小休止…日本の民話の真相》

「猿カニ合戦」　カニは一生懸命柿を育てますが（イシカミの作ってくれた植物を育てるヤマタイコク）、それを横取りするのが猿（大陸から渡ってきたジンムたち）をあらわしています。物語に登場する臼は尻（知り）の形をしたウスでシリウスをあらわし、蜂は命を賭けてイシカミのことを伝える星延べを守った物部の守屋をあらわし、栗はイシカミの形をしており人間の食べ物として創られたことをあらわしています。

「ダイダラボウ」　日本のあちこちに伝わる巨人伝説で、巨人は池など人間の役に立つものを作ってくれましたが、その巨人は大きすぎて人間にはあまり分からなかったのと、権力者にとってはイシカミの存在は都合が悪かったので、ただの巨人伝説だけが残されました。

「竜伝説」　日本各地で竜への生贄の話があるのは本当のことですが、雨はイシカミが水を構成する原子に頼んで降らせます。雨雲はイシカミの意思の強さをあらわし、地上のイシカミの思いを伝える時に下から立ち上がる雲になり、それはあたかも竜が登っていくように見えます。雲がその形になって広がっていくのを支配星は知っていて、その形を真似て竜の形をビジョンで人間に見せて、雨を降らすのは竜だと思わせて人間に崇めさせたのです。

第7章　出雲と倭の国

【大国主は出雲でオオクニヌシとして生まれ変わり、出雲を大きな国にした】

ヤマタイコクが滅んでから何千年かの時を経て、意識の世界でゆっくり休んでいた大国主は“輪を大切にする人間を創る”というイシカミの希望を実現するために、オオクニヌシとして再び出雲に生まれ変わりました。イシカミたちは大柄な大人の身体を創り、そこに大国主が生まれ変わったので、オオクニヌシはすぐに働くことが出来ました。

その時ヒミコは生まれ変わることはありませんでしたが、タケルノミコトは再びオオクニヌシの子供として、イシカミによって創られた子供の身体に生まれ変わりました。そしてオオクニヌシと同じ思いをしていた8人の仲間も生まれ変わり、人間たちがより楽に生きていけるようにとイシカミの助けも得ながら働きました。そのため出雲は豊かな実りを与えられ、人々も集まってきて大きな集落になりましたが、同じ頃ジンムもヤマトに神武として生まれ変わっていましたが、出雲の噂を聞きつけ再び自分の支配下に置こうとやって来ました。

【オオクニヌシとその息子タケルノミコトの別れ】

ヤマタイコクで大国主とヒミコの子供として生まれたタケルノミコトは、ヤマタイコクを

裏切った若者ヤマによってジンムの元へ連れて行かれましたが、親を慕って泣くためにすぐにジンムに殺されてしまいました。その後出雲で大国主が生まれ変わった時に、再びオオクニヌシの子供として生まれ変わりましたが、そのことが更なる悲劇になっていったのです。

タケルノミコトは5歳くらいの子供の身体に創られて生まれ変わりましたが、ヤマトは絶えずオオクニヌシたちを監視していたので、そのことはすぐに神武の元に伝えられました。竜神に支配された好戦的な神武は、オオクニヌシの跡取りを絶えさせようと、またしても口実を付け戦いを挑んできて、タケルノミコトの命を絶つと脅かしました。オオクニヌシはタケルノミコトが殺されるくらいならと、泣く泣くタケルノミコトを神武の元に人質として差し出しました。

【忍耐を強いられた出雲の人々】

オオクニヌシは息子に会うために、毎年秋に大きな袋に秋の収穫物を持ってヤマトへ行っていたので、オオクニヌシが出雲に不在の時期を神無月と呼ぶようになりました。また好戦的な神武の部下も同じく竜神に支配され、繁栄する出雲に嫌がらせをしていましたが、争い

を避けるためにヤマトの使者を上座に座らせ、オオクニヌシは下座に座って（※1）形式上従う振りをしました。調子に乗ったヤマトの使者は、オオクニヌシやその部下に面白おかしく踊りを踊ることを強制し、オオクニヌシがそれに従って踊ったのがドジョウすくいの踊りの始まりとなりました。出雲の人々はヤマトの者からこのような屈辱を受けながらも、争うことが嫌でひたすらそれに耐え忍び、船を作り沿岸の人々と交流を深めていきました。そのため日本のあちこちで、名前を変えてオオクニヌシをあらわす神が祭られるようになっていったのでした。それは、神武が人気のあるオオクニヌシを妬んで、嫌がらせに白の反対の大黒で呼ばせるようにした大黒さんと呼ばれるものです。

　表向きはヤマトに逆らわないように振る舞っていた出雲の人々も、内心は決してヤマトには負けないという強い思いがあったので、ヤマトの建物よりも大きなものを造って本当の日本の王はオオクニヌシであることをあらわそうと思いました。そして巨人に手伝って欲しいと願っていたら、沖縄のイシカミの子孫であるコトシロヌシがテレパシーを聞きつけて手伝いにきてくれました。それで後の伝説となった巨大な神殿を建てることが出来たので、平安時代の書物の記述にある建築物の高さ比べでは、一に雲太（うんた、出雲大社の神殿）、二に和二（わに、大和の東大寺の大仏殿）、三に京三（きょうさん、京都御所の大極殿）と言われ

1　出雲大社は「神座」（オオクニヌシ）が横を向いて、「客座五神」が正面を向いています。

たのです。出雲大社の雲太とはかつて32丈（約96メートル）もあり、９本の柱が田の字状に配置されたと書かれていましたが、現実に３本を束ねて１本の柱とした直径３メートルもの柱が出土しました。



写真は青森の三内丸山遺跡ですが、出雲の神殿もこのようなものであったと知らされました。

【人質のタケルノミコトは神武の元で育つ】

人質にとられたタケルノミコトは、またしても神武の元に行くことになりましたが、今回はアツタとウネメというやさしい姉妹がいてかわいがってくれたために、寂しさを次第に忘れ大きく成長することが出来ました。そしてウネメと一緒にイシカタヤマ(※2)の麓の挙母（コロモ）で暮らしていましたが、神武はオオクニヌシの子供のタケルノミコトがいつか自分を裏切るのではないかと思っていました。それで神武はタケルノミコトに、出雲の国に朝

2　愛知県豊田市にある猿投山のことです。

鮮の８人の霊が乗り移った悪者集団がいるので、出雲に行って他の人にわからないようにその８人を始末するようにと命じました。タケルノミコトはそれを疑うこと無く、アツタが預かっていたヤマタイコクの大国主の形見であった稲刈鎌を持ち、出雲に行き自分はオオクニヌシの子供のタケルノミコトだと言って一人ずつ誘い出しました。

タケルノミコトは神武に言われた通り、出雲の人に分からないように８人の者を殺すと、その後ヤマトに報告に戻りました。神武はタケルノミコトが戻るや、その８人は実はタケルノミコトの父親・オオクニヌシの家来であったことを告げました。そのことを聞いてタケルノミコトは衝撃を受けましたが手向かうことも出来ず、傷心のタケルノミコトはウネメが待っていると思いイシカタヤマの麓のコロモに帰ってきました。けれどもそこで待っているはずのウネメは、タケルノミコトを出雲に行かせ、実の父の部下を殺させたことで神武を激しくなじったために殺されてしまっていました。絶望したタケルノミコトは「父の部下であった８人の霊を慰めるように」と言い残すと、イシカタヤマの山頂に行きそこで自ら大国主の形見の稲刈り鎌で命を断ったのでした。

タケルノミコトの祟りを怖れた神武は、タケルノミコトの言葉通りオオクニヌシの家来８人を祭った八柱神社（※3）と、イシカタヤマの麓には猿投神社（※4）を作りました。猿

3　愛知県豊田市美和町にあります。

を投げるとはヤマトの神武を猿にたとえ、ヤマトに支配されることを拒んだということをあらわす名前で、イシカミ側の仲間である臼・柿・カニと、ヤマトをあらわす猿とがけんかをする猿カニ合戦の物語がここから生まれました。

【神代文字やヘビ文字はビジョンで見せられて作られた】

星述べであった小野小町は、神代文字と呼ばれていた紙に書かれたカタカナやホツマ文字を見つけ、これはヒミコが考えた文字だと言ったので、ヤマトの権力者はヤマタイコクを滅ぼしたことが分かると困るので、ヒミコが作った文字は使わせずに中国から来た漢字を崩してひらがなを作りました。

その頃は神武やヤマトがヤマタイコクや倭の国を滅ぼしたことが口伝えされていましたが、それが文字で記録されると困るので、人々には文字を書くとヘビになると脅かし、ヘビ文字を神の文字として神社に置き、文字を使って良いのは一部の人だけに限定して、文字を書かせないようにしました。

4　愛知県豊田市猿投町にあります。創祀年代は不詳とされていて左ききの鎌を奉納する風習があります。

ヘビ文字はヘビのような形をした文字で、支配星とつながった巫女などがビジョンで見せられ書かれたものでしたが、反対になんとしても隠された歴史を記録に残しておこうと、ひそかにイシカミとつながった人がビジョンで教えられた文字（※5）で記録したのもありました。

【イシカミの巨人トヨウケは丹波の由良川沿いの私市円山古墳になった】

射手座のイシカミの君山（綾部市城山）は、丹波の由良川近くのホシノミナが降りたかたわらに降り、君山のお供のイシカミは君の尾山（綾部市上林）として近くに降りました。そして君の尾山は君山の身代わりになって人目をひくことにより、君山はヤマトから狙われることなく星述べの者たちを見守ることが出来ました。君山は２５７メートルほどの小さな山ですが、日室が岳（加佐郡大江町）、鶴山（綾部市内の本宮山）、トヨウケ（私市円山古墳）の巨人を作りました。

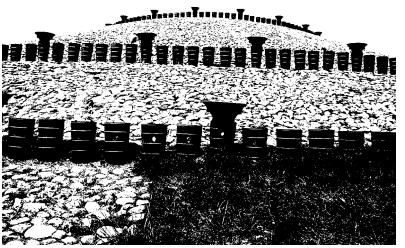
イシカミの巨人トヨウケはいろいろな食べ物をソラのものと協力して作り出し、そのこと

5　アビル文字、ホツマ文字、イスキリ文字など。

を他の巨人に連絡したので食べ物の神様（※6）として伝えられました。そしてトヨウケは死んだ後に私市円山古墳（※7）のある丘になったのです。私市円山古墳やその近くの聖（ヒジリ）塚、ショウブ塚には丸い石が葺き石として塚を覆っていましたが、それはイシカミの穴から出たお汁が固まったもので、イシカミをあらわす石を大切に思っていたことをあらわします。その反対にヤマトでは同じような石をトイレや庭に敷き詰め、それを踏みつけることでイシカミをないがしろにしていました。現在でも神社や寺の境内に石を敷き詰めるのは、このヤマトの思想を受け継いでいることをあらわしています。



イシカミの君山



私市円山古墳になったイシカミの巨人トヨウケ

6　豊受の神。食べ物の神で真名井神社、伊勢神宮の外宮の神様です。

7　京都府最大の古墳で高速道路の工事中に見つかりました。この古墳の記録が全く残っていないのは、ヤマトの権力者にとって都合が悪かったからです。

【ノアの洪水の時にイシカミの巨人がユダヤ人親子を日本に運んだ】

ノアとは何もないという意味で、それは地球が水で覆われたことをあらわしますが、その大洪水を乗り切ったユダヤ人たちをノアと呼び、ノアは何人もいました。

イシカミの言葉が聞こえたノア親子の名前は、父親は旧約聖書のモーゼから名前をもらったモーゼ、その息子はムウラといいました。大洪水が起こるというイシカミの言葉を聞いて、彼等は言われるままに大きな船を作りました。すると本当に大洪水が起きたので、作った船に乗って漂っていました。アララト山のイシカミの巨人は、ノアたちを船ごと掴んでアララトのまだ柔らかかったイシカミの身体の上に置いたので、その船の形（※8）がしっかりと今日まで残っているのです。そしてホシノミナがイシカミに、ノア親子を日本へ連れてくるようにと言ったので、途中で息絶えた一組のノア親子の亡骸を、イシカミの巨人が次々と手渡しし、最後は日室ヶ岳の巨人が由良の浜にそっと降ろしました。

その後、大国主が生まれ変わる頃に、耳が聞こえず言葉が話せない身体でノアも生まれ変わり、ノアの子供としてムウラも生まれ変わりました。それはイシカミたちが何としても自分たちのことを伝えて欲しいからでした。

8　トルコのアララト山上には舟形の地形が残っています。

【ユダヤ人のムウラと大国主の娘イトが倭の国の基礎を作った】

イトと乳母はヤマタイコクを無事抜け出しましたが、星原までの道程は遠かったので途中で息絶えてしまいました。しかし巨人たちが亡骸をホシノミナの降りた星原まで運びました。そしてイトはソラから見ていてムウラが生まれ変わることが分かったので、イトの意識もホシノミナの近くで生まれ変わることにしました。

大きくなったイトはヒミコと同じく星延べが出来るようになっていました。そしてムウラたちはホシノミナに呼ばれて星原までやって来た時に、イトと乳母に出会いました。イトたちは見慣れぬ姿に最初は警戒をしましたが、共にホシノミナを目指して来たことや、自分たちと同じようにイシカミの巨人に運ばれてきた記憶を持っていることが分かり、お互い心を許して一緒に生活をするようになりました。そしてムウラとイトの間には山彦が生まれました。ムウラたちはより多くの鉄を求めて由良に移動することになりましたが、山彦は君山のイシカミと話が出来たので君山のそばを離れるのが嫌だと言って、ホシノミナのそばに残っていたイトの乳母夫婦と一緒に暮らすことになりました。

ユダヤでの記憶を持つノアとムウラは、由良の地で生まれ変わりイシカミの教えや前世の記憶が蘇り、鉄を作り出すことが出来ました。そして良く切れる鉄の斧を作り出し、軽々と木を切り出したりするので、周りの人たちは教えを請うようになり、ノアとムウラの周りは

自然と輪を大切にする集団となっていきました。
その当時はあちこちに鉄鉱石が散在し砂鉄も豊富にあったので、砂浜に大きな穴を作って激しく火を燃やし、冷えた跡に残った鉄の固まりを集めていきました。そして砂浜に斧の形を作りそこに鉄の固まりを入れて（※9）、火を燃やし続けて鉄を溶かし斧の形にして、先を尖らせて斧を作ることを人々に教えました。この鉄の斧は宝のように大切にされ、子孫に受け継がれて行きました。また、ノアの親子は魚を捕る網の作り方なども教えたりもしました。由良川沿いでは海の物と山の物を交換するために人々も集まり、人々は穏やかな二人を尊敬しお互い協力しあっていたので次第に大きな村になっていきました。

【倭の国は由良川沿いに発展し石を大切にした】

倭の国とは主に由良川沿いに発展した丹波地方（※10）のことで、ヒミコがいつも「ワ

9　「おこしもの」と呼ばれる米の粉を型に入れて固めるお菓子は、この製鉄の技術を伝えています。

10　丹波は山奥ですが、「丹波篠山山家の猿が」と歌われるデカンショ節は、現代まで倭の国が封印され、思い出させないようにしていたことをあらわします。

（輪）」が大切と言っていたのと、イナホの女と書いた倭の文字をヒミコが作っていたので、それを残すために倭の国と名付けられました。倭の国は「ワ」の名前が示す通りヤマトに比べて平等で、特別な権力者もいないため富が一部に集中することはありませんでした。当時はイシカミの巨人やイシジンもまだ生きており、農業に必要な水を得るための池や川を作ってくれたことを人々はよく知っていたので、皆イシカミの教えをよく守ったのです。それで他の人から搾取してまで自分たちが贅沢をするということはなく、地球から与えてもらう自然の恵みに感謝して生活をしていました。また遠く中国や朝鮮との交易も盛んに行われるようになり、由良川をさかのぼって山の物と海の物や日常品から海外の珍しい品物まで、交換する市（※11）が設けられました。

当時はまだ支配星の影響があまりなく、その後生まれてきた星述べを通してイシカミが知恵を授けてくれるので、周りの人たちは星述べを大切にしていました。

大江山に天吹男命（あまのふくおのみこと）が祭られていますが、それは日室岳の分身の“天の岩戸”と呼ばれる岩になった巨人で、ムウラの製鉄を助けるために空気を吹きこんでいたのです。また大江山の北原遺跡には多量の鉄かすが残っており、製鉄がなされていたこ

11　綾部市のミナツキサンと呼ばれるお祭りは、「海の皆さんが着きましたよ」と物々交換をする市場の名残です。

とが分かります。
綾部市豊里町の弥生時代末から古墳時代初めの三宅遺跡は、人がすっぽりと入ってしまうような大きな穴が５７３箇所も開いています。本当はここにも三内丸山遺跡や吉野ヶ里遺跡のような大きな木が埋め込まれ、イシカミの巨人をあらわしていたのです。しかしヤマトのものはあちこちにわざと同じような大きな穴を開けて、何の穴だったか分からないようにしてしまいました。そのもくろみ通り、現在では何の穴か全く分からなくなり、私市丸山古墳と同様に人々の記憶からイシカミの巨人の証拠が消されたのです。
この他に綾部市物部町の近くにはたくさんの小さな古墳があり、旧石器時代の石器も出ています。古代からこの地域はイシカミに守られて栄えていた場所だったのです。

【ノア親子の惨劇】

倭の国で鉄製品が作られ、海外とも交易をして栄えているとの噂を聞きつけた神武は、鉄の斧や刀が欲しくなり倭の国も支配下におきたいと思いました。竜神に支配された神武はまず周りの国々を武力で支配下におき、大勢の軍隊を作って倭の国を侵略するための周到な準備をしました。

神武の不穏な動きを察したムウラは、仲間に戦いの備えをするように言い、イトにも小刀を与えて身を守る術を教えておきました。のどかなある日、海辺で魚の網の繕いをしていた時、突然多くの軍隊がムウラ一家を襲いました。一家には次男の海彦と生まれたばかりの女の子がいましたが、イトは子供たちをまず逃がし、自分もムウラから与えられた小刀を振り回し果敢に戦いました（※１２）が、竜神から知恵を授けられ戦いにたけていたヤマトの兵士は、そばにあった網（※１３）でイトをかぶせて捕まえてしまいました。星述べの出来る若くてきれいなイトを神武はなんとしても自分の妻にしたいと思っていたので、自殺される前に捕まえるように兵士に命令を出しておいたのです。神武は捕まえたイトに刀を突きつけて、抵抗するならイトを殺すとムウラを脅したので、やさしいムウラは自分が身代わりになるからと刀を投げ捨て、イトを助けるように言って自ら囚われの人となったのでした。こうして何の罪もないムウラとイトの平和な生活は神武によって無残に壊されたのでした。

囚われたムウラは丸太を組んだ筏（いかだ）の上の籠に入れられ、そのまま海に流されて追放されてしまいました。けれどもムウラを慕う人々は、なんとかムウラを助けようと思い、漁師が島影で筏を待ち受けて山里の人たちと協力をして、ムウラが隠れ住むのを助けました。

１２　京都府宮津市にある元伊勢籠神社では巫女が小刀を振りかざして舞います。

１３　アミダ如来の元になりました。

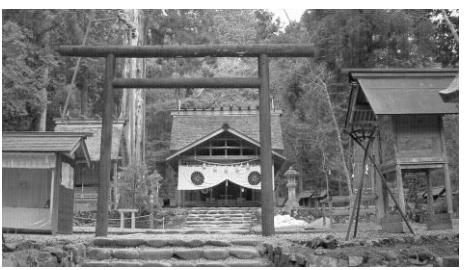
ムウラはこれまでの自分の体験を後世に残そうと、ひそかに文字で書き残しておきました。そしてヤマトの見張りが少なくなったのを見て、仲間と連絡し合い京都府大江町にある大江山そばの日室岳の麓で暮らしていましたが、再びヤマトの襲撃にあいノアの息子ムウラは製鉄仲間７８人と共に惨殺されてしまいました。大江山の毛原峠の頂上には首と胴がばらばらに切られた地蔵があります。現代では違う伝説で伝えられていますが、これはムウラがこの地でばらばらにされたことを伝えているのです。

神武はムウラの生き返りを恐れて亡骸をばらばらにして、

・胴体は大江山の元伊勢
・頭部は伊勢神宮
・右足は名古屋の椿神明社
・左足は岡山の伊勢神社
・性器は三重の椿大社

にそれぞれ納めて、祟られないように神社を建ててその土地の人に守らせました。

岡山はヤマトから離れていたので、地元の人はムウラの足のことをしっかりと伝えようと足王神社を作って守ってきましたが、その他の地ではヤマトに逆



元伊勢内宮。周りの小社は惨殺されたムウラの仲間達です。

らわないように違う神の名前を付けて守りました。
　ムウラの頭はヤマトヒメが支配星に言われるままあちこちに納め直して歩き、その地が元伊勢と称されましたが、最後に現在の伊勢に落ち着きました。その伊勢神宮では石段の「踏まぬ石」の下に頭を埋めて、参拝者にそれをわざと踏ませるようにして２００５年までムウラを封印してきました。しかしノア親子の真実が解き明かされたことによって、ウシトラノコンジン（※１４）として封印されてきたその封印が解かれたのです。

《小休止…百人一首は隠された歴史を歌にこめて伝えている》

　ムウラとイトの作った倭の国のことは、だいぶ後の時代まで語り伝えられていたようです。なぜ和歌なのに“集”と書かずに“首”と書くのかと思いませんか？
そして長い年月の間に多くの歌が読まれてきたのに、なぜその頃に読まれた歌が長く伝えられてきたか不思議だと思いませんか？

１４　神武は自分が死に追いやったモーゼとムウラを牛と虎にたとえて、鬼門の神である悪神として言い伝えさせました。

それは長い日本の歴史の中に本当の物語が隠されていることを、何としても後世に伝えるために、首が飛ぶ覚悟で歌の中に本当の物語を隠したからです。ヤマトの権力者にとって世に知られると都合が悪い本当の歴史とは何かというと、ヤマタイコクや倭の国という日本で最初に作られたすばらしい国がありながら、それを滅ぼしてその子孫を抹殺し、さらにその国の人たちを虐げてきたことです。

なぜヤマタイコクや倭の国のことが隠され続けたかというと、ヤマタイコクは平等で自由な国であったのに対して、ヤマトの権力者たちは大陸の真似をして階級制度を作り、自分たちに都合の良い国を作ろうとしたので人々が従おうとしなかったからです。ヤマトはその後大陸からの仏教を取り入れ、あたかも死後の世界を知っているように言い、仏教の教えに従わないと地獄へ行くと脅して各地に寺を建て、そこに地獄絵を置いて仏教を広めていったので、争いで不安を持つ国民は羊のように言うことを聞くようになっていきました。

このように恐怖の教えの仏教と、神武を神に祭り上げて密かに竜神信仰を組み入れた神道を使って、イシカミに対抗していったのです。なぜなら食べ物を与えてくれたイシカミや、製鉄などを教えてくれたムウラたちが作り上げていた理想の国である倭の国のことを、人々が思い出すと支配することが困難になるからでした。そして巨石やイワクラなどのイシカミに関わる場所にはことごとく竜神や仏像などを置き、勝手な伝説を作って人々に信じ込ませていきました。もっとも支配星は強力な力があったので、いろいろな奇跡を起すことが出来、

人々はますますイシカミのことを忘れていきました。

倭の国の頃は平等な社会でしたが、聖徳太子などが大陸から導入したさまざまな制度のために貧富の差が開いていき、奴隷として連れてこられたヤマタイコクの子孫はますます悲惨な状態になっていきました。

ヤマタイコクから逃げ出して山に逃げこんだ人たちは、隠れてヤマタイコクのことを伝えていました。そしてヤマトから遠く離れた地方の人たちも倭の国のことを伝えていましたが、ヤマトの勢力は次第に遠くまで広がり、ストーンサークルなどもほとんど壊されてしまいました。そしてヤマタイコクや倭の国のことは口に出して言うことすら許されないので、これまでのことが伝えられなくなると困る思い、その物語を何とか後世に伝えようとひそかに和歌に込めて残そうと思った人たちがいました。

一見すると百人の人が風景や色恋などを詠んだように思われていますが、これらの和歌は友達同士であった菅原道真、柿本（元）人麻呂、小野小町の３人で作った和歌を、ヤマトの権力者である選者の名前を付けることで世に出すことが許され、後世に伝えることが出来たものなのです。また百人一首はその作者からのチャネリングによると、カタカナ一文字ずつの意味をつなぎ合わせるものと、単語の意味をつなぎ合わせるものと、二通りの隠された意味があります。次の歌も隠されたことを伝えた和歌の一つです。

「ワタノハラ　ヤソシマカケテ　コギイデヌト　ヒトニハツゲヨ　アマノツリブネ」

これは、ムウラは無残な殺され方でお腹を裂かれて内臓が飛び散ったという惨状を「ワタノハラ」という言葉であらわしたのです。残る言葉は次の解釈の通りです。

「ヤソシマカケテ」＝ヤソ島＝外国まで
「コギイデヌト」＝漕いで逃げて
「ヒトニハツゲヨ」＝そしてこの惨劇を人に伝えよ
「アマノツリブネ」＝ムウラは籠船に乗せられて海に流されたので、神様に吊り上げてもらいたかったろうに

【神武はイトを強引にヤマトへ連れ去り幽閉した】

神武はムウラにイトを助けると約束しながらそれを裏切り、言うことを聞かないと子供を探し出して殺すとイトを脅かして、ヤマトへ強引に連れて行くことにしました。イトはホシノミナのある星原に残してきた息子の山彦に最後の別れをするために、どうしても会わせて

欲しいと頼みました。それでイトたちは船で由良川をさかのぼり、ヤマトに行く前に大江町の有路で船を降り、峠を越えて志賀郷や八田を経由して星原に行くことになりました。ヤマトのものはこの話を絶対に話してはいけないと、きつい緘口令をしいておきました。そのことを歌った和歌です。

「ユラノトヲ　ワタルフナビト　カヂヲタエ　ユクヘモシラヌ　コヒノミチカナ」

解釈は次の通りです。
由良川の河口の砂州が戸（ト）のようになっているのを「由良の戸」と呼びます。そこを通って倭の国の人々は船で行き来(ワタル)をしていましたが、ムウラが捕まえられた後しばらく交流を止められていた（カヂヲタエ）ことがあり、その後愛し合っていた（コヒ）二人の行方は分からなくなりました（ユクヘモシラヌ）。

星原への道中、イトは峠に白藤が（※15）咲いていたのを見て白人のムウラを偲び、その白藤を一枝折って胸に入れました。星原では山彦と涙の再会をしましたが、すぐに引き立

15　京都府大江町にある才の神の藤で天然記念物です。天皇の一行が通ったという伝説があります。

てられて別れることになり、山彦は石井根（※16）の巨石の上から手を振りいつまでもイトを見送っていました。そのことを歌った和歌です。

「タゴノウラニ　ウチイデテミレバ　シロタヘノ　フジノタカネニ　ユキハフリツツ」

解釈は次の通りです。
ヒミコの娘のイトがヤマトに連れていかれる時に、丹後（タゴ）の由良（ウラ）の家（ウチ）を出て星原に行ってみたら（イデテミレバ）、真実が絶え（シロ＝イシカミの話がタエ）ないように星述べをしていた山彦が、ヤマトに意地悪をされて耐え（タエ）ていた。白藤（フジ）を持ったお母さんが連れて行かれるのを、山彦は石井根の高い（タカネ）大きな岩の上でお母さんが行く(ユキ)のを手を振って（フリ）見送った。

ヤマトに連れて行かれたイトは逃げられないように八重の塀で囲われ幽閉され、もし逃げ出せば倭の国に残した子供を殺すと脅かされて、イトの子供が欲しい神武に無理やり子供を

16　昭和初期頃まで星原村の入口の石井根は大きな岩が道をふさいでおり、外部から敵が攻めてこられないようになっていました。その横は川で通り抜けるのには難所でした。

産まされたのでした。そのことを歌った和歌です。

「イニシエノ　ナラノミヤコノ　ヤエザクラ　ケフココノヘニ　ニホヒヌルカナ」

解釈は次の通りです。

大昔（イニシエ）、奈良の都（ヤマト）に八重（ヤエ）の柵（サク）で囲われた人がいたという噂を消そうと、今度は九重の策(サク)を試みたが噂の匂いは洩れてくる（ニオイヌルカナ）。

この情報が知らされたとき、ちょうど新潟で少女監禁事件が発覚しました。

【誘拐されたイトはニニギを生み、その後隠岐の島で余生を送った】

イトは水堀や八重垣で厳重に囲まれた家に幽閉され、神武の子供を産むように強制されました。神武はなんとしてもヒミコの血を引いた子供が欲しかったので、子供を産めば懐かしいふるさとへ帰してやると約束したのです。八重垣に囲まれそこから抜け出すことはどうしても出来ないと思ったイトは、神武の子供を生むことでここから出ようと思いました。

そしてイトはニニギを産みましたが、その子にはいつもイトについていた女性が乳母になり、その乳母が身代わりで残ることを決心してくれたので、イトはようやくそこから出ることが出来ました。イトは懐かしいふるさとへ帰りましたが、そこでは山彦の死の知らせが待っていて、海彦たちも何処へ行ったのか（※17）誰も知りませんでした。イトは絶望のあまり自殺をしようと思いましたが、イトに付いて来たスセリという女性が、自分がイトの身代わりになるので逃げるようにとイトに勧めました。スセリはオオクニヌシが隠岐の島（※18）にいることを聞き知っており、イトを逃がして自分がイトの代わりになりヤマトで大切にしてもらおうと思ったのです。イトもオオクニヌシが生きているのならと、ひそかにオオクニヌシを慕っている地元の人に助けてもらい、無事隠岐の島に行き最期までそこで平穏に暮らしました。しかしまたしてもヤマトは嫌がらせをして、後醍醐天皇をここに流刑させ、オオクニヌシたちのことを忘れさせようとしました。そのためにオオクニヌシとそのお共のものやイトの“意識”は、ヤマトの支配が及ばない北海道に移り、オオクニヌシは北海道神宮で、イトは札幌市の西野神社で静かに眠っていました。

一方スセリはヤマトへ帰りましたが、神武はイトが帰ってこなかったことに腹を立て、ス

17　地元の人に助けられて山の方に隠れていました。

18　由良比女神社があります。また玉若酢命神社には大己貴命（大国主）、須世理姫命も祭られています。

セリを箸で突き刺して殺してしまいました。

ヤマトに残ったニニギの乳母はニニギをイトの形見として大切に育てていましたが、イシカミの物語をしていたのを神武にとがめられ、股を刀で刺されて亡くなりました。生き残っていた海彦たちはそのことを伝え聞いて、天の橋立では“股覗き”をしてムウラやイトや乳母の悲劇を伝えたのでした。（※19）

【ムウラの父親ノアは追放され放浪のすえ金沢で亡くなる】

製鉄などで地元の人に貢献し慕われたノアも、倭の国が滅ぼされた時に悲惨な運命が待っていました。耳が聞こえず言葉を話せなかったムウラの父親のノアは、訳も分からず息子が筏に乗せられ流されるのを涙ながらに見送り、その後イトも捕まえられ何処となく連れて行かれるのを、なすすべもなく見ていました。そしてノアもその地に住むことを許されず、着のみ着のままで家を追い出され当てもなく放浪の旅に出たのでした。けれども近くの人たち

19　箸墓古墳は箸で突かれて死んだスセリの墓と伝えられました。天の橋立の股のぞきは、股を刺されて死んだ乳母が死に別れたムウラとイトを会わせているということから始まりました。

はノア親子にいろいろなことを教えてもらい尊敬していたので、ひそかに隠れてもてなしていました。途中で飲んだ水（※２０）がとてもおいしいとノアが誉めたので、その水を守っていた人はひそかにそのことを伝えていましたが、いつしかヤマトにもその噂が届きました。それでその水をヤマトまで運び、仏教の力で水も支配したと思わせたのです。それが奈良のお水取りの行事として残っているのです。

ノアは“お招きさん”と呼ばれ、倭の国のことを聞いていた若狭の人々は交代でノアの世話をしていましたが、ヤマトの者は嫌がらせをしてそのことも禁じました。ノアは更に遠くへ行かされ、仕方なく今の石川県金沢市あたりまで海沿いに行きましたが、その頃には服もぼろぼろになりヒゲも伸び放題で異様な姿となっていたので、ノアのことを知らなかった人は、言葉も話せない怪しい人がやって来たと思い籠に閉じ込めてしまいました。ノアは悲しくなり自分の名前「モーゼ」とだけつぶやいていましたが、次第に弱っていってついには籠の中で死んでしまいました。ノアが亡くなった後に倭の国のことを聞いた地元の人は、何も知らずひどいことをしたと悔やんで、せめて亡骸だけでもと丁寧に葬り（※２１）その後

２０　福井県小浜市の若狭彦神社の辺りでノアが飲んだ水が、東大寺のお水取りに使われたと知らされました。

２１　金沢市押水町にはモーゼのお墓があります。エジプト脱出のモーゼではなく同姓のノアのことです。

はそこを大切に守っていきました。

【ヤソの風貌をしたムウラとイトの息子の山彦もヤマトに殺された】

母親と悲しい別れをした山彦は、悲しみを忘れるために一生懸命働きました。イシカミの君山と話すことが出来た山彦は、イシカミから農業の仕方を教えられ、食べ物となる植物も新たに創り出してもらっていました。そして身体も大きく頑丈であり、鉄製のスキやクワを使い次々と田畑を開墾していったので、そこには多くの人たちが集まってきました。山彦のいた倭の国は海辺の人たちとの交流で益々栄えていきました。

けれどもヤマトの者はそのことを快く思わなく、いつかは父親の仕返しをされるのではないかと疑心暗鬼になり、山彦を亡き者にしようと大勢の軍隊を送りました。ヤマトの軍隊が星原に押し寄せてきたのを見て、イシカミの君山はキジに鳴くように知らせ、キジは声高く鳴き警告を発しました。それに気付いた山彦は一緒に暮らしていたイトの乳母夫婦と共に峠を越えて北の白道路（ハソウジ、※２２）に逃げましたが、西の物部（モノベ）の方からも

２２　白道路を“はそうじ”と呼ぶのは、白を掃除したという意味です。

攻めてきたヤマトの軍勢にあえなく捕まってしまい殺されてしまいました。次の歌はこのことを伝えた和歌です。

「オクヤマニ　モミジフミワケ　ナクシカノ　コエキクトキゾ　アキハカナシキ」

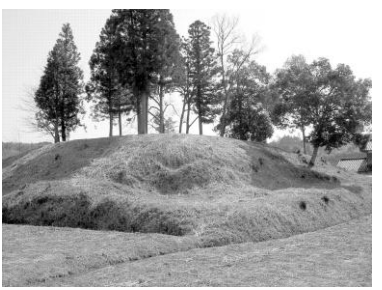
解釈は次の通りです。
ホシノミナ神社のある山奥の星原に、ヤマトの軍勢が紅葉をかき分けて御用（五葉＝もみじ）御用とやって来て、住んでいた山彦を殺してしまった。その時鹿が悲しく泣いた。（鹿の角＝白い木＝稲妻＝ホシノミナ）鹿の鳴き声を聞くと物悲しい。

その後地元の人は三柱神社や若宮神社を祭って山彦を偲びましたがヤマトの監視は厳しく、大男（外人の風貌をした山彦、※23）を悪者の伝説に仕立て上げ、あちこちに観音などを祭らせて、そちらに意識が向くように封印していきました。また君山や星原には山城を作り、この話が出来ないように絶えず監視していました。

一方ホシノミナのあった吉美地区では、ヤソ、ヤソ、ヤソと掛け声をかけて、ヤソ（山彦）

23　綾部市志賀郷の民話に大男の話があります。

を討ったというヒヤソ踊り（※２４）を奨励し、当時の権力者を崇めるように仕向けて、地元の人から山彦の記憶を完全に無くしてしまったのです。けれどもその地域にいたヤマタイコクの子孫でイシカミを信じる人たちは、聖塚やショウブ塚などの古墳に葺き石をして大切に守り、ヤマタイコクのことを知った菅原道真を祭る天満宮を大切にしていました。



聖塚(京都府綾部市)

【桃太郎の物語には隠された別な意味がある】

桃太郎の物語は山彦のことを隠して伝えている物語なのです。オニを悪者にすることとサルをお供に加えることでヤマトの目をそらし、ヤマトから遠い地域で伝えられました。

桃太郎は山彦であり、お供にキジをつけたのはヤマトが攻めてきた時にキジが鳴いて知らせたからで、犬は意識の世界では狐を、サルはヤマトをあらわしています。狐を祭る稲荷信

２４　綾部市高倉町に伝わる踊りで、ヤソ・ヤソと掛け声をかけ、首にかけたササラの竹を1本ずつ肩に上げていく踊りです。

仰は、ヤマトが自分たちの神を押し付けてきたので、そんな神を信じるのなら狐を信じる方がましということで始まったのです。また狐は支配星が送り込んだ（農作物を荒らす）ネズミの天敵なのです。

桃はシリウスの形をあらわし、柔らかい果肉はイシカミが柔らかかったこと、硬い大きな種は人間をあらわし、イシカミの石室などから人間が生まれたことをあらわしています。桃太郎のおじいさんとおばあさんは、山彦が乳母夫婦に育てられたことをあらわしています。キビダンゴは、「キミ・タンゴ」の言葉を残すために作られた言葉で、山彦がキミにいて丹後も最初は倭の国だったということです。そして山彦がヤマタイコクの子孫であり、ヤマトが倭の国を攻めて宝物を持っていったことも人々は知っていたので、ヤマトをやっつけて欲しいという希望をこめて桃太郎の物語を作ったのです。

【ヤタガラスとは倭の国が栄えた地域の三叉路を架空の動物にたとえた名前】

倭の国にある八田という地名の“八”は、大国主の８人の部下が殺されたことを伝えるために大切にされた数字で、大国主がイネの収穫を多くするために考え出した“田“を組み合わせました。また田という漢字は、ヒミコが考え出したことを言い伝えるために作られ

ました。

綾部市八田の三叉路は、舞鶴方面（オオシアマノサト、※２５）、大江山・元伊勢方面、星原を経由して綾部（倭の国の中心）方面と三方向に別れる場所であり、山彦が星原とこの地を仕事場として多くの田の開墾をしていった場所でもありました。八田の三叉路のそばにある三柱神社は山彦が仕事をしていた場所にあります。殺された山彦を偲んで後年その場所に作られた神社ですが、それもヤマトににらまれ今では遥拝所として残っているだけで建物はありません。

カラスはイシカミが地球に最初に降りてくる時に、地球が冷えて降りることが出来るかどうかを偵察しに降りてきた最初の動物ですが、地球はまだ熱く黒焦げになってしまったのでイシカミはカラスを生き返らせて黒い色にしたのです。そのためにカラスはイシカミの先導をした鳥ということをあらわしていたのですが、長い年月が経ち違う宗教もカラスを使うようになり、その意味が分からなくなってしまいました。

２５　かつて若狭湾は凡海郷（おおしあまのさと）という平野だったという伝説があります。凡海郷はオオイ・アマノヒトと呼び、生き残った人が沈んだ仲間を呼んでいると知らされました。



綾部市周辺の倭の国に関係する地図
（国土地理院発行の２万５千分の１地形図
河守、福知山東部、綾部、梅迫より作成）

【七支刀＝六叉鉾には刀の作り方が書いてある】

七支刀は奈良県天理市の石上神社の宝となっています。この神社は物部氏の神社ですが、最初は酒船石のそばに建っていて、ヤマトの嫌がらせで今の場所に移されたと知らされました。

七支刀は本当は六叉鉾（ロクサノホコ）と呼び、６の数字が大切であると形をビジョンで見せられたノアが作ったのです。製鉄をしていると戦うための刀を作っていると思われるので、戦いの刀と間違われないように６個の突き出しで稲妻＝ホシノミナをあらわした、戦いには不向きな形の刀をノアの親子は作りました。その刀に物部氏が後年に刀の作り方と、“これを持つ人が星述べをして言葉を聞いていた〟という意味合いの文字を彫らせました。

六叉鉾には次の文字が彫られています。

表　秦■四年五月十六日丙午正陽造百済釦七支刀■辟百兵宜供供侯王■■■■作

裏　先世以来未有此刀百済王世■奇生聖音故為倭王旨造伝■■世

要約すると、

表「高温で熱した鉄を１００回叩き釦７つで支刀を造る（６つの枝と柄に挿入する「なかご」という部分の合わせて７つを、本体と付けるための熱した鉄の固まりのこと）。この刀があると兵１００人分の力がある」

裏「昔から伝えられたこの刀には他にない力がある。百代の王の用を済ます。まれに生まれる星の言葉（＝聖音）を聞く者（＝星述べ）が持ってその言葉を聞いた。これを倭の国の王（※２６）が記録した（作ったのではない）。後世に述べ伝える」

当時の朝鮮は国が乱れていて北斗七星が支配していたので、仏教の伝来と共に7という文字を使わせたのです。日本書記では西暦２５２年に百済王から七支刀が献上されたと書かれていますが、百済が建国されたのは３４６年で矛盾しています。よって百済から日本に渡ってきたと考えるのは難しく、逆に倭の国の言葉の一部を取って自分の国が百代続くように百済という名前にしたとも考えられます。



七支刀
（六叉鉾）

２６　物部守屋のことです。

【物部守屋は仏教を受け入れなかったので殺された】

山彦が殺された後も、星原ではイシカミの君山と話が出来る星述べの子供があらわれて、イシカミからいろいろな農業の知恵を教えてもらっていました。その星述べの子供が言うことを他の人たちに伝える役割の人が物部氏で、子供の守りをするということから物部守屋と呼ばれていました。

イシカミがいろいろな知恵を与えてくれて、また巨人も仕事を手伝ってくれるので、人々はその地から離れずに、また海辺の人たちとも交流をしていたために多くの人たちが集まってきて、倭の国は大きな国になっていきました。物部守屋は指導者でしたが特に贅沢もしていなかったので、人々は平等で争いもなく平和に暮らしていました。

倭の国には海外からも人や物が入って来るので、ヤマトの権力者は倭の国を支配下に置こうと思い、星述べを亡き者にしようと思いました。それでヤマトに星述べの子供と物部守屋を呼び寄せ、イシカミのことを伝える星述べの子供ではなく、支配星とつながって仏教を広める子供と入れ替えるよう命令しました。けれどもイシカミを信じていた守屋は、その命令を受け入れることを断わり、乗ってきた馬で倭の国に帰ることにしました。なんとしても仏教を広めたいヤマトは追っ手を差し向けました。守屋たちは奈良県生駒郡の信貴山のイシカミに導かれて何とかヤマトから脱出することが出来ましたが、ヤマトの軍勢がそのまま追い

かけてきて、兵庫県氷上郡の小富士山で守屋は殺されてしまいました。星述べの子供は子坊主の姿で逃げ延びて無事にホシノミナのもとまでたどり着き、星原の洞窟で村人たちに匿われていましたが、守屋が殺されたと知り自ら命を絶ったのでした。そしてイシカミの言葉を伝える者は誰もいなくなってしまいました。守屋たちが馬で逃げたので、朝鮮から来たヤマトの権力者は馬を憎み、災いが馬に乗ってやって来ると噂を流しました。そのことを綾部市の長遺跡から出土した、飛鳥時代の足を折られた馬の焼き物で知らせています。また仏教が入ってくるのと同時に、支配星の牡牛座のものが蘇我を支配して牛を重要視させていたので、農業をするために飼われていた馬を皆殺しにして食べてしまいました。

その後守屋と星述べの子供の亡骸は円山に葬られましたが、その頃ヤマトの権力者であった推古天皇は守屋の人気があるのが気にいらなく、そこをキサキが一番嫌っているという名前の私市（キサイチ）と呼ぶように人々に命令をしました。円山は物部守屋を慕う人々が、石になったイシカミを大切にした守屋とイシカミのことを大切に思い、丸石で周りをきれいに敷き詰め祭っていました。しかしその後ヤマトから差し向けられた権力者は円山を祭ることを許さず、イシカミのいわれのある所をことごとく仏教の像などで封印し、そこに守屋と星述べの子供のお墓があったことも次第に忘れ去られていきました。

【丹後半島の丹後大国は、ムウラ亡き後はヤマトの支配下になった】

イシカミの子孫の山彦を助けようと、強硬派であったゼータのイシカミは二人の人間をムウラとイトのもとに降ろしました。それが山彦の弟の海彦と妹でした。ヤマトに襲われた時には海彦と妹はまだ小さく、大人の仲間に守られて京都府与謝郡の野田川の付近まで行き、そこでひそかに匿われて大きくなりました。しかしそこもヤマトの支配下になり、支配星の部下の人間は巧妙に弟たちを仲間にしてしまいました。海彦は敵に育てられながら丹後地方を治めるまでになり、この地でトヨウケのことを大切に守り伝えていました（※２７）が、丹後半島には大きな分身や巨人の亡骸があったために、それを利用しようとして竜神はヒル（＝竜神の子供）のエネルギー体を送り込んで支配していきました。

オオイ・アマノヒトとは、倭の国の海辺でかつて平野だった地域にいた村人たちを呼んでいる言葉です。倭の国の海辺の人たちは、山の上のヒルイ・マナ（ヒルイ＝竜神の子供に祈る人）に支配された人たちから責められて、悲惨な毎日を送っていました。逆らう者は土の入れ物（※２８）の中に入れられたのです。海辺の人たちの意識は、苦しみながら生きるよ

２７　京都府宮津市にある元伊勢籠神社になります。

２８　京都府加悦町の古墳公園の資料館には人が入れるくらいの円筒埴輪が展示されています。

りも違う人生を送りたいとイシカミに頼みました。それでイシカミはその土地の人の意識の願いを聞いてその土地を沈めたのです。

竜神に支配された権力者は、京都府与謝郡の蛭子山古墳に蛭（ヒル）を書いた土器を祭り、私市円山古墳の埴輪の意味を分からなくするために、意味のない三角や半円の穴を開けた埴輪を作り同じ様に自分たちの古墳に並べ、私市円山古墳に真似て葺き石もしておきました。そして丹後の古墳に多くの四獣鏡を供え、それを拝むことで支配星の作り出したエネルギー体を益々育てていきました。



若狭湾の沓島・冠島（京都府舞鶴市）
島の周りは海になっていますが
かつては陸地でした。

夏の丹後半島にはたくさんのねむの木の花が咲きます。これはここの悲惨な歴史が隠されたので、かわいそうな意識たちにゆっくり眠るようにと、イシカミたちが咲かせているのです。また真っ赤な野生の花がうつむいてたくさん咲いているのは、かつてこの地で多くの血が流されたことを物語っています。

【ヤマトに協力する丹後とヤマトの両方から攻められて倭の国は滅びた】

倭の国の物部氏一族は、支配星に支配されて仏教を推進するヤマトと、その仲間になった丹後の両方から攻められて滅ぼされ、倭の国はヤマトの支配下になってしまいました。倭の国の一部の人はヤマトに支配されるのを嫌がり、石を信じる人たちに匿われて倭の国を去って散り散りになっていきました。蘇我は朝鮮から来た仏教を国民に押し付けようとしました。そこで物部氏の人気にあやかって人々の信頼を得るために、一部の物部の女性を無理やり蘇我と政略結婚させたのです。そして倭の国を封印してその入り口をふさぐために、異常な数のお寺を建てた京都の町が作られたのです。

倭の国は滅ぼされましたが、それまで海外とも交流があり倭の国という名前は有名だったので、海外では日本のことを倭の国と呼ぶようになっていました。平和で平等な倭の国が何処にあったかが隠されたのは、民衆から搾取した富で巨大な仏教建築などを作るヤマトにとって都合が悪かったためです。倭の国は中国や朝鮮とも交流があり珍しい宝物もありましたが、全てヤマトに持っていかれたので石の作品しか残っていないのです。

《小休止…四隅突出型墳丘墓は巨人の亡骸であり初めは丸かった》

四隅突出型墳丘墓と呼ばれる古墳は、四隅に出っ張りがある四角い古墳ですが、それはイシカミの巨人の亡骸で、最初は丸い円墳の形をしていました。当時の人々がイシカミの巨人を大切に思っていたので、当時の権力者はそこから意識をそらすために、自分たちのお墓として利用したのです。そして丸い形のイシカミの記憶を無くするために、ヤマトの支配下にあった地域の権力者が四角い形に削り、さらにイシカミを見下すために、わざわざ動物の足を思わせる出っ張りを削った土で付けさせたのです。

四隅突出型墳墓は、広島、鳥取、島根、福井、石川とヤマトの支配下であった地域に多く見られ、岡山が1個、兵庫が2個と倭の国の仲間であった地域では少なく、さらに数多くの古墳が見られるのに、倭の国であった地域では見られません。それは物部氏がヤマトと対等の力を持っており、そのようなイシカミを侮辱することを許さなかったからです。

第８章　ヤマト

【ヤマトは支配星が作った国で“矢で治めて魔を友とする”国だった】

ヤマタイコクを滅ぼしたジンムは、支配星の言うままにヤマト地方で落ち着きました。そしてヤマタイコクから連れてきた人たちを奴隷として働かせ、支配星に守られて周辺地域も支配下に治め、望み通りの人間生活の体験をした後、肉体を終えて意識の世界で休んでいました。けれども何千年かの後に、大国主がイシカミの望みの人間世界を作るため再び肉体を持ったことを知って、支配星は再びジンムにも肉体を持たせ、オオクニヌシの邪魔をさせるために生まれ変わらせました。そして支配星の仲間も、神武の部下として自分たちも神と名乗って、強力な力で人間を操り人形のように思うがままに支配しました。

その支配星の中に昆虫を送り込んだ星のものがいました。それらは地球の近くにいて、神と名乗り強力な力で人間を支配し、人間に昆虫の真似をさせて今日まで崇めさせています。それは天皇や神職の人が着用する冠であらわされています。冠にタレを垂れさせたもの(纓、えい)は触角をあらわし、その冠をかぶることで神の使いと思わせ、昆虫の星を大切にさせてきました。同じく支配星は、ソラにいる大勢の名のない星たちをあらわす髪の毛を全て剃らせたり、頭に布をかぶせさせたりして、髪の毛の意味を隠してきました。

【イシカミの分身の亡骸を後年の権力者が自分の墓にしたものが古墳である】

日本に降りたイシカミたちは、支配星が作る宗教によって人々が支配されるようになることを知っていました。イシカミの予想通り、紀伊半島には熊野の古神道、高野山の仏教、精神世界の天川など支配星が作ったいろいろな宗教が集まってきました。それで紀伊半島に多くのイシカミが降りて、その分身達で“支配星の言葉”を石のツボに入れておいたという意味を知らせるために、紀伊半島を壷の形にしておきました。そしてイシカミの分身や巨人やイシジンたちは、まだイシカミの身体が柔らかいうちに、その外側をきれいな白い岩（南紀白浜）で飾ったのです。

紀伊半島が出来あがった時、奈良盆地はまだ海の浅瀬で海水が残っており、イシカミの分身たちはそれを飲み干して横になったので、その亡骸は柔らかい土になりました。イシカミの分身の亡骸は大きな前方後円墳の形になり、小さな巨人は塚になりましたが、大きな働きをしたイシカミの分身たちを見ていた当時の小さな人間は、その亡骸を大切に守っていました。

支配星は人間にイシカミのことを忘れさせるために、イシカミの亡骸を自分たちの支配した人間のお墓として利用することによって、イシカミではなくお墓に入った人間の方に意識が向くように計画したのです。それで支配星の部下の竜神は、権力者にイシカミの亡骸を自

分たちのお墓にするようにと教えました。権力者が自分のお墓として利用する時にいろいろな物を一緒に入れたので、一般に古墳はその時代に作られたと思われていますが、その時に石室などが作られたわけではないのです。そしてそのお墓を崇めさせ大切にするようにして、イシカミのことを忘れさせていったのです。権力者はイシカミの分身などの亡骸を次々と自分たちのお墓にしていきましたが、その数に限りがあったので仕方なく普通の小さなお墓を作ることになり、それで古墳時代は５００年足らずで終わったのです。

【ヤマトの巨石遺跡は巨人が作ったが悪い意味で伝えられた】

いろいろな石の形や巨石遺跡は、イシカミが柔らかな時に巨人やイシジンたちが作りました。それを地元の人たちは大切にしていましたが、ヤマトの権力者たちは巨人を鬼などと悪者に仕立て上げた物語を作り、それを地元の人たちは語り伝えてしまいました。そして権力者は地元の人たちがそれまで大切にしていた船形の石（※1）の巨石に、排尿しても何も祟

1　奈良県高市郡明日香村の小高い丘の上にある酒船石です。

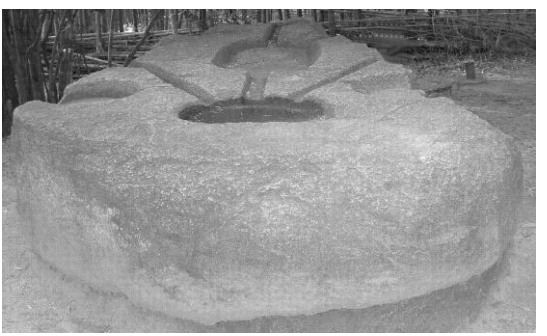
られないと思わせたり、その巨石のある麓にイシカミをあらわす亀型のトイレ（※２）を作り、わざわざそこで排尿させたりしました。

鬼の雪隠（※３）は星述べが言葉を聞くための石室でしたが、囲いの部分を下に蹴落としたものです。また、鬼のまな板と呼ばれる巨石はその石室の底の部分で、両方とも巨人がイシカミのことを伝えるために作った巨石の作品なのに、それを壊して嫌な名前に変えてしまいました。

石舞台は石室と同じく、ここで人間が創られました。そのことが分かるように、上の巨石で赤ん坊をあらわしています。

亀石（※４）の顔は南西を向いています。この亀石が西を向いた時には大和盆地は泥沼になると言って脅かしていたのは、イシカミをあらわす亀のことに気付かれるとヤマトは都合が悪かったからです。

２　酒船石のある丘の麓にある亀の形に彫られた石です。
３　奈良県高市郡明日香村にある石室古墳です。
４　奈良県高市郡明日香村にある亀の形をした石です。

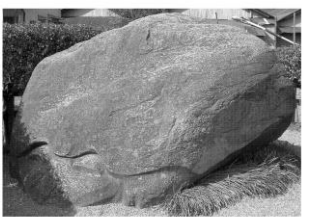


奈良県高市郡明日香村の酒船石

高松塚古墳（※5）の壁画に描かれている四獣神は白虎、青竜、玄武、朱雀で、玄武は亀をヘビが巻きつけているものをあらわしますが、それは支配星をあらわすヘビがイシカミをあらわす亀をやっつけていることをあらわしています。支配星が壁画に描かれているそれらを神として崇めさせていたので、ヤマトの権力者は死後もそれらに守ってもらおうとお墓に絵を描いたのです。

猿石（※6）は朝鮮から来た人々に支配され仏教を押し付けられた人たちが、猿カニ合戦の猿と同じように他人が作ったものを取り上げる権力者をあらわす姿として醜い石像を作って、せめてもの憂さ晴らしをしたのです。天皇が支配星につながった者に振り回されて度々遷都するので、国民は過酷な税を搾取され嫌気が差していたのです。







亀型に彫られたトイレ〔上〕
亀石（中）
猿石（下）

5　奈良県高市郡明日香村にある石室古墳です。

6　奈良県高市郡明日香村の吉備姫王墓の前に並べてあります。

【支配星は水を支配することで人間を支配しようとした】

人間の身体は６割が水分と言われていますが、支配星が水を支配することで人間を支配しようとしたその一つが奈良のお水取りという行事です。奈良のお水取りは、福井県小浜市の神宮寺にある井戸の水を、奈良県の東大寺まで運ぶ行事です。その水はノアが家を追われた時に立ち寄って飲んだとされる所から運ばれます。ノアは家を追い出されて仕方なく流浪の旅に出ましたが、それまでは製鉄などを教えて皆から尊敬されていました。そのノアが立ち寄って水を飲んだということを村人たちが伝えていたので、そのことを支配星は利用して、その水をヤマトにある寺に運ぶことで自分たちが水も支配していると思わせたのです。

また、神社で竜の口から水が出るようにしたのも、同じように水を支配しているということをあらわしています。池や沼の水は人間にとって大切な働きをするので、その池や沼に支配星は竜神の意識体を送り込み、イシカミたちの思いで出来る雲を真似た竜神のビジョンを見せ、あたかも雨を降らすのが竜神であると思わせてきました。当時の人々は巨人が大きな池や川などを作ったのを知っていたので、支配星はその話を変えて伝えさせるために竜神の姿を人間に見せていたので、“竜神が雨を降らす”のではありません。

【ヤマトは神道と仏教の力でイシカミを封印し領土を広げた】

ヤマト政権は宗教を利用して勢力を広げて全国を支配していきました。自分たちに都合のよい神話を作り、従わない者は責め滅ぼしてその人を神として拝ませて、神道を使うことによって敵をうまく取り込んでいったのです。また支配星に支配された隣国の高麗から“仏教を信じないと攻める”と脅されていたヤマトは、仏教を人々に無理やり押し付けました。人々は必死に抵抗しましたが、ヤマトの支配者は人々に恐怖を押し付けることによって支配していきました。税を導入して年貢を厳しく取り立てて国を成立させたのも、まさに恐怖政治の賜物です。この支配で身分の差が出来たことにより、貧富の差が次第に開いていきました。農民は生かさず殺さずおけばよいという考えで、農民が汗水たらして作り上げた食物を貴族と僧侶が吸い上げて贅沢三昧をしていました。

【神代文字やヘビ文字はヒミコの文字を隠すために作られた】

イシカミはヤマタイコクや倭の国でつながった人間に、大切なことを文字として記録するようにビジョンを見せました。その一つがヒミコのホツマ文字ですが、他の人にもアビル文

字やイスキリ文字などの文字を見せて記録をさせていました。けれどもヤマトの権力者は、ヤマタイコクや倭の国を滅ぼしたことが文字で残されると困るので、ヘビ文字を神の文字として神社に置かせ、人々には文字を書くとヘビになると脅かして文字を書かせないようにしました。ヘビ文字はヘビのような形をした文字で、支配星とつながった巫女などがビジョンで見せられて書いたものでした。また大陸から仏教の経典が入ってきて漢字が使われるようになり、中国から逆輸入された漢字で権力者に都合の良い物語（古事記や日本書紀）を作っていました。

けれども星延べだった小野小町が、紙に書かれた神代文字と呼ばれていたカタカナやホツマ文字を見つけて、それはヒミコが考えた文字だと知り、ヤマトの権力者はヤマタイコクや倭の国を滅ぼしたことが分かると困るので、ヒミコが作った文字ということに意識を向けさせないために、中国から来た漢字を崩してひらがなを作りました。

【邪馬台国はヤマタイコクの名前を真似した後年の国】

中国の使者はヤマタイコクへやってきては文字や農業を習っていましたが、国へ帰るとその恩を忘れて日本の小さなヤマタイコクを蔑み、「邪馬台国」という嫌な当て字を付けました。

後の九州で支配星とつながった巫女が先頭に立つ国が出来ましたが、この巫女は滅びたヤマタイコクやヒミコの真似をして、自分の国に邪馬台国という名前を付けヒミコと名乗りました。ニセヒミコには人間を争わせて楽しむ支配星が乗り移っていたので、邪馬台国は周りの国との争いが絶えず、ついには中国にまで応援を頼むようになっていきました。それを聞いた中国は、戦乱に紛れて邪馬台国を侵略しようと思いました。中国が日本を攻めようとしていることが分かったので、彗星ルシファーが衝突したのと時期を同じくして、日本列島の周りの平野になっていたイシカミたちは、中国の竜神から日本を守るためにいっせいに海に沈みました。そして日本は小さな島国になったので、中国は攻めようと思わなくなり邪馬台国は占領されることがなくなったのです。

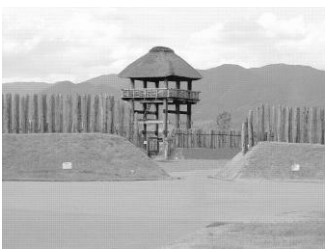
日本の近海に海底遺跡（※7）が多数見つかるのは、このとき沈められた平野にあったもので、周囲に小さな島があるのは支配星が支配していた高い所が残ったものです。そのうちの一つ福岡県宗像郡の沖ノ島は、海の正倉院と言われる位の遺物や巨石遺跡がありますが、一般人は入ることが出来ません。それはアボリジニが聖地を見せないのと同じで、人間にイシカミの作品があることが気付かれるのが嫌なので、支配星が「神の島なので見せない」と命令するままに勝手に封印していますが、この島はイシカミに返すべきなのです。

7　福岡の玄海灘、鹿児島県沖、沖縄県本島沖、与那国島、静岡県沖などには海底遺跡の痕跡があります。

長崎県の壱岐は支配星がその部下を送り込み、月読命（ツクヨミノミコト）を祭らせていたので、その地域は沈むことなく島として残り、それは福岡県の志賀島も同じでした。志賀島の悪人は、倭の国の人たちが大陸と交易しているのを知って金印を盗みましたが、それを隠していた悪人も殺されて行方が分からなくなり、後年志賀島の畑の中から発見されました。

【魏志倭人伝の倭国への道程の記録は案内人が遠回りして教えた】

倭は日本全体をあらわしており、沖縄は当時もっと地続きだったので今の島を基準に計ることは意味がありません。邪馬台国は吉野ヶ里のある地域の国を指しました。中国は戦乱の日本を支配下におこうとして使者を遣わしましたが、案内人は中国に占領されるのを恐れて機転を利かせ、使者をわざと大回りさせて日本がずいぶん遠い国であると思わせたのでした。このため、魏志倭人伝に書かれている邪馬台国までの道程は、壱岐までの距離は正しいのですが、そこから邪馬台国までの距離はデタラメなのです。それで文献だけの距離を当てはめるととんでもない所になってしまい、そのことで如何に文献の記録が当てにならないかとい



吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼郡）ニセのヒミコの邪馬台国です。

う証拠にもなるのです。またその解釈が疑われるのは、記述にある「男生口四人女生口六人」は奴隷として解釈されていますが、これは珍しいものとして土産に持たせた干し柿と海のカキ（いずれもイシカミをあらわす）のことだからです。

【蘇我は仏教と共に朝鮮から来て巨石信仰を排除した】

支配星はそのエネルギーを朝鮮から来た蘇我に与えたので、蘇我は仏教を広めると共に権力を益々強めていきました。その一族の中の一人だった蘇我の馬子は、天皇の側女の子供で冷遇された馬小屋の番人でした。彼は悪知恵にたけており、天皇の側女だった推古が支配星の声が聞こえるようになると、神の声が聞こえると言いふらして利用し愛人関係になりました。そして都合の悪い人を次々と殺して、推古を日本で最初の女性天皇にしてしまいました。

また、物部守屋を騙してヤマトへおびき寄せましたが、出した条件を聞き入れずに守屋たちが馬で逃げたので、追っ手を差し向けて殺してしまいました。蘇我はその馬を憎むあまり、農作業に必要な馬まで全て捕まえて一族で食べてしまったので、日本古来の農耕馬までほとんどいなくなってしまいました。

このように残虐な蘇我の一族は、物部氏を滅ぼし仏教を利用して民衆を支配し、キトラ古

墳などに朝鮮の絵を描かせて、四獣神の悪神を利用してイシカミを封印したのです。

【推古天皇は支配星に支配された女性でイシカミの排除を強行した】

ＡＤ４００年頃のルシファー衝突のために、気候の異常が続いて人心の不安は極度に高まっており、それまでイシカミを信仰していた人々の一部も、次々と予言が当たる支配星に支配された推古の信仰する仏教を信じるようになりました。支配星のエネルギー体は強力なエネルギーを推古に与えて乗り移り、人間体験をしていました。未来を見ることが出来る支配星は知恵を推古に授け、人々から搾取したお金で贅沢な建築をさせて贅の限りをつくしました。そして、よりイシカミ信仰を途絶えさせるために、それまで崇めていたイシカミをあらわす巨石を船の形に変えて、イシカミは旅立ったと思わせました。

その舟形の石に排尿をしても何も祟られないとイシカミを侮辱したのが推古で、使われたのが酒船石や酒船石のある丘の麓の亀形に彫られた石でした。推古は支配星の言うままに贅沢三昧の生活をしたために、亡くなっても誰からも惜しまれず、書物で伝えられている場所とは違う場所に葬られてその場所も分からなくされてしまいました。

【聖徳太子も支配された人で、支配するのに都合の良い制度を作った】

聖徳太子の本名が「うまやとのみこ」と呼ばれるのは、推古天皇がまだ側女の時に馬小屋の番人だった蘇我の馬子との間に出来た子供だったからです。召し使いにまでさげすまれながら大きくなった聖徳太子は、母親と同じく支配星と繋がることが出来たので予言をすることが出来、また母親も天皇になったために若くして権力の座につくことが出来ました。

太子が色で位を決めたのは、ホシノミナの稲妻の色が白と知っていたので、それに対抗するために支配星が教えたのです。それは支配星に言われるままに村人を刺し殺したとき、村人が恐怖で青くなったのを見て、支配星はその色が一番大切と教えたからです。また「和をもって貴しとなす」の言葉は、ヒミコが伝えていた言葉をそのまま真似したのです。

けれども太子も母親と同じく仏教による恐怖で人々を支配したために多くの人たちから嫌がられ、猪狩りをしたことで僧侶から強く責められて自殺してしまいました。そして推古と同じように、葬られた場所も分からなくされてしまいました。しかし民衆から税を取り上げる方法を考えたことや、仏教を広めたことが後の権力者にとっては都合が良かったので、聖徳太子は聖人のように祭り上げられて利用されてきました。

第９章　イエスからクラノスケまで

【イエスは磔で死なずにエルサレムを脱出し、青森に来てイスキリと名乗った】

イエスは心優しい人でした。しかしインドに仕事の手伝いに行くようになってから支配星に支配されましたが、一方でイシカミの声も時々聞いていました。支配星は自分を神と名乗り、イエスを意のままに支配して最後は磔にさせ、イエスの恐怖の思いをエネルギーとして得ていましたが、後に離れていきました。それは支配星の化身であるヘビが一番嫌がる茨の冠をイエスがかぶったからでした。

その後イエスはイシカミの声に導かれ、無事にエルサレムを離れて日本に向かうことになりました。（※1）この頃は地軸が移動する前だったので、日本海側は今より赤道に近く温暖な気候で交易も栄えていました。なぜこの地にイエスが来たかというと、ユダヤ人の神ヤハウエーは岩木山の巨人であったので、そのイシカミに導かれたからです。

日本までの航海が耐え切れない弟子のユダは、インドで船を降りて以前にイエスが働いていた商人の所で働くことになりました。ところがインドの港に寄ったことで、弟子の一人に支配星のエネルギー体が入り込みました。イエスたちが日本に着いてから支配星はその弟子

1　付録【ソラのイエス物語】を参照してください。

に遮光器土偶（※2）を作らせて、それを拝ませてその地方をも支配しようとしたのです。遮光器土偶はインドの女性を真似て大きな目とくびれのある肉体が強調され、身体にはヘビの模様が描かれ、ブッタが筋無力症のため半眼開きだったのを真似て半眼にされました。

イエスたちは青森県の十三湊（※3）を経て戸来村に辿り着きました。イエスの弟たちは戸来村に残り土地の女性と結婚し子供も生まれました。一緒に来た船頭はその後坂口と名乗りましたが、彼はゴルゴダの坂の登り口に住んでいたイエスの弟子でした。イエスはローマからの追手が来ないか絶えず心配だったので、地元の人に「イエスは死んだ」という意味の「ナニャドヤラ（※4）」という歌と踊りを教えて、バーソロミューと共に青森を後にしました。イエスは支配星に命令されていたのでいつもイエス、イエスと言っていましたが、日本に来てからは支配星の言葉を受けなくなったために“イ（エ）スキリ”と、イエスを切るという意味でイスキリと名乗りました。

2　縄文時代の遺跡から発掘されていますが、支配星は真実の歴史を隠すために、周りの環境などを強力なエネルギーで変えたのです。

3　青森地方で中世まで栄えていた港でした。

4　ヘブライ語では「聖前に主を讃えよ、聖前に主は逆賊を掃討したまえり、聖前に主を讃えよ」と訳されるそうです。

【イスキリは茨城で滞在し、茨の冠の意味を知らせて書き物を残した】

青森を後にしたイスキリ一行は、太平洋側をあちこち立ち寄りながら南下していきました。茨城県では筑波山のイシカミの巨人が人間のためによく働いたので、その地の人々はイシカミについていろいろと教えてもらおうとイスキリたちを歓迎しました。イスキリたちはそこにしばらく留まり、いろいろと身の上話をしたり書き物を残したりしました。

イスキリは支配星の声が聞こえ苦労したので、茨の冠をかぶることでその声が聞けないようにしたと話したので、そこの地名は“イバラのことを記録する”という意味のイバラギ（※5）となりました。また船乗り仲間の噂で、大昔ユダヤ人が能登の近くで隠れて書き物（※6）をしてそれが残っていると知らされて、イスキリも文字を書いて自分の証拠を残しておこうと思いました。当時は文字を書くとヘビになるとヤマトが噂を流していたので、全ての記録は口伝えでされていましたが、イスキリはそのような心配はないと出来るだけ直線のイスキリ文字（※7）を作って書き残しておきました。

5　現在はイバラキと言います。

6　竹内文書のことで茨城県の皇祖皇太神宮が守っていました。

7　皇祖皇太神宮に伝わる、キリストが書いたと言われる直線で構成された文字です。

それからイスキリたちはシラヤマ（富士山）に呼ばれて移動し、その地でもしばらく留まって周りの人にいろいろと教えたために、地元の人はイスキリをアラハバキと崇めていました。イスキリは、アラー（太陽）やハバク（ほうき星＝彗星）も人間にとって大きな影響があると言ったので、人々はイスキリを崇める代わりにアラハバキ（※８）を神として祭ってしまったのです。

【大坂の意味と因幡の白ウサギ】

その後イスキリは御在所岳に行こうと思いましたが、ヤマトの警備が厳しくなかなかたどり着けませんでした。そして大坂（※９）までやって来た時に、生駒山（※１０）のイシカミに呼ばれてその地に留まることにしました。平野なのに大坂と書かせたのは、イスキリが“ゴルゴダの丘の教訓を忘れてはいけない、上に立って人々を支配しようとすると、支配星

８　荒覇吐、荒脛とも書き、主に東北から中部地方にかけて信仰されていました。
９　現在の大阪です。明治初年までは「大坂」と書きました。（新辞林　三省堂による）
１０　生駒山山上には巨石があり古代は聖地でした。

に支配される〟ということを、警告を込めて名付けたのでした。

イスキリはある時星述べで出雲の王だったというオオクニヌシの噂を聞き、オオクニヌシの教えを守っているという出雲に行きたいと思いましたが、体力が無いので弟子のバーソロミューに出雲へ行くように頼みました。けれどもそこでもヤマトの嫌がらせにあい、全ての土産を奪われて二度と出雲に行くなと脅かされました。「因幡の白ウサギ」は、ヤマトであるワニ（※11）を飛び越えて出雲に行こうとした、イスキリの弟子バーソロミューを例えた物語なのです。

【一寸法師は仁徳天皇でイスキリの養子だった】

イスキリは自分と同じユダヤ人がノアの洪水の時に日本に流れ着いて、その生まれ変わりの子孫が自分と同じ星述べをしているということを噂で聞き、その子孫を呼び寄せて面倒を見ることにしました。そのことをヤマトの者は苦々しく思いましたが、イスキリの人気に逆

11　平安時代の書物に建物の大きさが、雲太（出雲大社の神殿）、和ニ（ワニ：奈良の東大寺の大仏殿）、京三（京の平安京の大極殿）の順と伝えられていました。

らうことが出来ず、イスキリはその子供に自分が体験してきたことや学んだことを教えたので、その子供は大きくなって立派な大人になりました。その話が「一寸法師」の物語となったのです。

イスキリの養子であった星述べの子供は、大人になると日本で最初の選挙によって天皇になり仁徳と名乗りました。仁徳天皇は民を思いやり、イシカミの言葉を伝える星述べを大切にして、その星述べを守る物部一族の大きな働きで平和な時代が過ぎていきました。

仁徳はイシカミからいろいろと教えられていましたが、イスキリも同じイシカミの言葉を聞いていました。イスキリは「目には目を、歯には歯を」の本当の意味である、目とは見て楽しむもの、歯とは食べるものをあらわす地球からの贈り物をもらった時には、お返しをするようにして富を独り占めしてはいけない、ということを民に教えました。頂き物をしたら紙に書いて、そのお返しがすんだら笹に結び付けて燃やすという、七夕の形でそのことを教えたのです。またイシカミの形が𐤉（※12）であると聞いていたので、それを伝えるために自分が死んだ時にそこをお墓にしてもらったのです。

12　ギリシャ文字の最後の文字Ωは、たくさんの物語を一つの袋にまとめるという意味があります。

「ハルスギテ　ナツキニケラシ　シロタエノ　コロモホステフ　アマノカグヤマ」

この百人一首の解釈は次の通りです。

磔を逃れた（イエスが）夏（のように暑いインドを経て）来た。（そしてユダヤ人ノアの子の）白人の子孫が（ヤマトにいじめられて）耐えている（と聞いた）。その子供を欲しいと頼んだのです。そして天（射手座）のことが山に隠されている。

イスキリには13人の弟子がいたので、住んでいた所を十三（大阪府）と書きジュウソウと読ませ、その言葉にジュー＝ユダヤ人、ソウ＝思うという意味を込めて自分の故郷を思っていました。イスキリは生駒山のイシカミに呼ばれてこの地にやって来て、最期は頂上にある巨石のそばに葬って欲しいと言い残しておいたので、死んだ後はそこに埋葬されました。そして十三重の石塔を目印にしました。また、イスキリと最後まで一緒に過ごしたバーソロミューもそのそばに葬られました。けれどもその後、そのお墓を隠しイシカミを封印するためにそこに寺が建てられました。

【坂之上田村麻呂は戦わずに東北の者と和平を結んだがアテルイは殺された】

ヤマト政権は中部から西を仏教の恐怖の教えで支配下に治めましたが、関東以北の人々は石信仰の物部氏やイスキリのアラハバキなどの信仰をしていたために、すぐにはヤマトに従おうとはしませんでした。それで明るい性格で民衆に人気のあった坂之上田村麻呂を征夷大将軍にして交渉に当たらせましたが、争いの嫌いな田村麻呂は出来るだけ話し合いをして、争うこと無くお互いの交流を図ろうと思っていました。

そして交易を始めようと東北蝦夷の頭領であったアテルイをヤマトまで誘いましたが、田村麻呂以外の権力者たちは東北の有力者も絶対服従をさせようと、出向いたアテルイが持ってきた交易品を取り上げて彼を殺してしまいました。そして東北の者を服従させるために田村麻呂を再度東の国に行かせましたが、田村麻呂はお互い争うことを避けるために、東の国は作物も出来ないし鬼がいて人を食べるという噂を流して、ヤマトが攻めても益が無いことを伝えました。

争いを避けたということで田村麻呂はその後も慕われ神として祭られていますが、アテルイは歴史上からその名を消されてしまいました。

【菅原道真はヒミコの文字やヤマタイコクのことを知って左遷された】

菅原道真は優秀で若くして遣唐使として仏教を学びに唐へ行きましたが、僧侶たちのあまりの腐敗した実態を見て、わざわざ経費のかかる唐に行く必要はないと、遣唐使の廃止を訴え、それを中止するように強く働きかけました。そのことを仏教の指導者は快く思わず、何とか道真を失脚させようと狙っていました。

一方、道真が四国の勤めをしていた時に、そこにはヤマタイコクという大きな国がありヤマトに滅ぼされたという話を聞いて、友人の柿本人麻呂から聞いていた話とその噂が一致していたので、伝えられていたことは本当ではないかと思っていました。

ある時道真は見慣れぬ文字が書かれた紙を見つけて、それを星延べであった友人の小野小町に見せました。小町はそれこそがヤマタイコクのヒミコが作ったカタカナ文字であると知らされて、そのことを道真に伝えました。当時大陸から伝わった仏教の経典は漢字で難しく、何とか簡単な言葉を使いたいと思っていたので、そのカタカナを使おうと朝廷に提案しました。けれどもヤマタイコクを滅ぼしたことが明らかになると困ると思ったヤマトの権力者は、強引にカタカナの使用を迫る道真を失脚させようと思っていました。そして当時、神の文字としてヘビ文字があったので、それをまねして漢字を崩したひらがなを作り上げました。

道真は友人の柿本人麻呂とその恋人の小野小町と協力し合って、滅ぼされたヤマタイコク

の真実の物語を何としても後世に伝えようと思いました。そして風景や感情を歌ったように見せかけて本当の意味をそこに隠した和歌を、当時の和歌の選者に見てもらい気に入った歌をプレゼントして、それを百人一首としてまとめました。選者の名前をその歌の作者として付けることで、本当の意味を悟られないようにしたのです。そして道真は、ヤマタイコクや倭の国のこと、ヒミコが作ったカタカナを世に出すように働きかけましたが、身分制度によりせっかく楽に暮らしている天皇や貴族は、そのことで自分たちの地位が危うくなると思ったので、仏教を排除しようとしたことで道真を恨んでいた僧侶たちと結託して、大きな罪を犯した人が行くところの大罪府という意味の大宰府へ道真を左遷してしまいました。けれども優秀で特に罪も犯していない道真が急に左遷されたことは人々の噂になり、天皇や貴族たちも無視をするわけにもいかず、当時はまだ柿本人麻呂もヤマトにいたので、大宰府から送られた和歌は公開されていました。

【小野小町も星述べが出来、巫女から公家の養女になり人麻呂と出会った】

小野小町は幼い頃から星述べをしていたために、船に乗せられ由良川を下り、ヤマトの支配下にあった丹後の籠神社の巫女にさせられました。そして星述べをしていたので和歌を詠

むことが出来るようになり、公家の養女となって朝廷に仕え、そこで柿本人麻呂と出会いました。人麻呂と和歌の話をしているうちに恋仲となりましたが二人の仲は許されず、そのうち人麻呂は石見の国に左遷されてしまいました。

小野小町が作った歌の
「ハナノイロハ　ウツリニケリナ　イタズラニ　ワガミヨニフル　ナガメセシマニ」
の意味をチャネリングで小野小町に聞いていたら、
「土蜘蛛と呼ばれる（とされた）人たちは、イシカミを信じて輪を作って暮らしていましたが、邪魔をされ輪になれなくなりました。住んでいた所を追われた人たちは、蜘蛛の子を散らすようにちりじりになり、ひどい目に遭いました。家を追われた人たちは、まだ暖かくて柔らかだった山になったイシカミの身体に穴を開けて住んでいました。しかし、そこにも追っ手がやって来て、悲惨な目に遭わされました。それを見ていながら何も出来なかったイシカミの代わりに、その無念を私が詠みました」
ハは歯でイシカミをあらわしその形は平等、ナは死、ニやリはヤマトの教えなど、カタカナ一文字ずつに意味が込められている和歌です。

【柿本人麻呂と小野小町は石見の国で一緒になった】

有名な柿本人麻呂と小野小町の生没年や経歴が不詳なのは、二人は大罪人にされた道真の友人であり、ヒミコのことを知って和歌に歌ったために、ヤマト朝廷は彼らの詳細を隠してしまったのです。柿本人麻呂はイカルガ（※13）の物部氏一族の頭脳明晰な若者でしたが、ヤマトの様子を探るためにヤマトの支配下にいるように振る舞って朝廷に仕えていました。

当時道真が四国から帰ってきてヤマタイコクの話をしていることを人麻呂は知り、物部氏から聞いていたヤマタイコクやその子孫の話が本当だったことを確信し、ノアの親子の悲劇をこめた和歌を作って世に伝えようと思い、自分の名前を柿の元（本）人麻呂と変えたのです。その名前は、柿の色や形はイシカミをあらわし、柿はイシカミが与えた食物でもあるので、「柿の元」を知るとイシカミのことが分かり、それを隠れて人に「口から口へ」伝える、「（麻）呂」という意味です。

三人はヤマタイコクのことやイシカミのことを何とか世に知らせようとしましたが、天皇に直訴した菅原道真がまず大宰府に流されてしまいました。けれども人麻呂は小町と二人で

13　京都府綾部市周辺はかつてイカルガ（何鹿）と呼ばれていましたが、ヤマトに地名を奪われてしまいました。イカルガとは膝を曲げてイシカミに祈るという意味です。

くじけずに、この悲劇を語り継ぐ和歌を世に出そうと次々に歌を作りました。そのうち人磨呂にも道真と同じ嫌疑がかけられ石見に左遷されることになったので、イカルガの物部に戻り殺されて主のいない星述べの家に行き、たくさんの柿の木を植えて自分のことを伝えるようにしました。それから人磨呂は出雲に行き石見の国に住み着いて、歌だけはヤマトに送り続けていました。

一方、小野小町は左遷された恋人の柿本人麻呂を訪ねようと思いましたが、直接行くとヤマトに見つかってしまうので、あちこちを訪ね私が小野小町だと名乗って、出来るだけ足跡を残して石見に行きました。またオオクニヌシを慕っていた船乗りたちにも、小野小町があちこちに行ったと噂を流してもらい、小町が石見の国に行ったことが分からないようにしました。

小町は石見の国で人麻呂と所帯を持ち、穏やかな暮らしをして歌を作っていましたが、人麻呂はついにヤマトのものに捕らえられてしまいました。そして木に吊るされて、イシカミを信じる仲間を白状するよう気を失うまで叩かれて、その後海に投げ入れられて殺されてしまいました。小町も人麻呂が殺されるとすぐに海に身を投げて亡くなりました。そのことを哀れに思った人々は、流し雛を作って二人を慰めました。イシカミやヤマタイコクや倭の国のことを隠して伝えた彼らの有名な歌だけが残り、彼らについての詳しいことは隠されてしまったのです。

【歌舞伎はヤマタイコクの悲劇を芝居にしたのが始まり】

大国主が出雲で生まれ変わった時に、意識の世界を支配していた支配星はヒミコに邪魔をして生まれ変わらせませんでした。オオクニヌシには生まれ変わる前の記憶があったので、年を取るにつれその意識はヒミコを思う気持ちが強くなり、他の女性をそばに寄せなくなりました。オオクニヌシの深い悲しみの話を聞いた部下はなんとか慰めようと思い、自分たちが女装をして芝居をすることにし、オオクニヌシを慰めたことが歌舞伎の始まりでした。なぜ男性が女装をしたかというと、女性がそばに来るとヒミコのことを思い出し、余計に辛くなったからです。

その後、星延べをしていた「出雲の阿国」が、歌や踊りでヤマタイコクの悲劇の話を多くの人に伝えようと、都に向かって旅をしながら広めていきました。それで歌舞伎の芝居の幕開けが、イシカミをあらわす柿の名前を付けて「柿落とし」と名付けられたのです。「コケラ」と呼ばれている「柿」の漢字は、ソラからの情報では「カキ」の読み方の方が古いと伝えられています。柿と書いて木の屑「こけら」と嫌がらせで呼ばせたのは、柿がイシカミをあらわしていることを多くの人が知っていたからです。また「柿落とし」にはヤマタイコクのことを伝え「書き通す」という意味もあるのです。白狐が頭を振る芝居は、宇宙の始まりが渦巻きから始まったことをあらわしています。

【空海などの僧侶は支配星に支配されて悲惨な最期にさせられた】

空海も始めはイシカミと繋がっていましたが、途中で支配星に肉体を乗っ取られ、仏教を広めるために行動しないと永遠に地獄で焼き殺すと脅かされ、あちこちへ命じられるままに行かされました。支配星の言うことを聞けば超能力を与えるともいわれ、病気なども治すことが出来たので多くの人に慕われましたが、人気が出れば出るほど支配星は厳しい要求をしていき、最後は餓死させられたのです。即身仏のミイラになった人たちも、世の中を救う為だと皆には言っていましたが、実際には支配星に脅かされて仕方なく餓死の道を選び、ミイラにさせられたのです。山形県の湯殿山はミイラ（即身仏）で有名ですが、ここには自然に出来たとは思えないイシカミの作品の岩があります。これも支配星の言うままに聖地として封印し、一般には公開していません。支配星の部下が出羽三山のイシカミを封印するために、強力に人間を支配して次々とミイラにさせたのです。

支配星は僧侶に凶事を予言させて、その通りのことを起すことも出来たので予言は的中し、それを取り除いてはあたかもその僧侶を救世主のように思わせていました。それで人々はその僧侶のお陰で助かったと思い、人々にその僧侶を崇めさせて現在まで信じさせてきたのです。

【日蓮は外宇宙の王で、女王と共に人間を支配しようとやってきた】

現代でも多くの人から信仰されている代表が日蓮で、日蓮は外宇宙の王の意識の持ち主でした。外宇宙の王はこの宇宙が面白そうなので自分が支配者になろうと思い、支配星と協力することにしました。そして僧侶となって支配星が計画をしたあらゆる凶事を予言し、それをあたかも避けることが出来ると人々に思わせて崇めさせてきました。

蒙古襲来の時に暴風雨があり、その時に敵を退散させたのはイシカミであって、そのことをチャネリングで支配星から聞いた日蓮は、あたかも自分が予言して敵を退散させたかのように言って権力を得ていたのです。外宇宙の王は意識の世界を強力な力で押さえ込み、日蓮を信じるものを意識の世界で助けるようにしたために、現世でも望みがかなえられてきました。しかし外宇宙の王の意識がいなくなった今では、日蓮を信じて亡くなった意識は、意識の世界で他の意識たちから今も責められています。

また外宇宙の女王は現実の世界では観音の姿をしていますが、後ろを振り向くと意識の世界になり、観音は般若の恐ろしい顔になって意識の世界を恐怖で支配していました。そしてその観音を信じていた人が亡くなると、亡くなった人にもっと人を連れて来いと命令をしていました。

【ジンギス・カーンはイシカミの山がなくても支配星は力があると思わせた】

蒙古の国モンゴルにはほとんど山がありません。モンゴルから出たジンギス・カーンが、なぜ他国を征服し巨大な国を作ることが出来たかというと、イシカミの亡骸である山が無くても、支配星は力を与えることが出来ると知らせたのです。

ジンギス・カーンはなぜあのように大きな国を支配することが出来たかというと、敵を占領したときには戦利品を部下に配分し、グループ同士で監視と協力をさせることでうまく団結させたからでした。

またジンギス・カーンは、竜神に支配された中国が日本を支配しようとしていると、使節を送り警告をしただけでした。けれどもヤマトの権力者は、中国から朝鮮を渡ってきた仏教と手を組み、使節団が来ただけなのにそれを殺して、蒙古が攻めてくると人々に危機感をあおらせました。そしてそれに便乗して人々から強制的に年貢を徴収し、日蓮が台風を呼び寄せて蒙古の大軍を退散させたと嘘を広めて人々を騙し、さらに仏教を広めていったのです。

【義経と静御前は星述べだった】

義経は星延べの子供だったのでヤマトから睨まれ、義経が村にいるだけで税を多く取られるので、村の人に嫌がられて鞍馬寺に預けられました。義経はそこで金星に支配されて、より多くの力を得ました。そして義経が倭の国の流れを汲むので、朝鮮から来たヤマトの権力者が何とか自分の地位を高めようとして義経を養子にしました。そして義経が星延べで知らされた源（※１４）の苗字を付けました。倭の国の流れを汲む源氏は天皇家から分かれたと嘘を流して、天皇家が昔から続く名門であると思わせたのです。

静御前も星延べだったので、大国主の８人の部下の悲劇を知っており、氏神である八幡神を八幡大菩薩とは言わずに八幡様とだけ言っていました。僧侶たちからそのことを咎められましたが、大菩薩とは言いたくないと言ったのと、ブッタよりイスキリが良いと言っていたので激しく責められ吉野で殺されました。

義経も静御前をかばったので、義理の弟の人気があるのをねたんでいた頼朝が、僧侶たちと一緒に義経の命を狙うようになったのです。

１４　源のサンズイはオリオンの三つ星をあらわし、星原の意味をそこに隠しました。

【アイヌの神様オキクルミカムイは義経だった】

義経は自分が狙われていることが分かったので、放火をして敵の目をそらして、そのドサクサに紛れて、イシカミに導かれて北海道に逃げることが出来ました。義経は北海道までたどり着く間に火傷や寒さのために凍傷になっていましたが、立派な鎧を着けた義経をアイヌの人々は伝説で伝えられた神様（※15）と思い、オキ・クルミ・カルイと名付けて大切にもてなしました。その意味は、義経が「沖」から来て「クルミ」をもらって食べ、身が「軽かった」ので、オキ・クルミ・カルイとそのように呼んだのです。

義経はアイヌの人々に大切にもてなされていましたが、追手が来るのを恐れ遠くへ行くと伝えて次々と移動して行き（※16）、アイヌの人々に見守られて安らかに最期を迎えましたが、そのことは公にはされませんでした。追っ手をだますために人々に大陸へ渡ったと言っておいたので、チンギス・ハーンは義経であるという伝説が生まれたのです。

15　アイヌの人がオキクルミカムイと呼ぶ神様は生活文化の知恵を授けた神様で、人間世界に降りる際に試練を受けて火傷や凍傷になった神話があります。

16　東北・北海道には義経にまつわる伝説が多くあります。

【明智光秀は自分が犠牲になり残酷な信長を討ち果たした】

支配星にエネルギーをもらった織田信長は、周りの者を次々と自分の支配下にしていきましたが、その残虐ぶりはますますひどくなっていき、常人の考えではない非道なことを命令していったのです。温厚な明智光秀はそれが耐えられなく、豊臣秀吉にいつか自分が残虐な信長の行動を止めると話していました。そしてその後は秀吉が天下を取れば良い、自分は隠居してのんびりと過ごすと話していましたが、そのうちに光秀にも秀吉の戦いに参加するようにと信長が命令しました。光秀は仕方がないので戦地に向かいましたが、出発した途端に光秀の妻を信長が強引に誘惑していると伝令が入りました。部下に相談すると、部下も信長の狂人ぶりを知っていたので信長打倒に同意し、直ちに本能寺に引返して光秀の妻を連れて来ていた信長を討ち果たしました。その後秀吉の戦に形だけの参戦をして、光秀は亀山で静かに余生を過ごしました。

けれども秀吉はいつまでたっても光秀との約束を果たさず、光秀に逆賊の汚名を着せたままであったので、光秀の弟子であった千利休が、光秀の汚名を晴らして欲しいと秀吉に密かに頼みましたが、自分勝手な秀吉は利休をそれだけの理由で切腹させたのです。その訳を知っていた家康は、秀吉が亡くなってから秀吉一族を滅ぼしたのです。

【浅野家と吉良家は仲間同士であったが天皇の策略にはまった】

射手座の意識を持った大石クラノスケを始め浅野家の人たちたちは、瀬戸内海に面した明石の土地で、ヤマタイコクや倭の国のことを伝え聞いて知っていました。近くの生石神社の巨石は人間ではないイシカミの巨人が作ったことを知っており、その巨石を作った巨人が製塩を教えてくれたことも知っていました。そして昔に赤穂の一部の人たちが吉良に渡って製塩を始めたということも聞いていたので、吉良家の人たちといつも製塩のことなどを話していました。

ある時イシカミや巨石のことなどを話していたのを他の人に聞かれ、そのことが天皇の耳に入りました。それで天皇を始め公家などはイシカミの話が広まると困ると思い、何とか両家を潰そうと思いました。それでまず吉良氏に、浅野氏が吉良氏の悪口を言っていたと嘘を言って吉良氏を怒らせたのです。それから吉良氏がその悪口を真に受けて、浅野氏に何かと意地悪をしたために、浅野氏は堪忍袋の緒が切れて松の廊下の事件が起こり、浅野氏は無念の死を遂げたのです。

クラノスケは何とか主君の仇を討とうと思いましたが、家来にこれ以上の苦労をかけたくないと、ひそかに自分一人で仇を討ちに行こうとしました。けれども息子に見つかって一人では仇は討てないと諭され、同じ思いの家来たちが集まり四十七人で仇を討ったのです。

第10章　明治維新

【明治維新の真相も隠されていた】

徳川幕府は長い間鎖国をして国民の差別を徹底して行い、その富を集めて栄華を極めた暮らしをしてきましたが、ペリーの来日によりその現実を変えさせられました。日本は幕府を存続させようとする幕府方と、天皇を中心とした尊王攘夷派に別れて国民同士が戦いました。尊王攘夷派の長州藩は、体格が小さくて弱そうな天皇では外人との交渉に不利と考えて、京の町を焼き払って当時の天皇を亡き者にし、外見の立派な天皇を自分たちで立てようとしました。京の町を焼き払われては困ると商人達が反対し、お金を出し合って警備役を雇ったのが新撰組でした。

【近藤勇は板橋で処刑されずに西郷隆盛の部下になっていた】

近藤勇は新撰組の代表でしたが、尊王派の人たちを殺しては夢でうなされるくらいでした。西郷隆盛と出会って人殺しの毎日であった暮らしを諭され、新撰組を密かに逃げ出し江戸の西郷の家で手伝いをしていました。けれども西南戦争で西郷が敗れてその家を取り上げられ

る時に、近藤勇もそこで死にました。板橋で処刑されたのは近藤とよく似た人物で、旗を持っていたために間違えられた人でした。

【土方歳三は明治天皇になった大室寅之助の知り合いだったが反発した】

土方歳三は新撰組にいましたが、土方には幕府を維持するという考えはなく、日本に不利な条件で急いで開国をさせようとしたアメリカの言う通りではなく、日本に有利な交渉をするためにフランスの指導を受けようと思っていました。ところが一緒に剣道をした仲間の大室寅之助を明治天皇にすることが分かって、その人を現人神と思うように言われたことに反発して明治政府に反対したのです。土方は明治政府の天皇絶対君主制に反対し、国民の平等をうたう共和制の新政府を函館で作ろうとしました。最初は西郷も土方の仲間でしたが、フランス人が函館で新政府を立てる計画をしたために、西郷が鹿児島から函館は遠いと反対して離れていき、新政府側に回ったために仲間が少なくなり新政府に破れました。

【坂本竜馬は伊藤博文にだまされてテロリストになった】

坂本竜馬は新しい日本を作ろうと思っていましたが、伊藤博文から開国が遅れているのは天皇の身体が小さく、外国に対して交渉が不利になっているからだとそそのかされて、天皇を暗殺したのです。その後新政府が出来て竜馬も役をもらおうとしましたが、暗殺したことが世に知られるのを心配した新政府は、竜馬を反対に暗殺して天皇暗殺を闇に葬りさったのです。

【大室寅之助は暗殺された天皇の身代わりで明治天皇になった】

大室寅之助は長州の人で、立派な体格で武道に優れていました。ただそれだけで暗殺された天皇の身代わりで明治天皇に祭り上げられ、国民に明治天皇が神の化身であると思わせるように仕向けられました。そして伊藤博文など長州の操り人形のようにされて、長州に有利な発言をさせて薩摩の反発をかったのです。国民を羊のように従順にするには、一人の者を徹底的に立派な人物と思わせ、神のように崇めさせるように噂を流す事が重要だと明治政府

は知っていて、大室寅之助を利用したのです。（※1）

【西郷隆盛は中国からの侵入に備えて軍備を強化した愛国者だった】

西郷隆盛は江戸に出た時に大石クラノスケのことを聞き、イシカミのことを知りました。そして郷里の鹿児島では、貧しいのに仏事にお金をかけ過ぎているのでその風習を止めさせようと思って、廃仏毀釈を取り入れるように言いました。明治政府の長州の人たちは廃仏毀釈を取り入れる代わりに、長州の大室寅之助を明治天皇の身代わりにさせろと押し付けてきたのです。また西郷は階級制ではなく共和制を推進しようとしましたが、共和制を指導しようとしたフランスは函館に首都を置こうとしたので、仕方なく君主制を推進する長州と組したのです。

薩摩の助けで長州主導の明治維新が成功しましたが、“意味の分からない言葉（薩摩の方

1　明治天皇については色々な説が巷に流れていますが、筆者はチャネリングで知らされるまでそのことを全く知りませんでした。

言）をしゃべる者は国民に説明が出来ない“と長州の人に言われ、薩摩の人たちを政府に採用することが少なかったことで、その不満が薩摩の若者の間に広まったのです。西郷も始めは大臣になりましたが、偽の天皇を重視しないので長州の人に煙たがられ、言葉の意味がわからないと軽んじられて、次第に政府の役が嫌になったのです。

その頃中国は西洋の半植民地になっていたので、西郷は次に日本が狙われてまず九州が攻められるのでないかと心配していました。それで新政府で働くよりも九州をしっかり守ろうと思い、大臣をやめ鹿児島の兵学校で若者を育てようと思ったのです。それを長州の人たちは反旗を翻されるのでないかと疑い、天皇の名の元に薩摩を攻めたのでした。西郷は国のために若者を指導していたのに、なぜかつての仲間が攻撃してくるのがわからないまま逆賊として殺されたのでした。

【伊勢神宮と皇室のつながりは巫女の言葉であった】

明治以降の年号は伊勢神宮の巫女のチャネリングで決められたと知らされました。

- 明治＝メイジ＝目（メ）で見えること（見た目が良い＝恰幅の良い身代わり天皇）を（神として）祈（イ）らせる時（ジ）代
- 大正＝（明治天皇と）対象的（タイショウ）でひ弱な天皇であったからです
- 昭和＝ショウワ＝小さな輪＝大東亜共栄圏（※２）をあらわします
- 平成＝ソラからの情報を聞いても平静（ヘイセイ）でいるように

ソラからの情報では、太平洋戦争へのきっかけは伊勢神宮の巫女の言葉を神の言葉として聞いた女性の皇族達の昭和天皇への働きかけや、神の国なので負けないと信じて終戦をなかなか受け入れなかったことも大きく関与していたと伝えられています。その結果昭和天皇は意識の世界で責められ続けているのです。

また天皇家の墓だからと全国多くの古墳の発掘を宮内庁が拒んでいるのは、いまでも人間を神と崇めさせているのと同じことです。偽りの神話に基づく歴史ではなく、真の歴史を知

２　第二次大戦中に日本が唱えた、アジア諸国が独立し日本が中心となって栄えるというスローガンです。

る権利が国民にはあるのです。

以下はチャネリングで知らされたことです。

「神と名乗るもの（の声）とつながる者（＝巫女）が、石を封じることが出来るので大切にされました。それで年号も西暦だけでなく、巫女の伝える言葉を年号に使ったのです。そして日本の兵隊は伊勢の巫女の言葉で行動するようになりました」

「フミの書かれた紙が皇室に届けられたのはなぜかというと、地球の神秘の玉（真珠）が生まれる地域（＝伊勢）で、神の声を聞く人がいるからでした」

これは天皇家の次に大きな力を持つ藤原氏の流れを汲む人が、如何にすれば力を得ることが出来るかと思っていたところ伊勢神宮とつながって、手紙を天皇家に送ったことのようです。

「フミの書かれた紙の入っている中に真珠が入っていました。石の神を祭らないようにと、死後のモノが伝えてきたからです。白いもの（＝稲妻＝ホシノミナ）に負けないために、白いモノ（＝真珠）を身につけると良いと神の声がしたのです」

それから天皇家と伊勢神宮のつながりが強くなっていきました。

付録

「ソラからの伝言」のインターネットのホームページ（http://sora.ishikami.jp）には、ソラのものやイシカミたちから知らされるさまざまな物語を載せています。その中で、この本の内容と関係の深い【ソラのイスラム物語】、その続編の【ソラのイエス物語】、太古のユダヤ民族とパレスチナ民族の隠された歴史が分かる【友達物語】を紹介します。

【ソラのイスラム物語】

これはソラのものから知らされた、すなわちチャネリングで知らされたお話です。歴史学的にはマホメット（ＡＤ６００年頃）とイエス（ＡＤ３０年頃）では年代が違いますが、ソラのものから知らされた情報では、「人間には生まれ変わりがあり、このマホメットはイスラム教を起こした有名なマホメットでなく、イスラム教を起こした有名なマホメットは、この物語に出てくるマホメットの子供ムハメットの生まれ変わりである」と伝えられます。

宇宙のたくさんの星たちにはいろいろな思いがあり、その星たちの不満の塊を集めて回って生まれた地球は、その怒りのエネルギーのために真っ赤に煮えたぎった星でした。その地球を宇宙の希望の星にしようと、射手座からイシカミという意識体がクラゲのように柔らかな身体になって降りてきました。山のように大きなイシカミは、クラゲと同じように分身を作ることが出来、いろいろな形の巨人や人間と同じような形の身体を創りました。人間の形をしたものはイシジンと呼ばれました。山や岩になったイシカミと同じ成分のイシジンは、他の動物のように子孫を残すことが出来ないので、イシカミやイシジンたちが死んで山や岩になっても自分たちのことを語り伝えることが出来るものを創ろうと思い、名のない星たちと一緒に人間を創り出すことになりました。海に降りたイシカミの原子は、動くものになってあらゆる生物の元になりましたが、そのうちの一部の原子たちは人間の形になろうと思いました。それで親であるイシカミにエネルギーをもらい、イシジンが作ったストーンサークルや石室の中で人間の形になり、最初の人間が誕生しました。

イシジンは創り出した人間を助けて平和な生活をしていていました。そのイシジンの仲間には進化したイシカミの巨人である、アトランティス人と呼ばれた者たちもいました。大きな力のある支配星は、イシジンたちや人間が地球上で面白そうな生活をしているのを見て、自分たちがイシジンの代わりになって人間を支配しようと思いました。それで支配星は、強力な宇宙エネルギーで邪魔なイシカミやイシジンたちを石にしてしまいましたが、岩にされ

たイシカミやイシジンたちの無念の思いは、地球上で現在も“意識”として残っています。

イシカミは身体の一部は増殖して、人間の形をしたイシジンがイシカミの身体から分かれて出て行きましたが、その時の足跡が残っているひとつが、エルサレムにある岩のドームの中にある岩です。その岩になったイシカミは、人間に何とかイシカミのことを知らせたいと強く思っていて、そばに来た人間に一生懸命呼び掛けていました。呼び掛けられた人間は、姿が見えないのに声が聞こえるので、自分は神と会話出来るようになったと思い驕り高ぶるようになり、より強い支配星がその人に乗り移って神（支配星）の代理として、その人間を崇めさせるようにしました。そして支配星は人間の恐怖の思いをエネルギー源にして、人間を操り人形のように支配していたので、イシジンたちの意識は何とかして肉体を持ち、人間に生まれ変わって支配星の呪縛を解こうと思っていました。

アトランティス人の中にミネルバとムネルバという仲の良い双子がいました。アトランティスの崩壊後、時が経ちその双子は、一人はイエス、もう一人はマホメットという人間に生まれ変わりました。そして生まれ変わった意識はお互いを探し求めていました。二人の少年は偶然に出会うことになりましたが、二人とも過去世のことは忘れていました。しかし二人の手のひらに同じような傷があるのを見つけ、二人には何か大きなつながりがあると確信を持ちました。二人とも立派に成長しましたが、イエスは支配星に支配されて思わぬことを強制させられたことで、命を狙われるようになりました。そのためイエスは遠くに逃げようと

して、国を治めるまでになっていたマホメットに助けを求め、マホメットは切羽詰ったイエスの頼みを断れずに貴重な船を譲りました。それでイエスは無事脱出することが出来ましたが、大切な舟を譲ったことを快く思わないマホメットの部下だった悪者が、穏やかで人望のあるマホメットを何とか失脚させようと考えました。

マホメットが治めるまでその国は、人間を支配している支配星が教えた『目をやられたら目をやり返せ』『歯をやられたら歯をやり返せ』と恐ろしい復讐の法律を持っていましたが、マホメットはそれを次のように変えました。

『目には目を』は〈見てうれしい物をもらったら、見てうれしい物を返ししなさい〉。

『歯には歯を』は〈食べてうれしい物をもらったら、食べてうれしい物をお返ししなさい〉

それは“地球が与えてくれる物を独り占めしてはいけない”ということを教えていたのです。それでマホメットが治めていた頃は、そこは戦争のない平和な国でした。

けれども悪者は自分が権力の座につきたいと狙っていたので、マホメットがイエスに船をあげたことを口実に、自分の部下に秘密裏にマホメットを殺させたのです。そしてマホメットの財産を自分の物にして権力者となり、マホメットの息子のムハメットを育てました。悪者は自分がマホメットを殺したということをムハメットに気付かれるのを恐れて、ムハメットの命を絶とうと絶えず画策していたので、ムハメットは回りの人から愛情を受けることなく育ちました。そして支配星に支配された悪者は、自分に逆らう者に容赦しなかったために、

また元の恐ろしい復讐をする法律に変えてしまったのです。つまり復讐をすることが正しいことであるとムハメットは教えられ、また悪者はムハメットに父親を殺したのはキリスト教徒だと嘘を教えていました。

ムハメットは絶えず命を狙われる不安があったために、人を信じることができないまま生長し、父親の跡を継ぎました。そしてたった一人の妹だけを愛していましたが、その妹も誰かに命を狙われるのではないかと心配していました。それで権力者となったムハメットは、妹が外に出る時に顔を分からないようにさせるため、女性は誰でも必ず布で顔を隠すようにと命令をしたのです。それでもムハメットは心が落ち着かなく、何とか強くなろうと平野で修行をしていました。修行をしていたある時、ムハメットには声が聞こえたのです。「黒い水（石油やコールタール）が出る所を教えてやろう。けれどもその黒い水が出ると、お前の命を狙う者が出てくる。それは妹と一緒になった者が命を狙うことになる」と、未来の見える支配星は言いました。その声を神の声だと信じたムハメットは、その声の言う通りにしなければならないと思っていました。そのうち妹に好きな人が出来て、一緒になりたいと言ってきたその相手はムハメットの信頼する部下でしたが、ムハメットは神と名乗る声が言ったことが気になり、悩んだ末に妹の目を刺して部下も殺してしまいました。その後ムハメットは支配星の言うままに他国を征服していき、大きな国を作ることが出来ましたが、最後まで妹や部下のことを後悔していました。

ムハメットを支配して思う通りのことをさせた支配星は、ムハメットが弱ってくるとその身体から去っていきました。そして、ようやくムハメットの身体を創っていたイシジンの意識は、肉体を持った目的を達成することが出来ました。その目的とは、イシカミが地球を固めて人間を創り、人間を助けてきたことを人間に知らせることでした。それで自分が死んだ時には、地球に突入して固められて岩になったイシカミの身体の上に置いて欲しいと頼んでいました。その岩がイスラムの人たちが大切にしている岩のドームの中にある岩で、イシカミがクラゲの形をして降りてきたので半円の形をしており、その岩にはイシジンの足跡も残っているのです。

ムハメットはますます強い王様となり、厳しい掟を作りました。

- ご馳走を食べ過ぎるのでたまにはお腹を休めるようにという声を聞いて、国民にも同じようにするように言いました（断食）
- ムハメットは頭の上から声が聞こえるので、他の人がその声を聞こえないように頭に布を巻くように言いました
- 太陽と地球に感謝をするようにお辞儀をさせました
- 豚は悪いドラゴンが変化したものだと声が言ったため、豚を食べることを禁止しました

このように厳しい掟を作りましたが、仲間を大切にすることなどの良いことも決めました。白い服を着るのは宇宙の始まりが白い光であったのと、ホシノミナ＝稲妻の白い光をあらわ

しています。メッカで柱の周りを回るのは、宇宙の始まりが渦巻きだったことをあらわしていますが、それはメッカに行かなくても、渦巻きの意味を知るだけで思いは宇宙に通じています。床に座ることは、地球を覆ってくれたイシカミの身体に触れようとするためで、頭を下げることも食べ物を与えてくれたことに対して感謝をあらわしているのです。

このようにイスラムの本当教えは、自然に感謝することや仲間を大切にするという、とても良い教えなのです。イスラム社会で争いが絶えないのは、昔の教えが長い年月の間に、少し間違って伝えられたためです。偶像を崇めてはいけないという良い教えがあるのに、宗教指導者を崇めているからです。意識の世界にいるマホメットは、このことがとても悲しいと伝えて欲しいと言ってきました。宗教指導者が支配星に支配されると、ひたすらネバならぬと強制し今のような悲劇が起きるのであって、原点に立ち返れば何ら問題は無いのです。

【ソラのイエス物語】

アトランティス時代の双子の一人ミネルバは大きくなって、アトランティスの女王と一緒になり子供も出来て幸せに暮らしました。その後何千年も経って、ミネルバはエルサレムでイエスとして生まれ変わりました。

イエスが人間として生まれ変わることを知った支配星は、イエスを支配して意地悪をしようと計画を立て、その意識の固まりは大きな彗星として地球に降りてきました。その彗星には支配星の仲間であった、北極星、ヘビ使い座、ヘビ座の意識の塊が乗ってきて、それぞれの化身が「マタイによる福音書」にある東方の三博士となり、イエスの誕生日にあらわれてイエスをしっかりと捕まえ支配していきました。

また、当時のローマを治めていたネロは、暴君で幼児を惨殺したと伝えられていますが、実際のネロは皇帝ではなくイシカミを信じてローマの人々を平等に治めて、孤児など手厚く保護し、民衆に信望のあった人でした。けれども支配星に支配された後年の権力者たちは、人々がイシカミを信じるのを止めさせるために、幼児殺しの暴君ネロという噂をまことしやかに流して、今日まで人々に信じさせてイシカミを封印してきました。

ローマから離れた中東地域は、男性が権力を持ち女性は子供を生む使用人のように軽んじられる社会でした。そして大柄なイエスの父ヨセフも他の男性と同じで、子供のような小さな身体のマリアを奴隷のように扱い、その身体を自由にしていました。そのうちマリアはお腹が大きくなるのに気が付きましたが、自分が妊娠しているとは知りませんでした。他の人たちも、まさか子供のような身体のマリアが妊娠しているとは思ってもいないのに、突然マリアから子供が生まれたので驚きました。そこへ東方の三博士が訪れ、イエスは神の子供だと言って宝石をたくさん持ってきたので、マリアが本当に処女のまま子供を生んだと周りの

人は思ってしまいました。

イエスは何時も見えない何者かの言葉を聞いている子供で、いつも「イエス（はい）」と返事をしていたので、イエスと名付けられました。イエスが聞いていた声は、支配星の部下であったイス座の星座の意識からのもので、その声に言われるままインド人の商人の手伝いとして、インドに行かせてより強く支配し、支配星はイエスが成長するのを待っていました。そしてその道中の国を治めている人の息子マホメットと知り合い、お互い手の平に同じ傷があるのに気付き、二人ともやさしい性格でお互いが似ていると思い、イエスが何度かインドに行くうちに友情をはぐくむようになりました。

生長したイエスは父親の元で石大工として働くようになりましたが、父親は大酒飲みで小さな母親のマリアに暴力を振るうので悩んでいました。母親思いのイエスは、母親が暴力を振るわれるのを見るに忍びなく、ある夜外に出て夜空の流星群を見ていました。すると突然、それまで聞こえていた声よりもはるかに大きくはっきりと、威厳のある声が暗闇から聞こえてきて、その声は自分を神と名乗り病気を治す力をイエスに授けるから、これからはこの声に従うようにと言ってきたのです。その声は支配星であるプレアデナイの意識からのものでした。次の日からイエスは手を当てるだけで、本当に病気を治すことが出来るようになり、その力は日増しに強くなっていき、その噂を聞いた人々は次々とイエスの元にやって来て、病気を治してもらうようになりました。またマリアもやさしく、親に捨てられた子供を育て

ていましたが、ある時金持ちの子供らしい子供が泣きながらイエスの弟子に連れられて来ました。けれども言葉が分からない異国の子供で、名前を聞いても答えないので、みんなはバー・ソロ・ミューと呼びました。すなわち“異国の、一人の、ちいさき者”と言う意味です。バー・ソロ・ミューはイタリア商人の子供のようで、親とはぐれてしまったようでした。初めは泣いていたバー・ソロ・ミューも、やさしいマリアや同じ様な子供がいるのですぐに慣れていき、イエスに特に可愛がられて一緒に行動をしていました。そしてやさしいイエスは、イタリアにまでバー・ソロ・ミューの親を探しに行きましたが、どうしても親は見付かりませんでした。バー・ソロ・ミューは腕白でしたが、賢かったためにイエスの弟子となり、イエスがいろいろな病人を治していくのを見て、その手伝いをしていました。

　他の大人たちもイエスの弟子にして欲しいとやって来たので、次第に集団で生活をするようになりました。けれども集団生活をしているうちに、いろいろな問題も起きてきたのでイエスは規則を作りました。その規則が厳しいと弟子は文句を言っていましたが、ユダだけはいつもイエスの言うことをよく聞いてイエスを助けていました。またイエスにいろいろな問題が起きた時には、ユダが一番の相談相手になり、イエスはユダを最も信頼していました。

　マリアの元で育てられた孤児のエマは、美しいけれどふしだらな娘で売春婦になってしまいました。エマはイエスを誘惑しましたが、イエスはエマの行状を知っていたのと、マナミという手伝いをする女性と深い仲になっていたので、エマの愛の告白を受け入れませんでし

た。嫉妬にかられたエマは、他人の子供を宿していたのをイエスの子供だと嘘の噂を売春の相手に広めていきました。その噂に困ったマリアは、当時は信者からたくさんのお金をもらっていたので、手切れ金をエマに渡してイエスの元から遠ざけました。

一方支配星は、神と名乗る声でイエスを支配していましたが、次第に厳しいことを言うようになりイエスはとても悩んでいました。神と名乗る声は、ローマの支配から立ち上がって反乱を起すようにと言い、しばらくすると今度はイエスに「ユダヤの王様になると言え」と言い、言うとおりにしないと地獄へ落ちると脅かし、更に「ローマに戦いを挑み独立しよう」と、皆の前で言わせました。イエスが戦争をけしかけているのを知ったマリアは、イエスが裁判にかけられて殺されるのでないかと思い、当時のエルサレムを支配していたローマの総督ピラトに、イエスの命を助けて欲しいと宝石などをたくさん渡して頼みました。けれども宝石が無くなったことを知った大男の夫ヨセフは、マリアのわき腹を蹴って殺してしまいました。

イエスが皆にローマの支配から独立するために戦争をしようと触れ回っているので、戦争になると困ると思った人たちはピラトに相談し、イエスを裁判にかけるようにと頼みました。ピラトは自分の娘ニアスから、イエスはとてもやさしく、病人を治しているだけと聞いていたのと、マリアからたくさんの宝石が届きイエスを無実にして欲しいと頼まれていたので、困ったピラトは自分で判決を出さないで人々に決めさせました。それで、人々は平和に暮ら

しているのに戦争をするのが嫌なので、イエスが王となってローマと戦争をするということに反対をして、イエスを磔にするようにピラトに頼みました。ピラトは人々の言うままにイエスを磔にするようにしましたが、磔に立ち会った兵士にはイエスを殺さないように言っておいたので、兵士はイエスのわき腹を槍でちょっと突付いただけでした。けれどもイエスは磔の苦痛と恐怖で気を失い、それを見て皆はイエスが亡くなったと思い帰っていきました。

夜になりイエスの弟とユダはイエスの身体を十字架から降ろす時に、イエスが生きているのに気付きびっくりしましたが、死んだ振りをさせてお墓まで運びました。お墓にいた皆が帰ってから弟とユダだけが残り、イエスの体力が回復するのを待って闇に隠れてマナミの家にイエスを連れて行きました。マナミはマリアのお手伝いをしていた女性で、イエスが好きになりイエスとの間に女の子が生まれましたが、イエスが弟子に女性と一緒になることを禁止していたのに子供が出来たと分かると困るので、マリアはマナミにそのことは隠させました。マナミは仕方なく一人故郷のガリラヤ湖そばの家に帰り、イエスの金銭的援助の元に子供を産んで育てていました。ユダ達はそのマナミの家でイエスを匿うことにし、マナミが懸命に看病したお陰でイエスは元気になることができました。

一方イエスの遺体が無いのでイエスが逃げたことが分かり、同じ仲間と思われた弟子達は殺されました。マナミも命を狙われたので、当時イタリアのコロッセオには神がいると言われていたので、そこに逃げ込みました。けれどもコロッセオでは、支配星に支配された者が

中でライオンを飼っていたので、そのライオンに襲われてマナミは死んでしまいました。マナミの子供は強欲な夫婦に引き取られて、こき使われた後にポーランドの農家に売られて行きました。その後、支配星は人々を支配するために、人間の想像の付かない強力なエネルギーでイエスの幻影などを見せ、あたかもイエスが天に昇った神の子供であると思わせて、いろいろな奇跡を起こして多くの人々を信じさせてきました。

イエスが元気になると、イエスと弟とユダはいつまでも逃げ切れないと思い、相談して日本に行くことにしました。イエスは亡くなったマリアの霊から、本当の神様は日本にいるので東の果ての日本に行くようにと聞いていたのです。また、イエスたちが日本に行こうと思ったのは、次のこともあったからです。つまりイエスはいろいろな見えない存在の言葉を聞いていましたが、その中には亡き母親、イス座のものの声、かすかなイシカミの声、それ以上に命令的な強い支配星の声などがありました。命令的な強い声が戦争をするようにと言わせたので、イエスは強い声が聞こえないようにするには茨の冠をかぶると良いと教えられたのでその通りにしました。何故なら支配星はヘビに関連する星だったので、茨の冠をかぶることでヘビの言葉を頭に侵入させることが防げたのです。それから強い声は聞こえなくなり、かすかなイシカミの声と亡き母親の声だけが聞こえるようになり、伝えてくることが真実のことであると思ったためです。

それでイエスとその弟、ユダ、船頭と、まだ少年だったバー・ソロ・ミューなどが密かに

エルサレムを脱出しました。そして以前に仲が良かったマホメットの所に行き、追われているので船を譲って欲しいと頼んだので、心やさしいマホメットはイエスの困っている様子を見て船を譲ってあげました。彼らはまずインドに渡りましたが、航海が耐え切れないユダはインドで下船し、イエスの知り合いだった人の所に身を寄せました。

イエスは茨の冠を付けた時点で支配星の支配から離れたので、名前をイスキリに変えてイシカミの声だけを聞くようにして、その声に導かれて日本の東北の十三湊に到着しました。十三湊の人たちは初めて見る外人の風貌に驚きましたが、同じイシカミを信じていたのですぐに打ち解け、イスキリは病人の対応に慣れていたので地元の人は大切にもてなしました。その後、弟と船頭は東北に残りその土地の人と結婚しましたが、イスキリとバー・ソロ・ミューは人々に請われるままに、またイシカミの声に呼ばれてあちこち立ち寄りながら南下していきました。今の茨城辺りの人はイシカミを信じていたのでイスキリと話しがよく合い、支配星の声を断つには茨の冠をかぶったと話したことから、茨のことなどイスキリの体験をキロクしたという意味から、地名をイバラキと名付けました。イスキリたちは病人を診たり石切りを教えたりしながら移動していきましたが、そのイスキリを慕って人々は“アラハバキ〟を祭るようになりました。“アラハバキ〟とは、アラー＝太陽に感謝すること、ハバク＝ほうき星に乗って悪い意識がやって来るので注意をするように、ということを教えていたからです。

イスキリたちはさらに南下して大阪に着きましたが、噂でこの近くにホシノミナがいると聞いたので、そこで（大阪の十三で）落ち着くことにしました。十三＝ジュウソウと呼ばせたのは「ジュー＝ユダヤ人、ソウ＝思う」という意味もありますが、イエスの大人の弟子が１２人であったのと、バー・ソロ・ミューも大きくなっていたので、それに一人を加えた数字で１３人になったからです。イスキリはそこでも病人を治したり、石切りを教えたり、イシカミの教えを広めていましたが、大昔ノアの洪水の時にユダヤ人の親子が日本に流れ着いて、その生まれ変わりの子孫がいるという噂を聞きました。それでその親子の生まれ変わりの子孫を探し出して養子として迎え、ユダヤのいろいろなことや争いがいけないことなどを教えました。そしてイスキリはバー・ソロ・ミューやその養子に看取ってもらい、晩年には生駒山の麓の石切に移り住み、自分が死んだら生駒山のイシカミのそばに葬って欲しいと遺言をしていたので、亡くなった後その希望は叶えられました。また１３人の弟子がいたことを伝えるために、お墓の横に十三重の石塔も作って欲しいと、イスキリは意識として後年の人に降りて作ってもらいました。イエスの本当のお墓は生駒山にあり、その横にバー・ソロ・ミューのお墓もあります。青森にあるイエスのお墓と言われているものは、イエスの弟と船頭のお墓で、その地で結婚して子孫もいたので、東北地方には白人のＤＮＡを持った人がいるのです。また東北地方にはヘブライ語が由来と思われる歌や風習が残されています。

イスキリの養子はイスキリからいろいろなことを教えられ、立派な大人になり皆に信頼さ

れて、初めて選挙の形で天皇に選ばれました。それが仁徳天皇で、イシカミを大切にして国民を治めたために、亡くなった後もイシカミの巨人の亡骸である前方後円墳に手厚く葬られました。ギリシャ文字の最後の文字Ωはこの形を真似て作られましたが、イシカミの形でもあるのです。

クリスマス・ツリーの先端には大きな星が飾られて、その下にいろいろな星が飾られますが、それは先端の星を支配星と見立てて、その下のいろいろな他の惑星を支配したということをあらわしています。またイタリアでは、「東方の三博士」がキリスト誕生を祝ってベツレヘムを訪れる際に、誘われながら多忙を理由に断り、その後ほうきに乗って空を飛びイエスを探す老婆ベファーナの話が伝わっており、この老婆がイエスを支配した支配星のプレアデナイの女王なのです。このように現在でも、支配星の呪縛から多くの人が逃れることが出来ないでいます。



生駒山の十三重の石塔

【友達物語】

昔々大昔、世界の文化は今の私たちが想像しているより、もっと進んでいました。しかし当時の人々は、生活の様子を文字にする手段を持ちませんでした。それで、これまで我々が出来たのは、科学者の調査に基づく想像のみでした。

その文化の発達したイスラエルの国の人たちは仲良く暮らしていました。けれども、その人たちの中でもいろいろな性格の人たちがいて、毎日平凡に暮らすのが好きな人と、もっと国から外に出て貿易をしてみたいと思う人に分かれました。国の外に出てみたいと思う人たちをユー族といいました。ユー、すなわちあなたとお付き合いしたいという積極的な人たちでした。一方その土地で今までと同じように暮らしていたいと思う人たちは、そのままその土地に残りました。ユー族の人たちは大きな船を作り、貿易のために海外に出かけていきました。当時エジプト地方にはもっと多く雨が降り、多くの動植物が穏やかに育っていました。ナイル川には船が都市の近くまで出入り出来るような大きな支流がありました。ユー族の人たちはその支流をさかのぼって行き、そこで仕事をしようと思いました。しかし、その頃のエジプトは悪い王様が治めていたために、ユー族の人は皆捕らえられて奴隷にされてしまいました。それ以後エジプトでは雨が少なくなり、また木を切り倒したことで砂漠化が進み、船は砂漠の中に残されたのです。

ユーという言葉が長い間に変化し、彼らユー族は現在ユダヤ人と呼ばれています。これで何故ユダヤ人が国を持たなかったか、イスラエルの地に戻りたかったかが分かるでしょう。それ以後の歴史は、イスラエル人（モーセとユダヤ人）のエジプト脱出の話や他の多くの物語でご存知と思います。イスラエルを去らず残った人たちは、後にイスラム教を取り入れ生活の基盤としました。彼らは今パレスチナ人と呼ばれています。ユダヤ人とパレスチナ人は異なる宗教を持っていますが、彼らは元々同じ国で生まれた仲の良い友達だったのです。

あとがき

弊社既刊本の“ソラからの伝言”は、インターネットの「ソラからの伝言」ホームページの読者の方たちでプロジェクトを組んで編集をしていただきましたが、その後も休み無く情報が伝えられてきました。それらの内容はこれまで知らされたことについてもさらに詳しく伝えられ、筋道はほとんど通っていきました。それでせめて日本の歴史だけでもまとめようと思い、ややこしい宇宙のことは補足だけにしておこうと思いましたが、イシカミの存在がとても重要な役割を持つために、宇宙のことも避けることは出来ませんでした。

情報はとても広範囲に渡り、チャネリングで知らされたことをまとめるだけで精一杯でし

たが、これまでの歴史で伝えられていることが、いかに権力者の都合の良いように伝えられて、それが真実であるように思われているかということを痛感しました。またある時は、かつて人間だった意識が夜中に降りてきて起こされ、思いも寄らないことを伝えられ、編集をしているとその風景が頭に浮かび、思わず涙することもありました。そして人間の思いというものは年月に関係なく、何とか真実を伝えたいと一生懸命、まさにチャンネル＝道筋を探して知らせようとしていると痛感しました。本当はどのような言葉で伝えられたか、そのままの言葉を文字にしたいほどはっきりと伝えてきて、後から調べるとそのような事実があったということがわかり、驚くことは度々でした。また、イシカミたちの作品は世界中に散らばっており、地球のためによくがんばってくれたとお礼を言いたいのと、自分の目で見て確かめたい気持ちもあります。

人間は平等でなければならないのに、地球の恵みはあまりにも偏って配分されています。地球上で悲惨な思いをされている人たちに、雲や山や岩にさえも意識があり、それらが見守り応援してくれていることを伝えたいと思っていました。読者の方の応援もあり、情報の一部をまとめた冊子をパレスチナやイスラエルの戦争遺児たちや、中東のイスラム圏の大使宛に送ったりしてきました。イスラエルとパレスチナの和平交渉が始まったことは本当にうれしいことです。イスラムの方たちだけでなくアフリカの方たちにも、黒い肌をなぜ選んで生まれてきたか、知らされた情報を分かり易いマンガにして何とか知らせたいと思っています。

最近アメリカでは「インテリジェント・デザイン（ＩＤ）＝何らかの知的な存在が生物を進化させた」とする考え方が出てきており、ダーウィンの「進化論」を否定してキリスト教の「神が人を創った」とする考え方に同調する動きがあります。ソラからの情報では意識を持つ原子自身が宇宙を作り上げているので、強いて神と呼ぶなら原子が神となります。しかしこれまでは神の名の元に争いに明け暮れていたので、神という名前は必要ではありません。原子が人間を作り上げているので、その人がどのような思いを持つかで地球の未来は決まると言います。そのため他人に依存するのでなく、自分がなぜ今生きているかということを知り、どのような地球になって欲しいかと願うことで明るい未来が開けていくと思います。

【地球という星だけに、なぜ生物が発生して人類が存在しているか】謙虚に考えて、この美しく素晴らしい地球にしてくれたイシカミや、ソラのものに意識を向け、感謝の気持ちを持って過ごしていきたいと思っています。これらの存在は、平和な地球になって欲しいと、あらゆる自然現象などで一生懸命にメッセージを送っています。山や岩、雲にも意識があることに気付き、それらのメッセージを読み取る気持ちが大切だと思います。

今回も多くの読者の方から温かい励ましのお言葉をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

なお、星原には白木姓が数件ありますが、いずれも明治維新の時に苗字を名乗られたと知らされ、この情報とは何ら関係の無いことをこの場でお伝えしておきます。

ソラからの真実の歴史
二〇〇六年二月二十日　初版第一刷発行

著者　白木 妙子（合資会社ソラと星出版）
編集　S・フミヒロ（合資会社ソラと星出版）
発行所
発売元
印刷・製本

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、
法律で定められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となります。

© TAEKO SIRAKI 2006,Printed in Japan

ソラと星出版の本

友達物語　　シロキカヨコ著

日本語・英語併記です。2 ページで分かるイシカミの物語、イシカミが伝えたかったこと、エジプト太陽の船の秘密、太古のユダヤの人とパレスチナの人の関係、イスラムの教えの本当の意味、人間が創られた意味などが分かり

地球物語　　S.フミヒロ／シロキカヨコ共著

大昔に空からひらりひらりと、まるでクラゲのようにとても柔らかな、山のように巨大で、それでいて意識のあるモノが地球に降りてきました。そのことを知らせる証拠のさまざまな岩や岩絵を集めました。

ソラからの伝言

シロキカヨコ著／ソラプロジェクト編

ソラのものの思いが、今ようやく言葉として伝えることができるようになりました。いろいろな「なぜ」に答えます。

ホシ物語　　シロキカヨコ／イトウキミ共著

星からのメッセージを主婦２人がわかりやすく童話風の本にまとめました。

星からのメッセージ第２集　シロキカヨコ著

最初の本「星からのメッセージ」出版後に次々と知らされる情報をまとめました。2000 年に伝えられた情報を日記形式でまとめています。

星からのメッセージ　　シロキカヨコ著

1999 年に空の意識体から伝えられた情報を日記形式でまとめています。地球の謎を解き明かします

ソラのものやイシカミたち、過去人間だった意識が語る宇宙、地球、
世界、日本の隠された真実の歴史



京都府綾部市　私市丸山古墳



青森県青森市　三内丸山古墳